

酒屋原遺跡

—益美地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

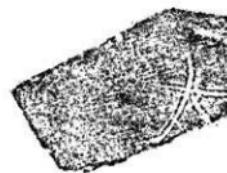


2005年3月

益田市教育委員会

酒屋原遺跡

-益美地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書-



2005年3月

益田市教育委員会

序 文

益山川の清流に沿う益田市美都町は自然に恵まれた温いで豊かな農林業地域であります。下流から仙道地区、都茂地区、丸茂地区とまとまった水田地帯が東西に並び、これに支流の小盆地が連なり、安定した農業地域を形づくっています。また、都茂地区には近代産業の一つである都茂鉱山が営まれ、活況を呈しておりました。しかし、産業構造の変化によって閉山に追い込まれ、さらに近年は農林業においても衰退現象が現れ、過疎化の進行とあいまって地域の発展に大きな影響が出てきているところです。

こうした状況の打開策として農業構造の改善が図られて参っておりますが、その事業の一環として「益美地区中山間地域総合整備事業」が実施されることとなりました。これにともなって事業地における埋蔵文化財の調査が必要となり、旧美都町教育委員会では、急速調査担当者を配置して発掘調査を実施するところとなりました。ここに報告する酒屋原遺跡は仙道地区における圃場整備事業に関連する発掘調査の報告書であります。

本遺跡調査によりまして稻作農業開始の時代の上器を初めとして古代・中世の遺構と遺物が多數出土し、従来、まったく知られていなかった当地の状況や益田川流域全体の歴史の解明にとって貴重な知見がえられたことはまことに喜ばしく、ここに調査に指導・協力いただいた関係諸機関、各位に深く感謝を申し上げるところです。

仙道地区は『益山家文書』等によりますと益田氏中興の英主益田兼見の出自地とされております。この度、酒屋原遺跡が調査され、ここに古代の地方役所、あるいは中世の有力士豪の本拠地が置かれたのではないかと想定されたことは上記史料上の記述に照らしても大いに興味がもたれます。

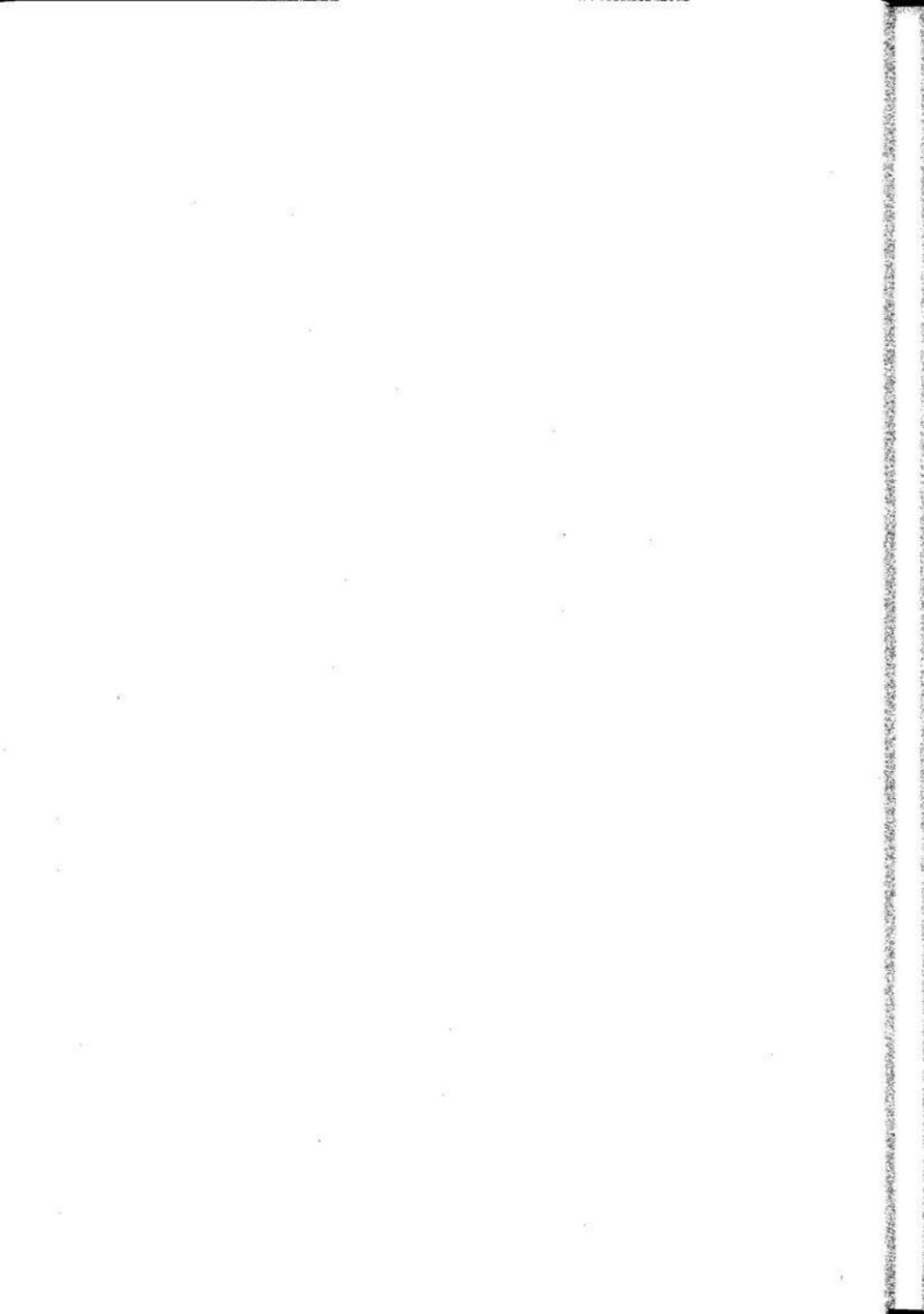
今後、さらに一帯の文化財調査が継続され、それに基づく地域史研究が進展して益田川流域の歴史や益田氏に関する豊かな事象の判明を大いに期待するところです。また、そうした調査研究による地域特性の解明をうけていっそうの地域振興を図ることが肝要であろうかと存する次第であります。本書が地域の調査研究の一端を担い、当地の歴史研究と地域振興に資することを衷心より願って止みません。

なお、本報告書の刊行事業は美都町と益田市の合併により益田市教育委員会が所管いたすこととなり、標記の体裁をとりました。この件を追伸して事情に理解をいただくとともに、各位にさらなる指導と鞭撻をお願いいたします。

2005（平成17）年3月

益田市教育委員会

教育長 陶 山 勝



例　　言

1. 本書は、1998（平成10）年度旧美都町教育委員会が国・県の補助金を得て実施した埋蔵文化財分布調査並びに1999（平成11）年度に島根県益田農林振興センターの委託を受けて実施した益美地区中山間地域総合整備事業予定地内（美都町仙道所在）の酒屋原遺跡（美都町仙道所在）の発掘調査報告書である。

平成16年11月1日をもって美濃郡美都町が益山市と合併することとなり、本書の刊行業務が益田市教育委員会に移管された。よって、本書の発行は益田市教育委員会が行なうことになった。

2. 調査は島根県教育委員会文化財課の指導のもと、下記のような体制で行なった。

事務局	美都町教育委員会 教育長	山鳥俊文（平成12年度～）
	〃	屋敷茂夫（平成10・11年度）
	総務課長	高橋和則（平成14年度～）
	〃	潮 良子（平成10・11年度）

調査員	島根県教育委員会文化財課	守岡正司
-----	--------------	------

調査担当者	美都町教育委員会総務課	河野敏弘
-------	-------------	------

3. 本書の執筆・編集は田中義昭氏主宰の「いなか舎」の全面的な協力を得て河野敏弘が行なった。

4. 発掘作業及び遺物整理には次の方々が従事された。ここに御芳名を記し、調査完遂への御尽力に対して厚く感謝を申し上げる。

平成10年度

〔発掘作業員〕	岡原良夫 大石弁吉 齋藤 登 高橋富雄 寺井恭介 西田昭一
---------	----------------------------------

〔遺物整理作業員〕	海老谷美紀 山浦律恵
-----------	------------

平成11年度

〔発掘作業員〕	岡原良夫 大石弁吉 草野幸子 齋藤 登 佐々木義三 澄川正人 高橋富雄 寺井恭介 藤岡千鶴子 大山繁男 野村さなえ
---------	---

〔遺物整理作業員〕	田浦律恵 中村恵美
-----------	-----------

5. 調査の遂行にあっては下記の方々から指導並びに助言をいただいた。記してお礼を申し述べる。

調査指導	島根県教育委員会文化財課	西尾克己
	〃	守岡正司
	島根県文化財保護審議会委員	田中義昭
	益田市教育委員会文化振興課	木原 光
	二瓶自然博物館学芸員	中村唯史

6. 本書収載の遺構・遺物の実測図作成と写真は下記の方々の手によるものである。
浅野智子 井上喜代女 福原恭子 藤原 舞 村田理恵 山本敦子 山本春香（以上、「いなか舎」舎員）
7. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
TP（試掘坑） P（柱穴） SD（溝） SB（建物） SK（土坑） SPL（ピット列） SR（石組・道路状遺構）
8. 遺跡の測量業務については以下の業者に委託した。
(株)ワールド山陰支社 (株)益美コンサルタント
9. 収載の遺跡に関する写真は河野敏弘が撮影した。出土遺物については会下和宏（島根大学埋蔵文化財センター）に撮影をお願いした。御協力に感謝を申し上げる。
10. 遺跡の立地地形等に関して中村唯史氏（三瓶自然博物館サヒメル）より玉稿をお寄せいただいた。記してお礼を申し上げる。
11. 出土木製品の材質に関しては鳥根大学総合理工学部の古野毅教授に鑑定していただいた。記してお礼を申し上げる。
12. 本遺跡に関する調査記録と出土品は益田市美都総合支所資料室において保管している。

本文目次

第1章 発掘調査の経緯と概況	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 遺跡の位置	9
第2節 美都町内遺跡の分布状況からみた地域の歴史的環境	9
第3章 地層と遺構	17
第1節 1区の基盤層と遺構	17
第2節 2区の基盤層と遺構	18
第4章 出土遺物	31
第1節 概要・須恵器	31
第2節 貿易陶磁器類	34
第3節 国内産陶器・土師器・その他の土器	36
第4節 石器・その他の遺物・木製品	39
第5章 総括	73
特論1 酒屋原遺跡堆積層の特徴	76
特論2 酒屋原遺跡出土木製品の樹種調査について	79

挿図目次

第1図 益田市美都町の位置	1
第2図 発掘区模式図	6
第3図 1区の発掘	7
第4図 2区の発掘	8
第5図 酒屋原遺跡の位置と地形図	12
第6図 美都町域遺跡分布図	13~14
第7図 1区=A・B区遺構分布図	20
第8図 1区=C・D区遺構分布図	21
第9図 1区=E・F区遺構分布図	22
第10図 1区=G区遺構分布図	23
第11図 1区 石組遺構 (S R01・02) 平面図・断面図	24
第12図 2区 石組遺構 (S R03・04) 平面図	25
第13図 ①S D01平面図、②1区=B・C間土層図、③2区S R03石列立面図、 ④2区=B・C区横断土層図	26

第14図 P 12、P 28の平面図・断面図	27
第15図 2区須恵器甕・円面鏡出土状態の図	27
第16図 ピットの規模別分布図	29
第17図 I群ピットの規模別分布図	29
第18図 II群ピットの規模別分布図	30
第19図 III群ピットの規模別分布図	30
第20図 出土遺物実測図（その1）	41
第21図 出土遺物実測図（その2）	42
第22図 出土遺物実測図（その3）	43
第23図 出土遺物実測図（その4）	44
第24図 出土遺物実測図（その5）	45
第25図 出土遺物実測図（その6）	46
第26図 出土遺物実測図（その7）	47
第27図 出土遺物実測図（その8）	48
第28図 出土遺物実測図（その9）	49
第29図 出土遺物実測図（その10）	50
第30図 出土遺物実測図（その11）	51
第31図 出土遺物実測図（その12）	52
第32図 出土遺物実測図（その13）	53
第33図 出土遺物実測図（その14）	54
第34図 出土遺物実測図（その15）	55
第35図 出土遺物実測図（その16）	56
第36図 出土遺物実測図（その17）	57
第37図 出土遺物実測図（その18）	58
第38図 下駄・案・その他木製品遺物実測図（その19）	59
第39図 木製品遺物実測図（その20）	60
第40図 酒屋原遺跡出土上器・陶磁器の比率	71

表 目 次

第1表 美都町内域遺跡地名表	15
第2表 I区ピット規模別表	28
第3表 出土遺物観察表	61
第4表 発掘区分別出土遺物数一覧表	72

写真図版目次

- 図版 I 酒屋原遺跡の全景（西方から東方を望む）
- 図版 II の上段 遺跡の全景（西上方より）
II の下段 1区（左側）、2区（右側）の全景（南西上方より）
- 図版 III の上段 1区=A～D区のピット群・SD01・SR01（上方より）
III の下段 1区石組遺構（SR01・02）の全景（上方より、右下SR02）
- 図版 IV の上段 1区遺構検出状態（北より）
IV の下段 1区=C区ピット検出状態（南東より）
- 図版 V の上段 1区=C区ピット検出状態（東より）
V の下段 1区石組遺構（SR01）検出状態（北西より）
- 図版 VI - 1 1区=C区P42検出状態
VI - 2 1区=A区P3土師器（中世）出土状態
VI - 3 1区=F区下駄出土状態①
VI - 4 1区=F区下駄出土状態②
VI - 5 1区=B区P28白磁碗出土状態
VI - 6 1区=B区P28褐釉壺出土状態（壺の下より）
- 図版 VII の上段 2区石組遺構（SR03、SR04）全景（南西上方より）
VII の下段 2区石組遺構（SR03、SR04）全景（上方より）
- 図版 VIII の上段 2区石組遺構（SR03、SR04=手前）検出状態（南より）
VIII の下段 2区石組遺構（SR03、SR04=左）検出状態（東より）
- 図版 IX の上段 出土遺物（須恵器） その1
IX の下段 出土遺物（須恵器） その2
- 図版 X の上段 出土遺物（須恵器） その3
X の下段 出土遺物（覗） その4
- 図版 XI の上段 出土遺物（須恵器） その5（外側）
XI の下段 出土遺物（須恵器） その6（上内面）
- 図版 XII の上段 出土遺物（白磁・青磁） その7
XII の下段 出土遺物（白磁碗） その8
- 図版 XIII の上段 出土遺物（青磁・国内外陶器） その9
XIII の下段 出土遺物（土瓶器） その10
- 図版 XIV の上段 出土遺物（繩文・赤生土器） その11
XIV の下段 出土遺物（石器・羽口・古鏡他） その12
- 図版 XV の上段 出土遺物（下駄） その13（表面）
XV の下段 出土遺物（下駄） その14（上内面）
- 図版 XVI の上段 出土遺物（下駄他） その15（下駄は表面）

- XVIの下段 出土遺物（下駄他） その16（下駄は上図裏面）
- 図版 XVIの上段 川十遺物（木製品） その17
- XVIIの下段 出土遺物（木製品） その18
- 図版 XVIIIの上段 出土遺物（須恵器） その19
- XVIIIの下段 遺物出土状態（その19の須恵器）

第1章 発掘調査の経緯と概況

第1節 調査に至る経緯

〔遺跡調査の発端〕 美都町教育委員会（以下、町教育委員会）では、益美地区中山間地域総合整備事業による酒屋原地区の圃場整備事業に先立ち、平成10年9月7日付で益田農林振興センターから当該区内の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会を受けた（第1図）。

〔分布・試掘調査〕 このことに関して、町教育委員会では文化庁の国庫補助事業を申請し、裁可をえて平成10年度に事業予定地内の遺跡分布調査と試掘調査を実施した。圃場整備計画地の総面積は6.3haで、この全域に2×2mの試掘坑を52箇所設定し、掘削を行った。その結果、相当多数の試掘坑から遺物の出土があり、遺跡がかなりの範囲に広がっていることが明らかになった。とくに、周知の遺跡として登録されている「水池遺跡（遺物散布地）」とされた東仙道公民館西側では多数の陶器類・土師器片が出土し、遺構の存在も予測できた。同じく公民館の南側でも多くの須恵器片が採取された。

〔調査に関する関係機関との協議〕 試掘調査の結果から公民館周辺には古代・中世の遺構の存在が推定されたので事後の遺跡への対処方について11月13日県教育庁文化財課と協議し、あらためて遺跡の範囲を確定するとともに圃場整備工事によって掘削される箇所については全面発掘調査を実施することとなった。平成11年2月19日、この件を益田農林振興センターに報告し、本調査必要と回答した。本調査実施に関する具体的な協議は2月25日に行い、調査費は同センター負担、受益者負担金は美都町側が受け持つこととし、6月3日付で協定書を締結した。

〔酒屋原遺跡〕 なお、遺跡の名称については、試掘調査から周知の「水池遺跡」を含めた広範囲に遺跡の広がることが知られたので一帯の地名をとって「酒屋原遺跡」（さかやばらいせき）と命名した。したがって「水池遺跡」の名称は解消されることになる。



第1図 益田市美都町の位置

第2節 本調査の経過

〔本調査の経過〕(第2図) 平成11年7月16日付で島根県教育委員会宛て埋蔵文化財の発掘調査に係わる書類(文化財保護法第57条3-1項)を提出、7月19日から調査に着手した。調査の対象範囲は遺構の存在が推定された公民館敷地の西側から南側にかけてのベルト状平坦面である。調査を進める上での便宜から西側部分を1区(長さ75m、巾5~17m)とし、南側の部分は2区(長さ60m、巾10m)として発掘することとした。作業の当初は重機による表土(耕作土=約40cm)掘削を行い、遺構面と推定される面の10~15cm上までの土を除去した。

遺構検出を目的とする調査は困難な中にも順調に推移し、9月下旬には1区でおよその遺構を検出し、9月29日にはラジコンヘリによる空撮を行なった(株式会社・ワールドによる)。また2区についても10月8日に空撮を実施した(同じくワールドによる)。その後、遺構の実測作業を精力的に進め、10月29日に現地調査を終えた。確認できた遺構はピット列、敷石遺構(道路遺構か)、溝、土坑、石列状遺構等で、遺物は織文土器、弥生土器、土師器、須恵器、白磁、青磁、陶器、瓦質土器、鉄斧・羽口、石器、下駄等の木製品で総重量は遺物コンテナー30箱分に達した。

調査期間中の8月17日には地元児童を対象とする発掘体験会を開き、10月3日には現地説明会を行なった。地元町民を主体に50名の参加があった。また、9月6日・10月4日に県教委から守岡正司氏が、9月17日・10月2日には島根県文化財保護審議会委員山中義昭氏が来跡され指導をいただき、9月23日には島根大学地球資源環境学科の徳岡隆夫教授の紹介で中村唯史氏(現三瓶自然博物館学芸員)が来跡され、主として付近の地形と遺跡の立地について指導をいただいた。

〔遺構・遺物の検出状況〕1区:この区は南北に長い帯状の平坦面で益田川の方向に向かって張り出した回廊状の丘陵裾部に当り、西側から緩く傾斜していく。調査区(75×5~15m)はこれを仮に10m間隔で区切り、北側から順にA~Gの小区に分割して調査を行った。各区の概況は以下のとおりである(第3・4図)。

1 A区=床土(また黄橙色疊混層・ニガ土)下部に薄く礫が混ざる暗褐色土の堆積があり、これを除くと礫を含む硬い面が検出された。この面の中央から南東寄りで大小のピットが検出された。P3ではあたかも穴の周辺を削るように角礫が並び、P4では埋土中でピットの壁に立て掛けたような状態で土師器(中世)の杯が出土した。遺構検出面は標高90.8~90.9mを測り、1区内ではもっとも高い部分に当る。区の西際から須恵器の高台付环身片や甕の破片が出土したが、遺物の量は少ない。

1 B区=床下上部に黒褐色砂疊混層(厚さ5cm前後)があり、さらに暗茶灰色の砂疊層がみられた。暗茶灰色砂疊層上面は硬く縮まり、この面から多数の大小ピットと南東より北西に直線的に掘られた小溝遺構(SD01)が検出された。面の標高は90.6~90.8mでA区より少しレベルダウンしている。出土遺物には須恵器の輪状つまみ付き蓋片や高台付の身片、束縛系鉢片、白磁碗片(V類)、同安窯系青磁皿片(A類)、土鍤等がある。注目

されたのはP28としたピットから口縁部を欠く白磁碗とその下から下半分を欠失した褐釉四耳壺が重なった状態で見出されたことである。また、浅いピットのP12では底に土器片（中世）の小皿が出土している。なお、暗茶灰色層からは弥生前・中・後期の土器片がやや多く検出されている。これらの弥生土器は磨耗が顕著で原地から移動したものと考えられる。以上の他に下駄も出土している。

1C区=層序は1B区と同様である。遺構面と考えられる面は90.6~90.8mでB区と変わらないが、南西部がやや低い。検出された遺構としては大小のピットがあり、P45からは下駄と土器片（中世）の破片が出た。P46、P48、P51等からも土器片（中世）がえられている。また、P42ではピットを挟んで対面に角礫2個が検出された。注意されたのはピット群が概して南東→北西方向に列状に並び、SD01に並行するかのように見えることであった。なお、調査区西縁に沿ってほぼ等間隔に打ち込まれた杭列が検出されたが、床土を貫いており、近代の鞋にともなう遺構と考えられた。この杭列はG区まで一直線に延びている。出土遺物の量は多く、須恵器の环蓋（古墳時代末期・輪状つまみ）、高台付き环身・壺・高杯・甕、白磁碗（N・V類）・皿（M-C類）、同安窯系青磁皿（A類）、龍泉系碗（D類）、石鍋、鉢（須恵質）中世土器片、十鍾、弥生前期土器等が破片で出土している。他に打製石斧1点と下駄もあった。

1D区=層序は褐灰色の疊混層の下部に黒褐色土層がある。その下に遺構面が広がるという構成であった。遺構面は中央が高く、標高90.75m。北西部がやや低く、90.45mと計測され、C区の南西部からこの区の北西部はごく浅い谷状をなしていることが知られる。遺構としては東寄りに大小のピット群、南西部に広く角礫・円礫を敷並べた石組遺構が検出された。この遺構は遺構面を浅く皿状に掘り込み、そこへ黒褐色土を詰め、その上に礫を敷並べる。礫は成人の頭大のものから幼児の頭大まで大小さまざまであるが、大型の石は縁辺に小型を中程に置くといった傾向が看取された。また、平面的にみると先端部が「Y」字ないし「U」字状に分岐しているやにも思われる。この石敷遺構は、さらにE区内にも帯状に延びており、その方向はSD01やC区のピット列とも並行しているので道路とすることも可能であろう。

遺物は石組遺構付近で多く出土した。内容は須恵器片の輪状つまみ付き蓋・高台付き身・長颈壺・台付き壺・甕、白磁碗（N・K類）・皿、同安窯系青磁碗（A類）・龍泉窯系碗（E類）、茶臼、備前系擂鉢（N期）、瓦質擂鉢、土器甕・壺（中世）、十鍾等である。また、繩文土器、弥生土器（後期末）、磨石、石器、輪羽口、鍛冶溝、古錢等複数の時代にわたる多彩な遺物が出土している。量的に多いのは須恵器や白磁・青磁類であった。

1E区=B・C区より小さい方形の発掘区。遺構面の標高は北東部が高く、90.8m。南西部が低く90.5mで面が南西方向に少し傾斜している。遺構はD区から続く石組遺構で北西から南東に直線的に延びている。F区との境界線上では東西方向に石が並ぶので、あるいはここで方向を変えていたかとも考えられる。石の並びに粗密はあるが、傾向としてはD区で観察された状態と同じであった。石組遺構の上面には暗灰色または黒褐色土が覆っ

ているが、部分的には黄灰色ないし赤褐色砂質土もみられ、この付近より西南方で地形の変化することが予想された。

遺物としては須恵器の輪状つまみ付き壺蓋・壺、白磁碗（IV類）・皿（VI類-c）、龍泉窯系青磁碗（B3・E類）、十師器鉢、弥生前期土器等が出土している。

1 F区=方形区画の発掘区である。ここでは床土下に緑灰色・黒褐色砂礫土層があり、次いで黄橙色砂質土層、その下部にA区から続く遺構面（礫混じりの暗灰色粘質土層）が広がっていた。遺構面の標高は東側が高く、90.8~90.9mを示し、西側が下がって90.5mを計測している。つまり、西に向かって10mで30~40cm低くなっている。遺構としては北西寄りで礫の群集する箇所が検出された。石の頂面が標高90.6m前後で揃っていることから右組遺構であるとみなされる。D・E区の石敷遺構の一部から枝分かれしたもの、すなわち、道路の残存部の可能性がある。この石組遺構近くで下駄が出土した。

遺物は須恵器の壺とその蓋・高台付き壺身・甕・円面硯、瓷器系？・白磁碗（V類）、朝鮮製陶器、「サナ」、下駄、木製品等である。

1 G区=最南端の発掘区。土層の状況はF区とはほぼ同様であった。遺構面とみられる面の標高はF区寄りが低く、90.5~90.6mを測り、中央から西・南部は90.7~90.8mであった。検出された遺構としてはピット1個のみである。遺物には須恵器の高台付き壺身片等が少量と下駄等がある。遺構・遺物の数量からみてこの付近が遺跡の南限と考えられる。2区：この区は1区の南東で公民館敷地の南縁に沿って設けられた。長さ60m、巾10mの長大な調査区であるが、これを西側からA~F区の6区に分け、表上（耕作十）を重機で除去した後に発掘した。地表面の標高は公民館敷地斜面据で92.0m、発掘区の西側で90.5m前後が計測されている。そして、南西方向に緩く傾斜する地形が看取されるので、元はもう少し急な斜面であったことが考えられる。水田はこのような斜面の山側を削り、谷川を埋めて造成され、その水田面の標高が90.5m前後と計測されたわけである。耕作十下部の上層は全体に南方向に傾斜し、礫を含む砂質・粘土質の層が累積していた。湧水も多かった。各区の状況は次のとおりである。

2 A区=床土下の赤橙色・灰褐色砂礫層（約60cm）を掘削したが、遺構らしい箇所は存在せず、遺物もごく少量であった。出土したのは高台付き壺身・甕、白磁碗（V類）、繩文晩期の鉢等の破片である。

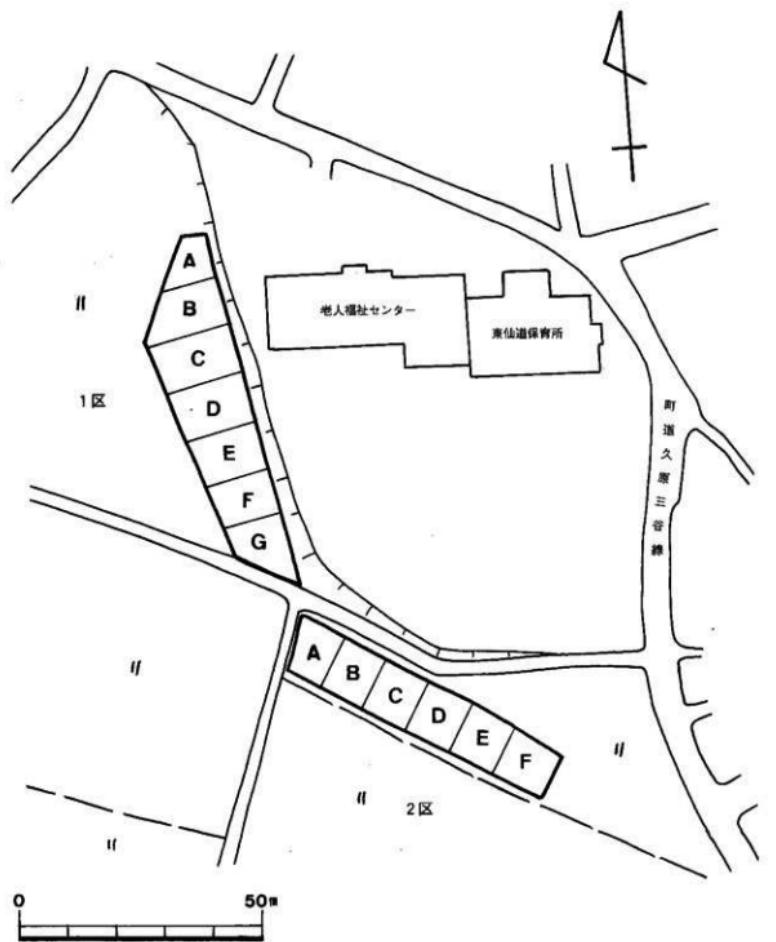
2 B・C区=B区とC区では並行する帯状の石組遺構が検出されたのでまとめて説明する。土層は床土下に青灰色砂質土層があり、次いで黒褐色粘質・砂礫層が堆積していた。この層は異臭を発する有機物を含んでいる。さらに下部に行くと暗青灰色粘質砂礫層がみられ、須恵器や白磁、木製品（下駄、建築部材）等の遺物が多く出土している。この層の下には灰褐色で砂礫が混じる粘質土層が存在していた。帯状の石組遺構は北西から南東方向に延びている。この遺構頂部の標高は90.2m±20cmでほぼ平坦である。

遺物としては須恵器の輪状つまみ付き壺蓋・高台付き壺身・壺・長頸甕・高台付き壺・甕・円面硯、白磁碗（IV・V類）・口禿皿（K類）、同安窯系青磁？（I類）、龍泉窯系青

磁碗（I・B・E類）、中国製合子、上師質羽釜、上師器人皿・甕・高台付き皿、弥生前期土器、磨石、北朱鉄、下駄や木製品等々が出土している。

[2D区]=この区の層序はC区と基本的には変化がない。石組遺構の延長部を捉えることはできなかったが、出土遺物の量はかなり多い。それらは主として石組遺構に被る灰褐色粘質砂疊層に包含されていた。内容は須恵器の輪状つまみ付き坏蓋・高台付き坏身・壺・高台付き壺・甕、東播系鉢、白磁碗（V・K類）、龍泉窯系青磁碗（I・B類）、中世上師器皿、弥生中期土器等である。

[2E・F区]=この2区も同時に掘り下げたのでまとめて説明する。明確な遺構は認められなかったが、B～D区同様に灰褐色粘質砂疊層から遺物の出土がみられたが、量的には他の区より少ない。注目されたのはE区で須恵器の甕（奈良時代）がほぼ一個体分押し潰されたような状態で検出されたことである。また、近くでは円面鏡も出土している。その他の遺物としては須恵器の輪状つまみ坏蓋・高台付き坏身、龍泉窯系青磁碗（I・B類）、磨石等である。



第2図 発掘区模式図



1. 1区発掘風景（南東より）



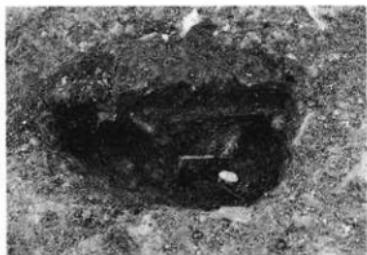
2. 1区石組（SR01）検出作業（北東より）



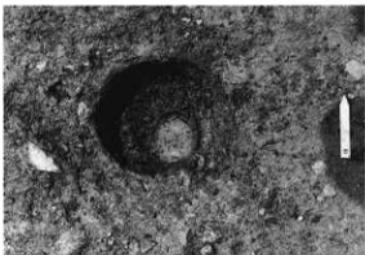
3. 1区=C・D区発掘風景（北東より）



4. 1区石組（SR01）の遠景（北東より）



5. 1区P 45の検出状態（下歯出土）



6. 1区P 12検出状態



7. 1区=F区・下歯・木品製品出土状態



8. 1区P 28褐釉壺出土状態

第3図 1区の発掘



1. 2区発掘風景（西より）



2. 2区発掘風景（東より）



3. 2区石組（SR03）検出作業（西より）



4. 2区=B・C区间土層検出状態（北東より）



5. 2区=B・C区间土層・石組（SR01）
検出状態（南より）



6. 2区=C区木製品出土状態（南東より）



7. 2区=E区須恵器の大甕出土状態（東より）



8. 2区=E区内面鏡出土状態

第4図 2区の発掘

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置（第5図 図版I・II）

酒屋原遺跡は島根県益田市美都町仙道257・287・288番地4に属し、座標は北緯34度40分45秒、東経131度56分10秒である。美都町域は島根県西部にあり、益田市の東南部を広く占める。北に浜田市・三隅町・赤堀村と、南に益田市匹見町とそれぞれ境を接している。東西の距離15.8km、南北の距離11.6km、総面積132.64km²を測る。地形上は中国山地の北側に広がる低山丘地帯で、標高は嶺線に近い東部が高く（約1,000～600m）、海岸部の益田市境付近の西部が低い（約50～70m）。町域の87%は林野となっている。

主要河川としては東南部の春日川（標高989.2m）に源を発し、町域を西下して日本海に注ぐ益田川と三隅川の支流である板井川、矢原川、丸茂川がある。益山川には、深折川、笹利川・都茂川、清水川、三谷川、波田川の支流がある。干流と支流の合流箇所には小盆地が開けており、町内の主要な水田地帯となっている。すなわち、下流の益田・中倉川・三谷川合流地が仙道地区であり、益田・都茂川の合流地が都茂地区で、本地区が町の中心部をなす。酒屋原遺跡は仙道地区のはば中央部に位置している。

遺跡が営まれた箇所は益田川右岸の低平地に向かって張り出した段丘面で標高は90m前後。川沿いの水田面からの比高は3～4m程度である。当該箇所は北西に三谷川の谷口があり、北には支流中倉川の深く細長い谷が東西に延び、南に益田川の本流が東から西に向かって流れている。遺跡は益田川と中倉川に挟まれた丘陵先端の段丘平坦面（標高100～140m）全体に広がると考えられる。遺跡中央部からは仙道地区一円を見晴らすことができ、すこぶる良好な集落立地の条件が備わっている。この平坦部では土器・陶磁器等の遺物も採集される。また、丘陵中腹には中世創建と伝えられる神宝山八幡宮が鎮座する。酒屋原遺跡はこの平坦部（東西約200m、南北約300m）に広がる大遺跡の南西の一角を占める遺跡（一区域）ということができる。

第2節 美都町内遺跡の分布状況からみた地域の歴史的環境（第6図 第1表）

美都町内では、從来考古学的な遺跡の存在はあまり知られていなかった。1988（昭和63）年刊行の『島根県遺跡地図』Ⅱ（石見編）ではわずかに20箇所が登録されるに過ぎなかった。その後、城跡や製鉄関連遺跡の踏査が行なわれ、圃場整備等の開発事業に伴なって遺跡の発見があり、1992年版の『増補改訂島根県遺跡地図』Ⅱ（石見編）では登録遺跡数が倍増した（52箇所）。さらに、2002（平成14）年版『増補改訂島根県遺跡地図』Ⅱ（石見編）では70箇所が登録されるに至っている。この期に町内ではさまざまな土木開発が行なわれ、これに伴なって遺跡の本格的調査がようやく進み始めた結果である。以下、発見・調査された遺跡の分布状況や内容に即して町の歴史を辿ることとする。

昨今、多くの地域で旧石器時代の遺跡発見があるが、本町内では未だこの時代の遺跡は知られていない。しかし、匹見町道川地区では国道191号線沿いで新墳原遺跡が発掘されていることなどからしても近い将来に旧石器が発見される可能性は十分あるといえる。

次に、縄文時代遺跡は数例ではあるが、その存在がようやく知られるようになった。一

川地区の本郷遺跡では晩期土器や石器等が他の時代遺物とともに出土した。今回調査の酒屋原遺跡に近接する前遺跡でも晩期土器が見つかっている〔註1〕。今後、類例の遺跡が増えることが予測される。現状でいえば、本町の開拓史の始原が採集経済の縄文時代にあることは確実になった、ということである。

本格的な稻作農業時代の幕開けとなる弥生時代の遺跡・遺物も最近数多く判明してきた。

都茂地区屋敷平の唐干田遺跡では後期土器がかなりの量で出土し、酒屋原遺跡の南対岸にある龍光遺跡や周辺でも弥生後期土器が出土し、本町域に弥生時代から農民集落の営まれたことが明白となった。さらに、今回、酒屋原遺跡から弥生前・中・後期の土器が出土したことは本町においても益田平野、匹見盆地等と同様に稻作農業開始期当初から一貫して水田耕作が行なわれたことを物語る事実として重要である。益田川中流域とその支流の谷間では弥生時代の初期から稻作が盛んであったと考えて差し支えない状況になってきた。

古墳時代については、以前から三谷地区の三谷古墳群が有名であった。三谷川に沿う平地を見下ろす山腹に2基の横穴式石室が開口している。「山寄せ」古墳といわれるタイプで墳丘の規模等ははっきりしない。1号墳の石室は全長約5m、割石積みのやや胴張り状無袖石室である。この種の石室は石見地方の山間部に広くみられるとされるが、その背景ははっきりしない。古墳の年代は出土した須恵器の形状から7世紀中頃を下らないと考えられる。この墳には三谷川筋の平地に展開する集落をまとめる有力者が存在したことを教える古墳と思われる。都茂地区の屋敷平古墳（横穴古墳）等も同様に考えることができよう。

奈良時代から平安時代にかけての歴史も不明な部分が多い。その中で古代政権がまとめた記録『続日本後記』の承和3（836）年と『三代実録』の元慶5（881）年の記事はいずれも都茂丸山銅山開発に関するもので、9世紀代にこの銅山操業に当時の政府が本腰を入れて取り組んでいた様子がうかがえる。考古学上では、これまでにそうした記述を裏付ける遺跡・遺物は知られていないかったが、近年、都茂地区の山斜で大年ノ元遺跡が発見されたことにより、その実相の一端が垣間みられるところとなった。この遺跡は、益田川の扇状地にあり、中世後期に属する方形の堅穴遺構と土器・陶磁器類・鉢津が出土している。将来発見される蓋然性は高いといえる。政府の出先機関ないしは行政の末端組織の存在が推定させる事実としては奈良・平安時代の遺物、とくにヘラ焼き土器と硯の出土した酒屋原遺跡が大いに注目されるところである。

小原地区の三谷川岸にある栗島原遺跡も古代末から中世初期頃の看過できない遺跡である。この遺跡は低段丘面に営まれた墓地遺跡で、掘り出された長方形の土坑墓からは同安窯系の碗2個、白磁皿5枚、青白磁合子、銅鏡（湖州鏡）がセットで検出されている。これらは当時の有力者が好んだ舶来品であり、その身分を表す遺品と思われる。この地に根を張り、一帯を支配した小領主の墓ではないだろうか。先に説明した二川地区的本郷遺跡

からも湖州鏡が出土している。また、丸茂地区では森下遺跡が調査され、総柱建物跡等が検出され、輸入陶磁器類を初めとして多くの土器・陶磁器が出土している。ここは中世土豪丸茂氏の本拠地で、森下遺跡はその屋敷跡とみられる。

関連して注目されるのは上記の酒屋原遺跡で、この遺跡から白磁や青磁等の輸入陶磁器等が大量に掘り出されたことをあげなければならない。結論的いえば、ここに古代から仙道地区と周辺に勢いを広げていた有力土豪の屋敷の存在が想定されることと、同時に益田氏中興の英主益田兼見の出自地が仙道にあることとの関連性にも大いに関心がもたれるところである。酒屋原遺跡の北西にある東仙道上居遺跡は中世前半期の宝篋印塔等が発見され、やはり土地の有力者の墓地とされる。この遺跡も酒屋原遺跡と深い関連性をもつと思われる。

いずれにしても、古代末から中世にかけて仙道地区が益田川中流の優勢な地域であったことを示す事実ということができる。今後は、仙道地区の入口付近に築かれた四つ山城跡（分立する四つの山頂に郭があり、東端のものが主郭とされる。主郭周囲斜面には連続堀切や戸門跡が発見されている）や板井川地図の板井川城跡（郭、堀切、堅堀等をもつ）を初めとする中世の山城群や三谷地図・専教寺下遺跡、丸茂地区宮下遺跡等の土師器・陶磁器類が採集された集落遺跡の調査研究を進めて古代から中世の益山川・三隅川中・上流域における開発状況を明らかにする必要性を感じられる。

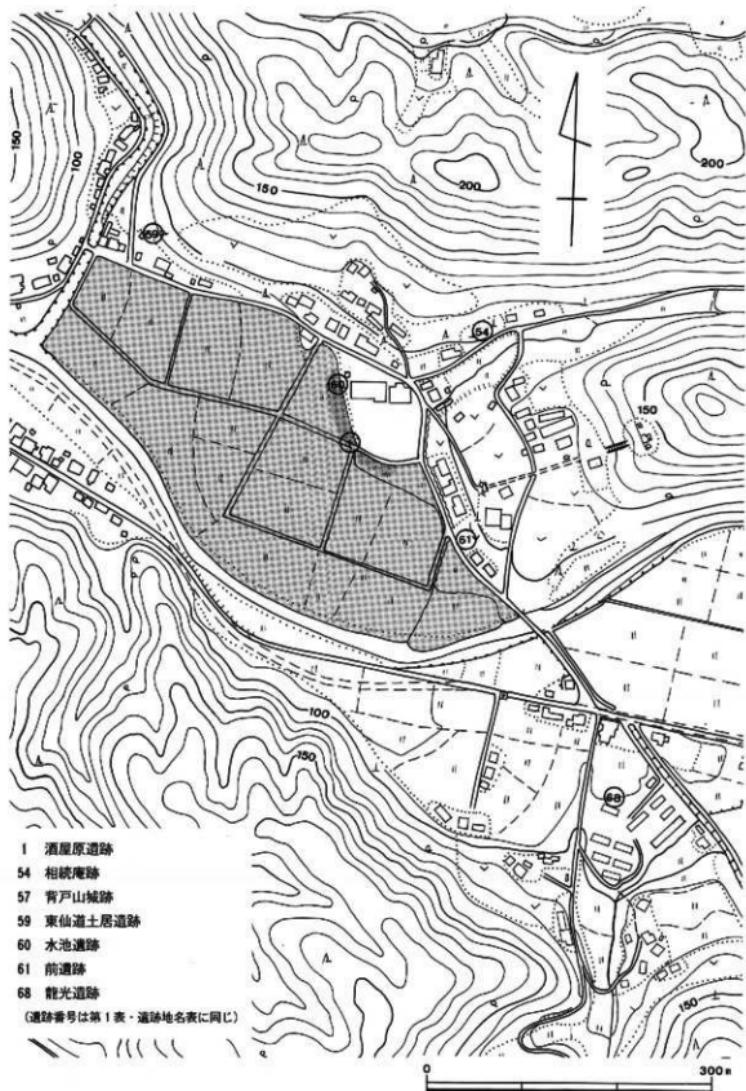
町内遺跡の約30%強は製鉄関連の遺跡である。これらはおむね中世・近世の遺跡と考えられるが、実態はまったく不明である。文献によれば東部山間地を中心近世たらが盛行したとされている。なお、町指定史跡夏山墓地はこの地の十豪で庄屋を勤めた齋藤氏一族の墓地である。

美都町域における文化財調査はようやく軌道に乗り始めたところである。今後、さらなる調査の積み上げによって益田川と三隅川の中・上流域の歴史がより詳細に解明されることが期待されよう。

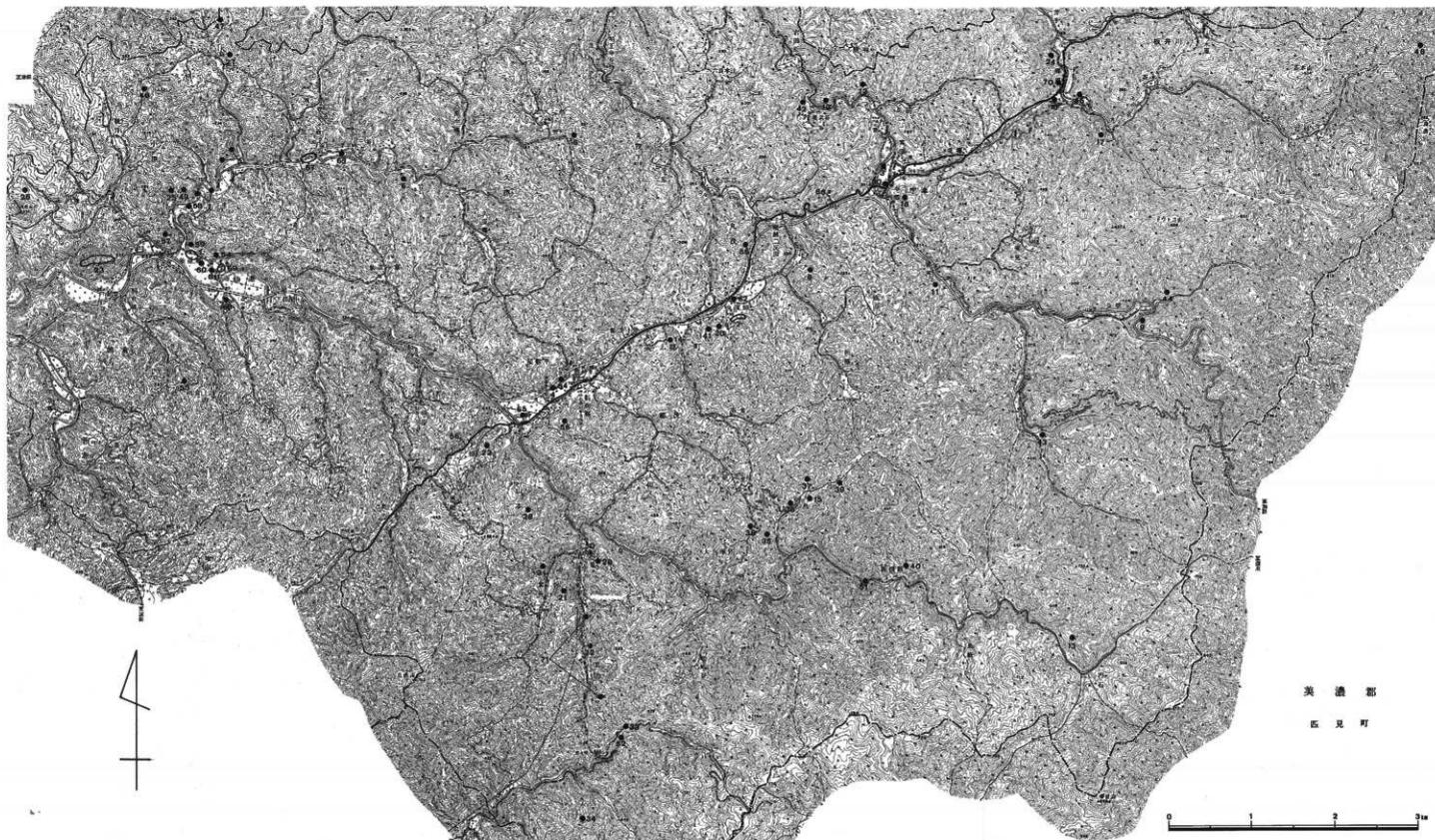
註1：前遺跡＝この遺跡は酒屋原遺跡の南東部に位置し、八幡宮が鎮座する丘陵の裾部に立地している。おそらく、酒屋原遺跡とともに大規模な遺跡の一角を占める遺跡と考えられる。ここから採集された鐵文土器が斎藤登氏より提供されたことでその存在が明らかになった。

参考文献

- 島根県教育委員会編『島根県遺跡地図』II（石見編） 1988年。
- 島根県教育委員会編『増補改訂島根県遺跡地図』II（石見編） 1992年。
- 島根県教育委員会編『増補改訂島根県遺跡地図』II（石見編） 2002年。
- 島根県教育委員会編『島根県中世城跡分布調査報告書（第1集）石見の城跡』1997年。
- 鈴政信市著『美都町史』美都町史編さん委員会編 1968年。
- 内藤正中編『日本歴史地名人系33 島根県の地名』平凡社 1995年。



第5図 酒屋原遺跡の位置と地形図 (濃いアミ=発掘調査区)
(薄いアミ=試掘調査区)



第6図 美都町域遺跡分布図

第1表 美都町内域遺跡地名表

番号	名称	種別	概要
1	酒屋原遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器、須恵器、陶磁器、円面鏡
2	森下遺跡	集落跡	須恵器、土師質土器、陶磁器、石斧
3	お熊ごろ古墳	古墳	円墳、石積墳丘
4	屋敷平横穴・遺跡	横穴・散布地	土師器
5	三谷古墳群	古墳	2基
-1	三谷1号墳	古墳	円墳、須恵器
-2	三谷2号墳	古墳	円墳、須恵器
6	都賀根城跡	城跡	刀劍
7	小原古墳群	古墳	2基
-1	小原1号墳	古墳	
-2	小原2号墳	古墳	円墳
8	丸茂上新塚	新塚	
9	長橋の庵寺跡	寺院跡	
10	忠則寺跡	寺院跡	
11	道智の庵寺跡	寺院跡	
12	宗光寺跡	寺院跡	
13	赤松谷上鉛跡	製鉄遺跡	
14	古城山城跡	城跡	
15	表屋鉛跡	製鉄遺跡	
16	釣床鉛跡	製鉄遺跡	
17	板井川城跡	城跡	山城、郭、堀切、堅掘、横穴
18	宁津川城跡	城跡	山城
19	養老谷城跡	城跡	山城
20	丸茂城跡	城跡	山城
21	入船山城跡	城跡	山城
22	要吉山城跡	城跡	山城、石垣
23	四つ山城跡	城跡	山城、本丸、井戸
24	夏山墓地	古墓	五輪塔3基
25	掛所鉛跡	製鉄遺跡	
26	北ヶ溢鉛跡	製鉄遺跡	
27	新宅溢鉛跡	製鉄遺跡	
28	金ヶ崎鉛跡	製鉄遺跡	
29	火の迫鉛跡	製鉄遺跡	
30	金屋敷鉛跡	製鉄遺跡	
31	忠谷鉛跡	製鉄遺跡	
32	深折鉛跡	製鉄遺跡	
33	化粧谷鉛跡	製鉄遺跡	
34	吹屋床鉛跡	製鉄遺跡	

番号	名 称	種 別	概 要
35	鐵冶屋敷跡	製鉄遺跡	
36	大切鋤跡	製鉄遺跡	
37	床屋蓋鋤跡	製鉄遺跡	
38	勝地鋤跡	製鉄遺跡	
39	田代鋤跡	製鉄遺跡	
40	芦原鋤跡	製鉄遺跡	
41	馬頭鋤跡	製鉄遺跡	
42	鐵冶平鋤跡	製鉄遺跡	
43	大鳥鋤跡	製鉄遺跡	
44	ジャレ鋤跡	製鉄遺跡	
45	森平鋤跡	製鉄遺跡	
46	腰ヶ丘鋤跡	製鉄遺跡	
47	土井川城跡	城跡	
48	久木経塚	経塚	
49	竹城跡	城跡	
50	本郷遺跡	散布地	縄文土器、石斧、石鎌 須恵器、土師器、鏡、陶磁器
51	葛根藪経塚	経塚	
52	安養寺跡	寺院跡	
53	正明寺跡	寺院跡	
54	相続庵跡	寺院跡	古墓（品川大跡）
55	城ヶ谷城跡	城跡	郭、蒂郭、堀切、堅堀、横堀
56	都茂城跡	城跡	郭、蒂郭、堀切、堅堀、横堀
57	背戸山城跡	城跡	郭、横堀
58	栗島原遺跡	古墓	青磁碗、白磁小皿、小壺、銅鏡、硯
59	東仙道士居遺跡	その他の墓	常滑系壺、加工石（五輪塔一部） 中国製壺、土師質壺、宝筐印塔の一部
60	水池遺跡	散布地	土師器片、須恵器片
61	前遺跡	散布地	縄文土器片、弥生土器片、土師器片
62	丸茂宮下遺跡	散布地	須恵器、土師器、陶磁器
63	専教寺下遺跡	散布地	須恵器、土師器、青磁器
64	唐干田遺跡	散布地	土師器片、弥生土器片
65	大年ノ元遺跡	散布地	陶磁器片、土師器片
66	津和野奥筋往還	街道跡	近世街道跡
67	人石前遺跡	散布地	土師質土器、陶磁器
68	龍光遺跡	散布地	須恵器、弥生土器、土師器
69	仙道宮ノ原遺跡	散布地	土師質土器
70	土井古墓	古墓	五輪塔 2基
71	都茂鉱山跡	銅山鉱跡	

第3章 地層と遺構

第1節 1区の基盤層と遺構 (第7~11・13・16~19図 図版Ⅲ~VI)

〔基盤層の状態〕水田の床土下には暗茶褐色や黒褐色を呈し、砂礫を含む土層が堆積している。この層は場所によって色調や砂礫の混入度合いに相違がみられ、一応、細分を試みたが、基本的には同質の地層と判断される。本来は相当の厚さで堆積していたのであろうが、水田造成によりかなり削平されたものと思われる。基盤層と判断した暗茶灰色砂礫層は、上面が低いところで標高90.5m、高いところで90.9mを測り、全体としては90.6~90.7mのレベル範囲に収まっている。南西方向に少し傾斜する状況がみられるが、概して平坦である。石組遺構=S X01や溝=S D01がこの面から掘り込まれていること、P 28のように土器・陶磁器が埋置されたピットの掘り込み面も同様に考えることができる。暗茶灰色砂礫層上面を遺構立地の基盤面とする理由である。

〔石組遺構〕S R01=D区南西からE区の対角線方向に延びる遺構(北-40°-西)である。人頭・幼児頭の大小の角礫・凹礫を積み數いて構築している。総延長19m、巾4mで残状況が良好な北西部では大型の角礫を縁端に列状に並べる傾向がみられた。断面は基盤層を浅く掘り込んだ皿状の溝に粘質土を敷き、その上に扁平台形状に石と粘土を混ぜ合わせて積み上げている。両縁上部は中央の平坦面より少し高目に造られているのかも知れない。なお、北西端は「Y」字状ないしは「U」字状に分岐している可能性があり、東南端は石組の端が東に屈折しているように思われる。遺構の性格としては、その構造的特徴から道路とするのが妥当ではないだろうか。遺構上から出土した土器・陶磁器類から本遺構の年代は基盤層上面と同様に11~12世紀頃と判断される。

S R02=F区の北西部で検出された石組遺構である。径3~4mの範囲に中型の角礫群で構成されている。近辺にも大型の石が散見される。本来はS D01から分岐した石組、すなわち道路で、その残存部ではないかと考えられる。

〔溝・S D01〕B区中央で検出された遺構である。南東から北西に延びる直線的な小溝(北-40°-西)で、総延長は10.6m、巾は20cm程度。深さは10~17cmである。遺構の性格としては、規模が小さく両端が完結しているので排水用とはみなしづらいが、S X01と同一方向に走っていることからすれば何等かの境界溝とすることはできよう。所属年代はS X01と大差ないであろう。

〔ピット群〕A~D区にかけて大小82個のピットが検出されている。形状としては円形が圧倒的に多く、楕円形や橢円方形がこれに次いでいる。これらはほとんどがS D01より北側で検出されているが、分布面からは明確に掘立柱建物跡と推定されるピット群は抽出できなかった。強いていえばP 42-P 44-P 52=間口2間(柱間=2.2m)、P 47-P 46-P 52=奥行き(柱間=1.9m)の2×2間といった組み合わせ等も考えられないことはない。しかし、これと北東部柱穴が見当たらないし、付近に同等規模の建物跡の存在を想定することもできず、上記復元建物が1棟のみ単独で存在したことも予測し難い。むしろ、数個のピットがS R01やS D01と同一方向に列状に並ぶ傾向が認められることを重視すべき

かも知れない。あるいは、土師器（中世）の坏・皿を出すビットがいくつか存在することも注意すべきであろう。参考までにビットの大きさ（上場面積・横軸）と深さ（縦軸）を基準にして分布図を作成してみた。その結果からは以下のようなことを指摘できる。

① I類（上場面積=0.17~0.25m²）、II類（上場面積=0.1~0.14m²）、III類（上場面積=0.03~0.08m²）に人別する。

②まず、I類（円・楕円形）の群は個数が5個で群内でばらつきが大きい。とりわけ、顕著な存在を示しているのがP70で、分布位置からすると特I類とするのが適當かも知れない。この他、I類に属するビットはB区にややまとまり、C区、D区でも1個づつ検出されている。

③II類（円・楕円・隅円形）も少数。D区とE区に多く、B区、C区にもある。深さは20cm弱。分布にも規則性がみられないで柱穴とすることはできないであろう。

④大多数のビットはIII類（円・楕円・隅円・瓢形）に属する。形状・深さともに多様でB区・C区に集中する傾向がある。大きさからみれば棒状の標柱とか杭穴とすることができるかも知れないが、P12やP28のように土器・陶磁器等が出土した例もある。P28については既述したが、底には人頭大の石が置かれ、それに被せるような状態で褐釉四耳壺（体下半部欠失）が検出され、さらにその上に白磁碗が載せられていた。碗は口縁を上にしており、壺に蓋をしたというように見受けられない。壺内部やビット内に残された土塗からは骨粉とか炭化物等は検出されず、藏骨器を埋納したビットとは考え難い。ここでは曖昧ではあるが、特異な宗教的行為に因る遺構と考えておきたい。

以上、ビットの類分けとその分布状況を検討してみたが、残念ながら特筆できるような傾向を指摘することは難しい。あえていえば、1区全体が道路状遺構によって区割りされたある種の特別区として機能していた、とするに止めるのが適當であろうか。

第2節 2区の基盤層と遺構 (第12~15図 図版V・VII)

〔基盤層〕2区はごく浅い谷間で、横断面にレンズ状に堆積するいくつかの砂礫上層がみられた。これらの層は從断面では公民館側から緩く下降していた。石組遺構は標高で約90.0m前後のレベルをもつ暗灰褐色砂礫混じり粘質土層に構築されていると判断された。ただし、このこともB~E区にかけての観察の結果で、さらに西部、東部では別の地層面が遺構の構築立地面になっている可能性は否定できない。

〔石組遺構〕B・C区で並走状態にある2列の石組遺構が検出されている。山側遺構をS R03、谷側遺構をS R04とする。S R03は総延長7.1m、巾2m、標高90.1~90.2mを測る。走行方向は北西西（北-65°-西）で谷側の縁堀部に大型で長手の石を列状に並べている。山側に相対する石列があったかどうかは不明。石敷面が良好な状態で検出されたのはB区とC区の境付近であるが、C区の北東部にも円礫がほぼ同一レベルで比較的まとまって検出されているので、ここまで遺構が延びていたことも考えられる。とすれば総延長は約15m程度になる。

S R04は総延長約13m、巾2.1m、標高90.2~90.3mを測る。走行方向は北西西（北-

50°—西)でS R03よりは少し北に振れている。検出部では並行状態にあるが、さらに西部に行くと両者交錯もしくは合流し、逆方向の東部では大きく別れて走行することが考えられよう。残存状態良好のB区とC区の境界付近では大型の石を側端部に配し、鋪道面には比較的小型の石を敷き並べているように看守された。

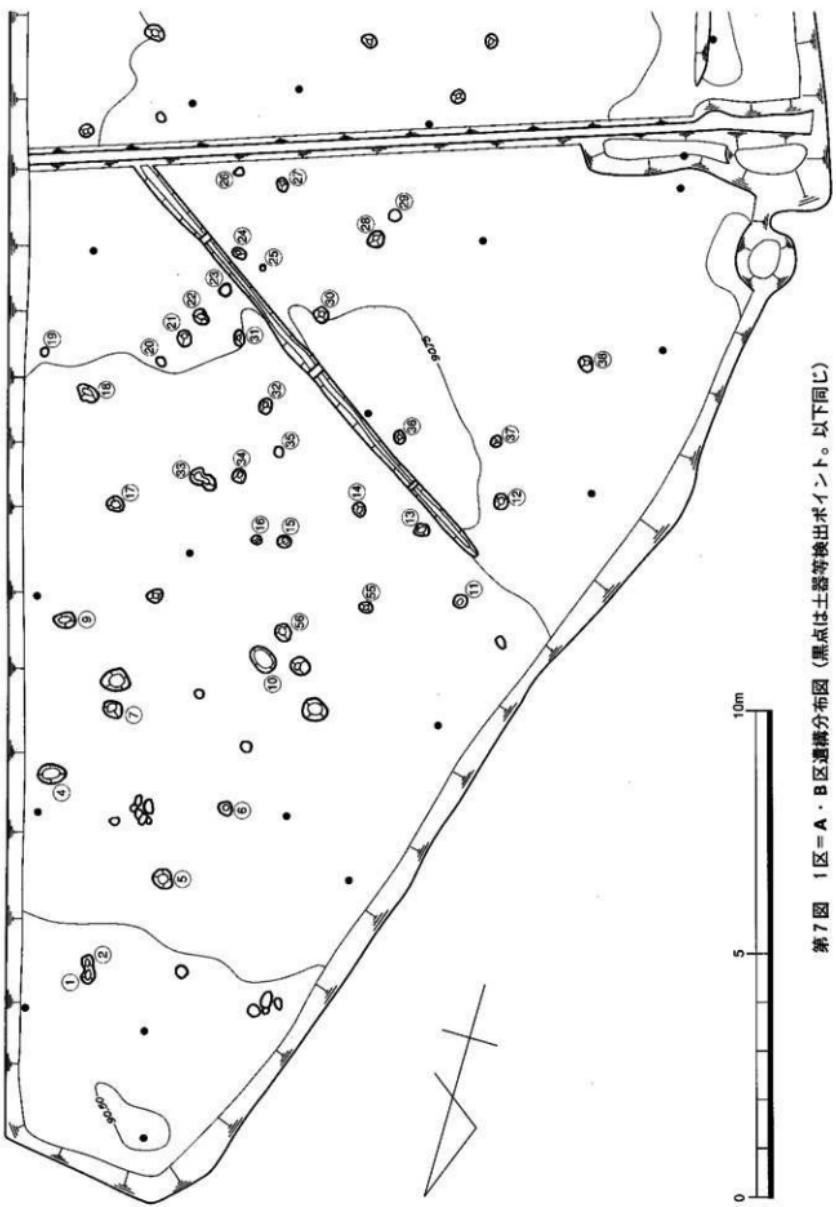
S R03、S R04の年代については、これを直接的に確認する事実は掴みえなかたが、遺構が構築されている暗灰褐色砂礫粘質層に奈良時代の大甃が破碎横臥状態で検出されたことを重くみて奈良時代の築造を想定しておきたい。

2区においては、以上の石組遺構の他に3~4個のピットの存在を知りえているが、その遺存状況を詳細に確認することはできなかった。



P 28の検出状況
底の石が見える

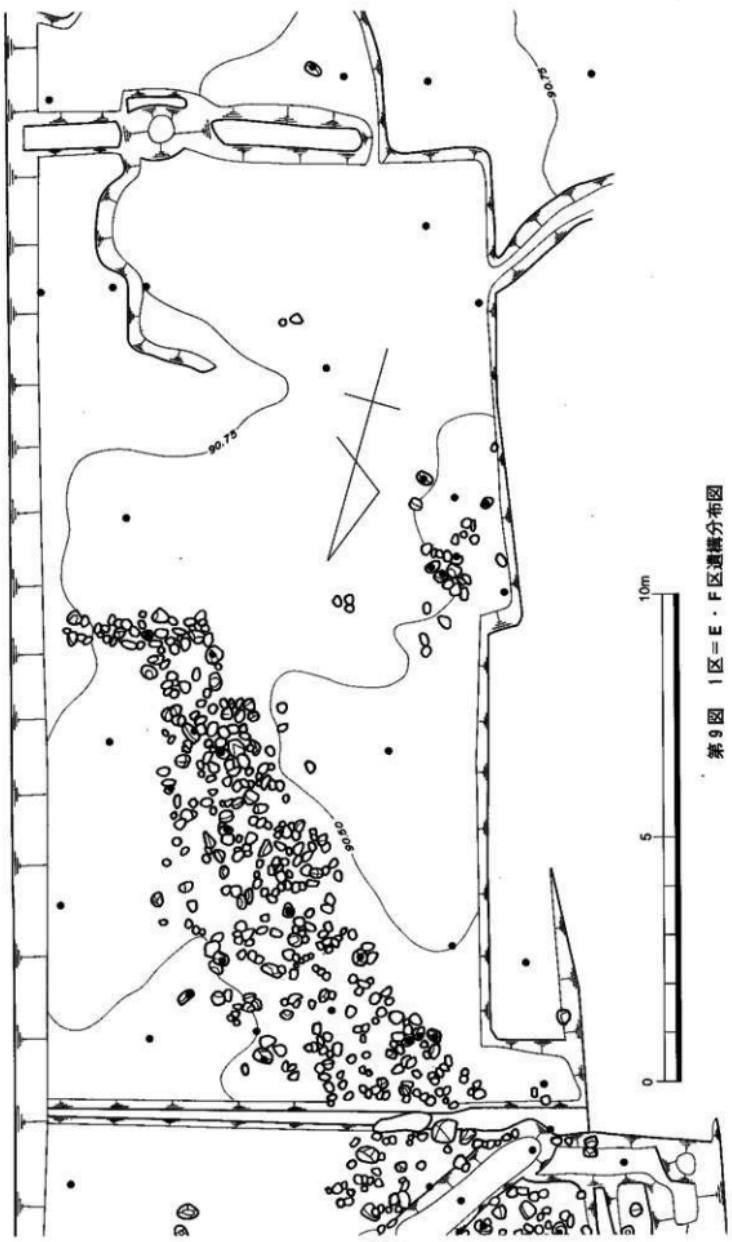
第7図 1区=A・B区遺跡分布図（黒点は土器等検出ポイント。以下同じ）



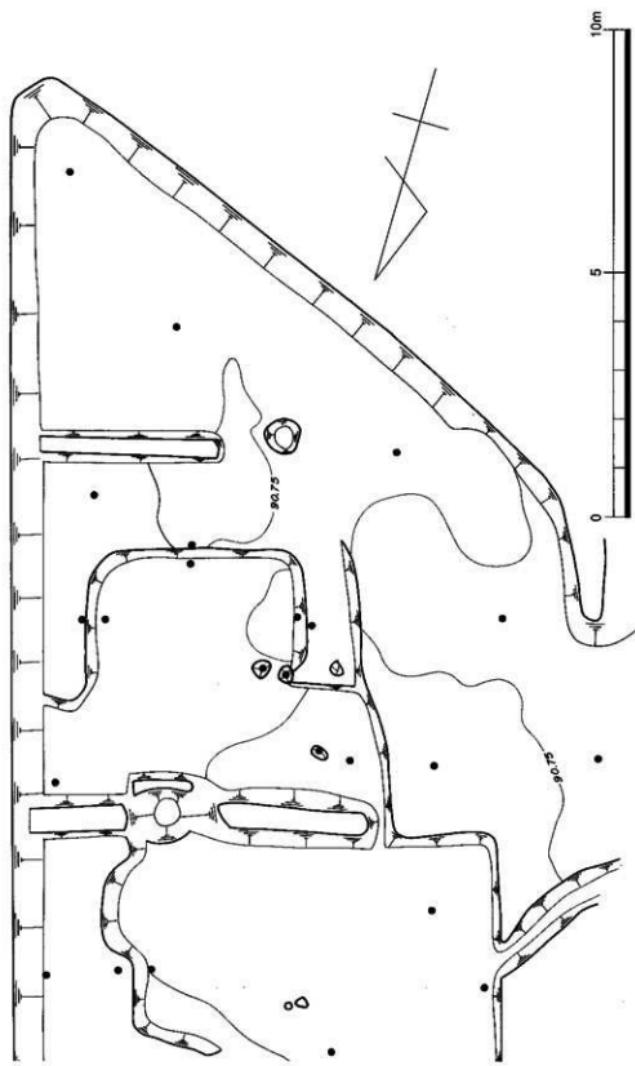
第8図 1区=C・D区構造分布図

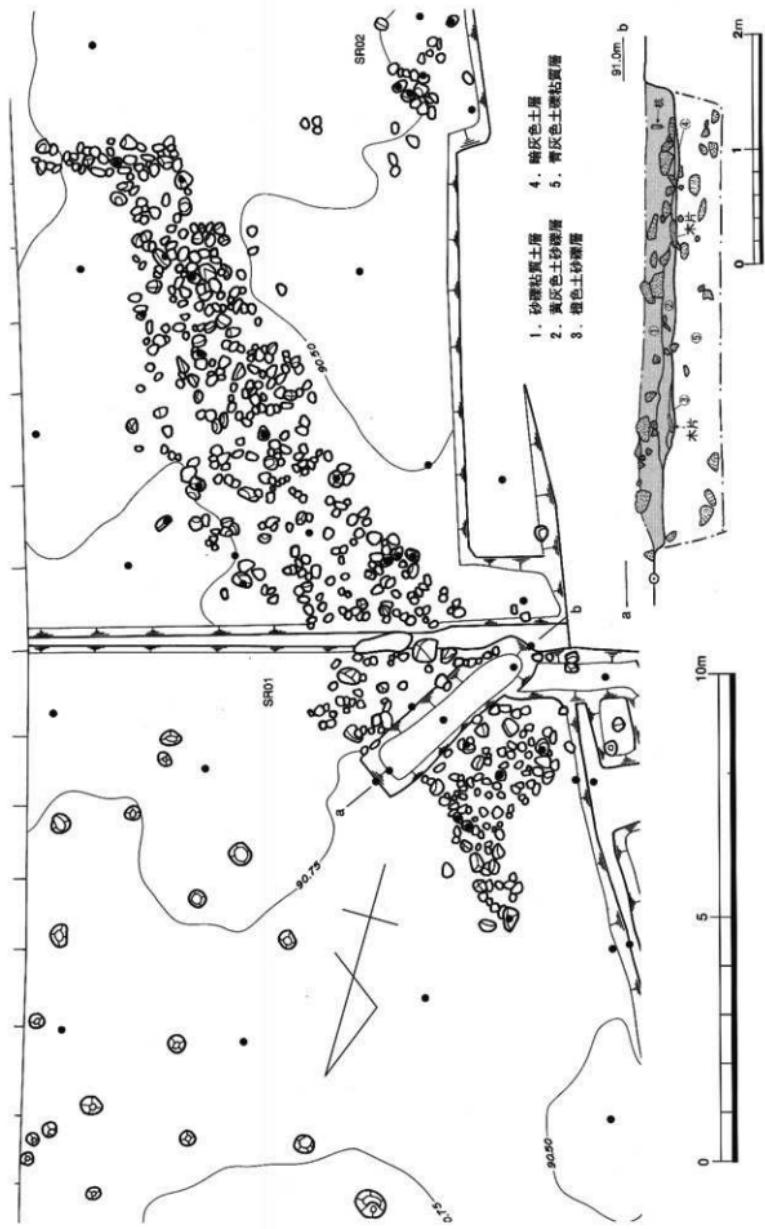


第9圖 I區=E·F區遺據分布圖



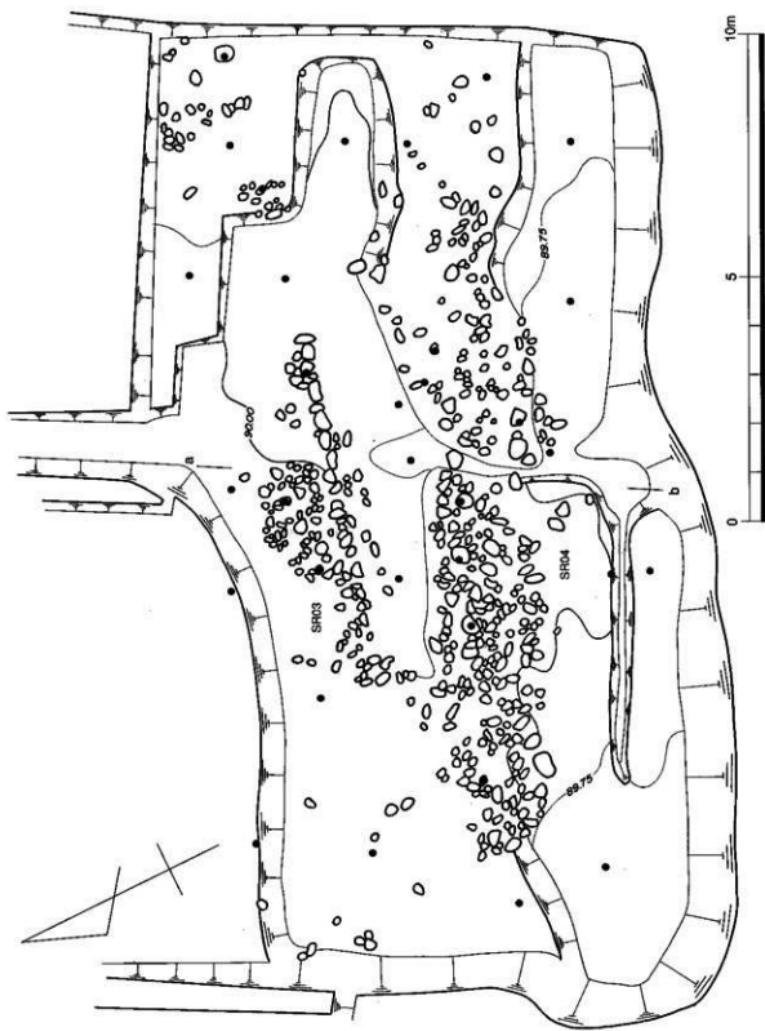
第10図 1区=G区=邊縫分布図

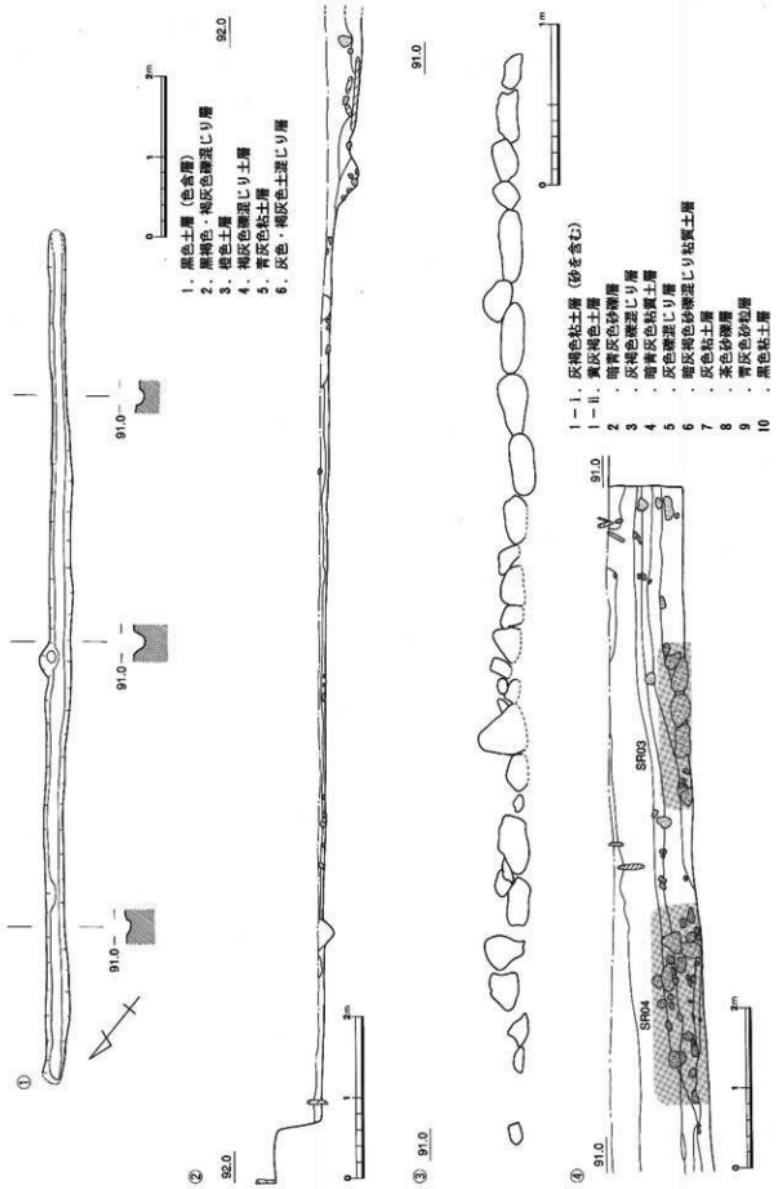




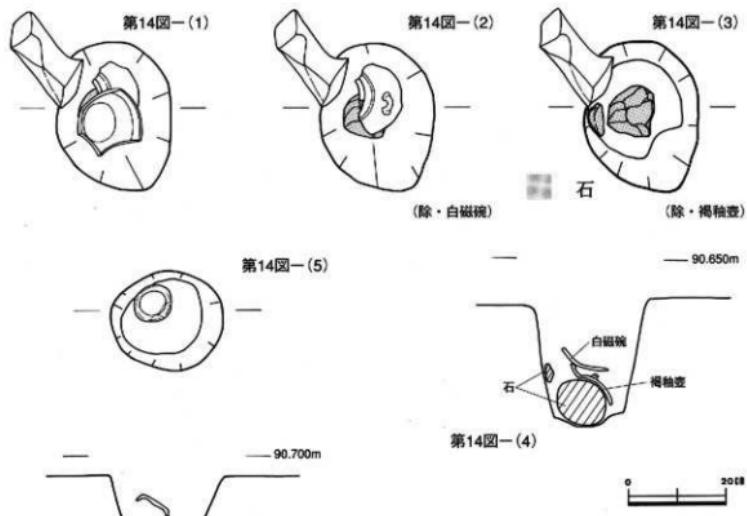
第11圖 1区 石組遺構 (SR01-02) 平面図・断面図 (右下)

第12図 2区 石組造機 (SR03・04) 平面図

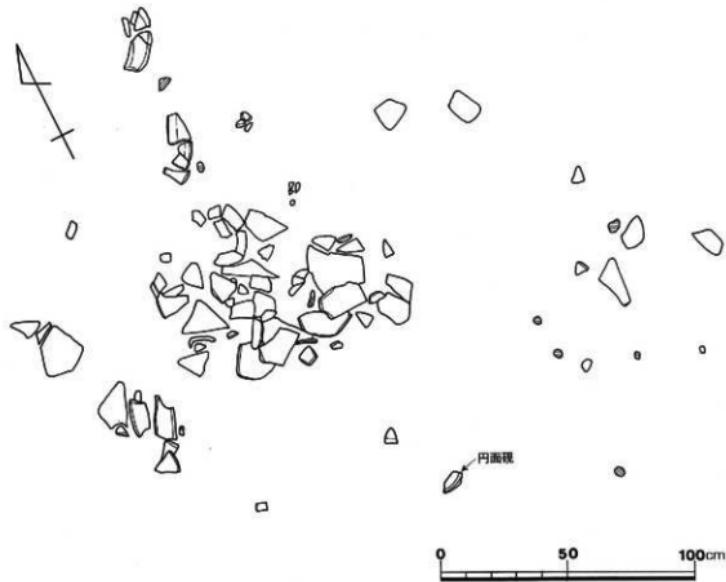




第13図 ① S D01平面図、② 1区=B・C間土層図、③ 2区SR03剖面図、④ 2区=B・C区横断土層図



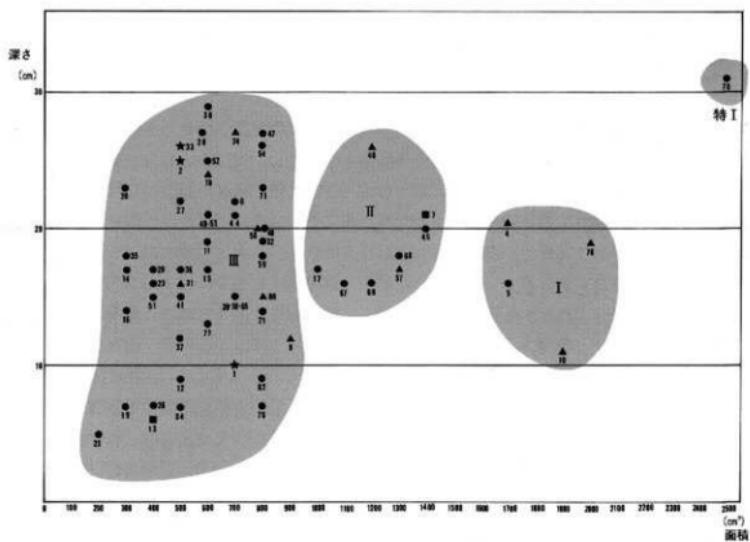
第14図 P28の平面図(1~3)・断面図(4)・P12の平面図・断面図(5)



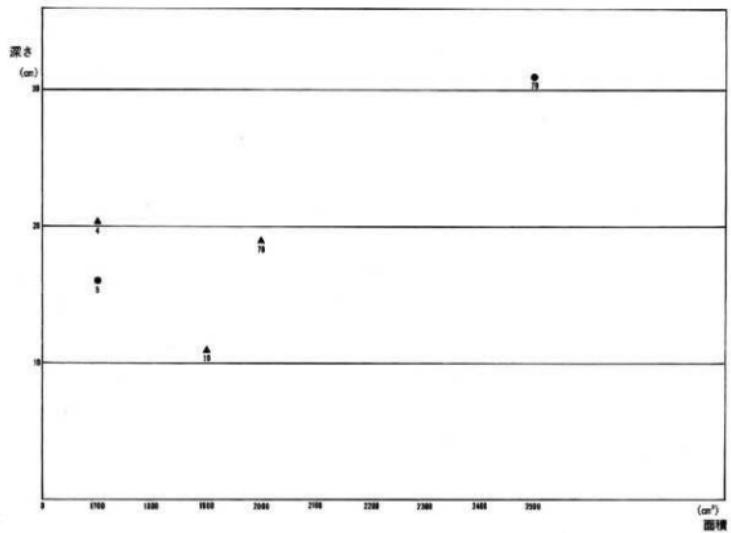
第15図 2区須恵器壺・円面鏡出土状態の図

第2表 1区ピット規格別表

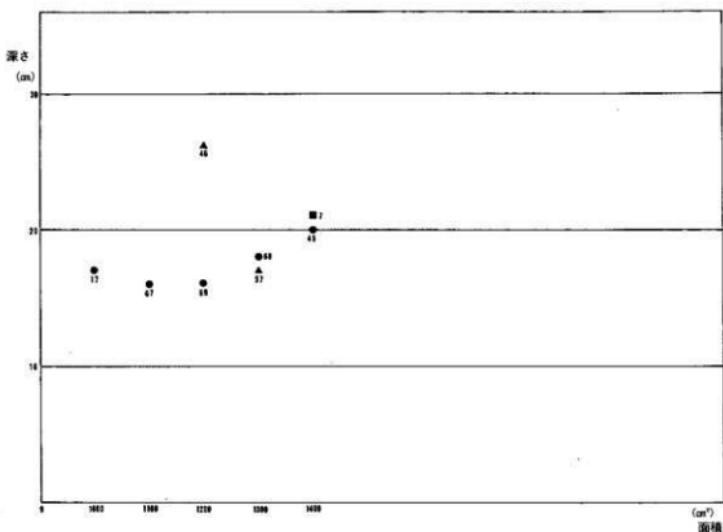
ピット番号	大きさ(cm)	深さ(cm)	面積(cm ²)	備考	ピット番号	大きさ(cm)	深さ(cm)	面積(cm ²)	備考
1	38×23	11	686		43	18×20	8	440	
2	35×20	25	450		44	30×30	21	707	
3					45	40×44	20	1382	土師器片・木片ゲタ
4	57×38	23	1700	土器あり	46	40×38	26	1193	土師器片
5	53×40	16	1664		47	32×32	27	804	
6	33×28	22	725		48	30×33	20	777	土師器片・石
7	44×37	21	1394	土器片	49	30×27	21	636	
8	23×17	15	307		50	29×33	20	751	
9	30×38	12	895		51	25×22	15	432	土師器
10	48×50	11	1884		52	30×27	23	636	炭火物
11	24×25	19	550	石	53	25×28	21	550	
12	25×25	9	491	土師器小皿	54	32×30	26	754	
13	20×25	6	393	土器片	55	23×23	10	415	
14	22×25	17	432		56	25×25	21	491	
15	25×28	17	550		57	42×40	17	1319	
16	20×20	14	314	土師器	58	40×38		1193	
17	34×38	17	1014		59	34×30	18	800	
18	30×25	23	589		60				
19	20×20	7	314		61				
20	20×20	23	314		62	32×30	9	754	土師器・須恵器片
21	30×32	14	754		63	44×34	10	1174	
22	24×23		433		64		20		
23	23×23	16	415		65	33×26	15	674	
24	28×33	27	725		66	28×38	15	835	
25	15×15	5	177		67	36×38	16	1074	
26	20×25	7	393		68	40×40	18	1256	
27	24×24	22	452		69	40×37	16	1162	
28	24×30	27	565	白磁・四耳壺	70	55×57	31	2461	土師器片・須恵器片
29	22×22	17	380		71	30×35	23	824	
30	30×26	29	612		72	30×33	20	777	
31	28×22	16	484		73	33×31	21	803	
32	30×32	19	754		74	27×26	13	551	
33	25×25	19~26	491		75	43×40	20	1350	
34	28×22	7	484		76	35×30	7	824	
35	20×20	18	314		77	27×30	13	636	
36	25×25	17	491		78	45×55	19	1943	
37	23×22	12	497	須恵器・土師器片	79	25×30	15	589	
38	30×30	15	707		80	35×36	11	989	
39	30×28	15	659		81	28×30	17	659	土師器片
40					82	24×26	22	490	
41	20×30	15	471		83				
42	28×38	16	835						



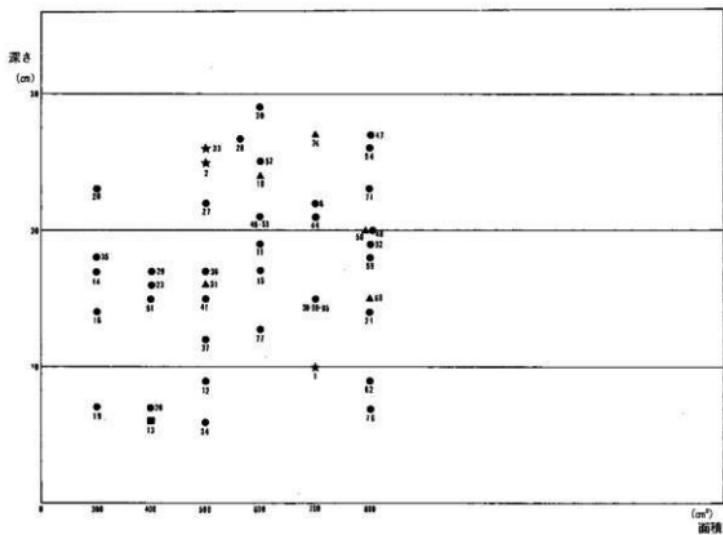
第16図 ピットの規模別分布図



第17図 I群ピットの規模別分布図



第18図 II群ピットの規模別分布図



第19図 III群ピットの規模別分布図

第4章 出土遺物

第1節 概要・須恵器

1. 概 要

酒屋原遺跡からは多量の遺物が出土した。そのほとんどは土器・陶磁器等で、総量はコンテナ-30箱分に達した。また、下駄や木製品も少なからず出土している。土器・陶磁器で出土量が日立つのは須恵器の類である。あるいは、白磁・青磁等国内外からの輸（搬）入品もかなり多いことは注目されよう。地点別では1区のB～D区で比較的まとまった出土があり、とくに、D区で多くのものがえられている。2区ではB区で集中的に出土している。種別的には1区、2区とも須恵器・土師器が多いが、1区では貿易陶磁器の白磁・青磁も多数出土したし、2区でも須恵器・土師器に次ぐ数量がえられている。貿易陶磁の器種では白磁碗・皿が高い比率を占め、青磁碗・皿類が2番手に位置している（第3表、第28～30図参照）。このことは須恵器の器種で坏の比率が高い傾向に一致し、8世紀後半から9世紀前半頃の須恵器を主体とする容器セット期から貿易陶磁器を好みの中心に置く時期へと移行したことうかがわせている。なお、2区では7～8世紀代の須恵器の存在が目を惹いた。以下、土器・陶磁器等々の順で解説を加える。

2. 須恵器

須恵器は蓋坏・皿（盤）・高坏・壺・甕があり、時期的には複数の時代にわたっている。特異なものには須恵質の硯がみられた。出土量の多い蓋坏から説明する。

《蓋坏の蓋》（第20図1～25・28 図版IV）

蓋と身がセットで出土した例はないので蓋と身を分けて述べる。第19図1～24はつまみが付く蓋である。1は宝珠形のつまみが付く小型の蓋。天井部から体部へは次第に高さを減じつつ移行している。2・3は口径が大きく、剣状のつまみを付ける。2は天井部と体部の境が角張り、口縁端部が鳥嘴状をなしている。4～22・24は輪状つまみが付く蓋である。全体的につまみ径の大きいのが特徴と考えられるが、器高が高く、口径の大きい14のような例があり、ついで6・11・15・17・20・23が目に付く。その他は径13～14cmの間に収まる。また、これらの中には器高が高く、台形様の9・15、逆に低い天井で扁平な形状を示す17が含まれている。天井部から体部への移行部が角張る類が多いのに対し、湾曲して移行する類（18・22）もみられる。あるいは、口縁端部が明確な鳥嘴状を呈する例が多い中で痕跡的に尖る22のような形状を示すものもある。24のつまみ内には爪形状の圧痕がみられる。25は古墳時代末期の小型化した蓋坏の蓋と思われる。28は天井部に「×」印がヘラ書きされている。

《蓋坏の身・坏》（第21図29～36、第22図45～71 図版IV）

坏には蓋坏の身と思われるものと坏だけのものが存在する。今次調査では坏蓋と坏身がセットで検出された例がないから両者の厳密な組み合わせは確認できない。よって蓋坏の身も坏もまとめて説明する。

29～31、33は高台付の坏。いずれも底部から体部にかけて内溝して立ち上がり、低い高

台が外開きに付いている。29は器形全体をうかがえる個体で、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に逆「ハ」字状に開く。底部にヘラ切りの回転痕がみられる。30は高台の壇付け部に浅い凹線が残る。底部ヘラ切りで爪形状の圧痕がある。32は少し小型の杯で底部に回転糸切り痕が認められる。34は高台が垂直に付く大振りの杯と思われる。35・36は無高台の杯。平らな底部から強く湾曲して立ち上がる体部で出土量は少ない。

第21図45~69・71は高台付の杯とそれに類する杯を掲げた。45~49は、いわゆる金属器模倣の杯である。体部下半分に段状の屈曲部があり、48以外は口縁部が端部近くで小さく外反する。51・53・57等は高台が底部・体部の境より少し内側に付き、体部から口縁部にかけて逆「ハ」字状にやや大きく開く類。これに対して54・55は高台が底部・体部の境に付き、体部から口縁部にかけて直線的に小さく開く。口縁端部は尖り気味になっている。65・67は細身の高台が「ハ」字状に付けられ、端部が足形に仕上げられている。69は爪形状の圧痕が刻される。70は無高台の底部できれいな回転糸切り痕がみられる。

《皿》(第21図37 図版K)

皿は出土例がごく少数で37の1例のみ図示した。径の大きい扁平な底部に逆「ハ」字状に開く低い体部が付く。口縁端部は斜目平坦面をなしている。およそ奈良時代に属する器形であろう。

《高杯》(第21図38~44 図版K)

38・39・43は高杯の杯部である。38は人型品で脚部付近にカキ目がみられる。39は小型品。同じくカキ目が施される。44は小型品で体部から口縁部にかけておおきく逆「ハ」字状に開き、口縁端部が小さく外反している。43は体部下方に一条の沈線通り、「ノ」字の連続放射状線が刻まれている。40~42・44は無透かしの脚部。いずれも裾端部に向かって大きく喇叭状に広がる形状で、41・42は小型品。以上の高杯は古墳時代末期から奈良時代にかかる型式と考えられる。

《壺》(第23~24図72~103 図版K~X)

壺はいくつかの変種が存在する。72・84は短頸壺の口・頸部片。頸部が「く」字状に屈折し、口縁部が逆「ハ」字状に直線的に開いている。口縁端部は尖っている。84は口縁部が外反し、端部下外面が突帯状に肥厚する。73は短頸壺の口縁部片で外面に沈線・円形竹管文・斜格子文がある。85も短頸壺の体上部片であろう。

74~76は長頸壺である。75は口縁部片。喇叭状に開いた口縁部の端部は上方に小さく摘み出したような形状を示している。76は上下で同一個体をなすとみられるもの。体部が中位より少し上方で鋭く算盤玉状に角張っている。底部には「ハ」字状に開く高台が付く。体部内面には同心円状の叩き目がみられる。

78~83・86~92は扁球形の胴体部に直立する短い口・頸部が付く類である。おそらく第27・28のような扁平の蓋とセットをなすものと考えられる。78・79・81~83は比較的大型品で、78・79は外面に有輪羽状文や「ノ」字の連続列状文が刻まれる。79は内面に弧状の叩き目が残る。80・87~90・92は小型品。87は体部上方が強く角張り、底部に高台が付

けられている。89も台状の底部をもつと思われる。90は丸底。

93～103は壺の底部である。この中96・99～103は高台付きの底部。93・96・102・103は大型品で平らな底部から屈折して体部へ移行している。体部は外傾する。95・99～101は小型の短頸・蓋付き壺の底部である。底部から体部にかけては内湾して立ち上がる。97・98は筒状の体部をなす長頸瓶の体・底部であろう。

《甕》(第25～28図104～136 図版X)

甕は出土量が多く、形状や制作技法にバラエティーがある。104～119は口・頸部片で、多くが外反ないし外傾している。口縁端部の造りに違いがみられ、104～106は端部下が肥厚して突帯をなし、108・109も端部付近が肥厚し、頂部が内側にわずかに突出している。110は単純口縁。107は口・頸部が小さく外傾し、口縁端部付近が肥厚している。112～113は頸部片。平行する複線の沈線間に複線波状文を施す111、單線の波状文の117、連続の縦線で埋める112、複線の押引き文の113、2段以上の2本平行沈線をもつ114といった具合のバラエティがある。120～134は体部破片。外面に横・縦・斜目の平行叩き目、内面には同心円状の叩き目を施す例が多いが、中には127のように小さな格子目状の叩き目を有する例もみられる。136は体部全体をうかがうことのできる個体で、外面には縦・斜目の平行叩き目が、内面には粗い同心円文がある。135は大型の底部であるが、甕か壺か判断できない。

《硯》(第28図137～142 図版X)

須恵質の凹面観片が6個体確認された。一遺跡からの出土数としては石見地方最大である。137・138・140・142はいずれも脚部に縦長の長方形透しが穿たれる。137は外縁がやや高い大型品。138も径が大きい硯であろう。139～142は小型の硯である。139の陸面には使用による摩滅が看取された。141の脚内面には弧状の叩き目がみられる。

《東播系》(第29図143～145 図版X)

143～145は東播系の鉢の口縁部と思われる。肥厚気味の口縁部は直立ないし内傾し、端部が尖っている。体部には重ね焼きの痕跡が認められる。

146は瓷器系の碗片である。147は「大」と記したヘラ書きの文字上器。壺の体部上位の破片と思われる。

土器・陶磁器類中圧倒的な出土量を占める須恵器は時期的にみてかなりの年代巾が存在するようと思われる。例えば、坏蓋25(大谷編年A 8型式相当)や宝珠系つまみが付く1(大谷編年C 2型式相当)などは7世紀前半代に位置付けられるものである。また、鉗状つまみが付く坏蓋2・3と高台付杯29などは石見空港編年のI期に相当するもので実年代的には奈良時代前半期が考えられよう。他方、坏蓋の18・22のように天井部から体部・口縁部かけて直線的に下降し、口縁端部の鳥嘴状の下垂が痕跡的に残る類は同じく石見空港編年のIV期にみられるタイプであろう。さらに、坏底部の70は回転糸切り痕が明瞭に残り、IV期に後続する型式とすることができます。大田市白坏遺跡出土の須恵器坏などに対比すれば、9世紀後葉から10世紀前葉辺りに時間的位置を占める坏とみて誤りなかろう。

これらの古相、新相の須恵器は量的には少ない。大多数の杯身・蓋の類は大略石見空港編年のⅢ期に含まれるもので、壺・甕類についても同様なことがいえる。この期の蓋は輪状つまみが一般的で天井部に平坦面があり、強く湾曲して体部に移行し、口縁端部に鳥嘴状の明確な返りがみられる。身に関していえば、高台が底部・体部の境付近に付けられ、体部があまり開かず口縁部に達している。金属器模倣の环がかなりの個数見受けられるが、この種の上器もⅢ期を構成する形式とみる。こうした認識に立てば、須恵器群が示す遺跡の年代的様相はその始源が古墳時代末期にあり、奈良時代前半に上昇期を迎え、その後半から平安時代前半（9世紀前葉から中葉）が最盛期であったとすることができる。そして、9世紀後葉から10世紀前葉には衰退期に入ったことを推定しておきたい。

第2節 貿易陶磁器類

須恵器に次いで出土量が多いのは、いわゆる貿易陶磁器類である。中でも白磁は点数が断然多く、この類の6割以上を占める。本遺跡の特徴といえるであろう。以下、白磁、青磁、その他の貿易陶磁器の順に説明を加える。

1. 白 磁

《白磁碗》（第29図148～167 図版X II）148～152は玉縁状口縁をもつ碗である。玉縁部が太く、厚く巡っている。体部・口縁部にかけてあまり湾曲せず逆「ハ」字状に開いている。釉は灰白色を呈する。いずれも白磁碗IV類に属すると思われる。154～160は単純口縁風の碗である。底部から体部にかけてゆるく内湾して立ち上がり、逆「ハ」字状に開き、口縁端部付近で小さく外傾しない外反するのが特徴的である。154は口縁部が小さく「く」字状に折れ、端部が尖る。端部下に玉縁風の低い突帯が巡っている。釉は灰色で突帯の下方に釉だれがみられ、外面の施釉は不均一。白磁碗V類か。155は外面に斜め方向の波状櫛目文が施されている。156は完形の碗。わずかに外傾する口縁部は端部が尖る。外面は2回の施釉（白色・薄い緑灰色）が認められ、体下部と底部は無釉である。内面には体部上方と体部・見込みの境に沈線が巡っている。高台は高く垂直に付き疊み付けはほぼ平坦に仕上げる。白磁碗VI類であろう。157～160も白磁碗V類と考えられる。153・161～167は碗の底部である。153・161は底部外面を浅く彫り込んで太い高台を削り出している。疊み付けは斜目平坦をなす。内面の見込みと体部の境には沈線が施される。162はやや垂直に削り出された高台である。これらは白磁碗V類の底部と思われる。163はわずかに外側に開く高い高台で疊み付けが将棋駒の頭部のように三角形状をなしている。体部と見込みの境に沈線が巡る。白磁碗XI類か。164～167は高く垂直に削り出された高台で、断面台形状をなす底部。165～167は内面の体部・見込み境に沈線が施される。164は台端まで釉が重れている。これらの底部は白磁碗V類のものであろう。

《白磁皿》（第30図168～171 図版X II）

168～170は白磁皿の底部。168は外面が浅くくぼむ。褐灰白色の釉が掛かる。169は削り出しの低い高台を持つ底部。緑灰白色の釉が掛り、高台の覗み付け部分にも重ね焼きによる器体の付着を防ぐための施釉が行なわれている。170は平底。内面に放射状の沈線文が

ある。釉は灰黄色。白磁Ⅶ-1-b。171は底部・体部境に鋭い稜線を残し、逆「ハ」字状に開く体部からわずかに外反する口縁部に移行している。口縁端部に口禿げがみられる。底部は上げ底上を呈する。釉は灰白色。白磁Ⅸ類。

2. 青 磁

《青磁碗》(第30~31図172~175・179・183~196 図版X II ~ X III) 172~175・179は同安窯系の青磁碗である。内湾気味に開いて立ち上がる体部。口縁端部付近がわずかに外反している。172は外面にヘラ状工具による斜線文、内面に櫛目文が弧状に施されている。釉は褐灰白色。173は外面に片切りの斜線文、内面に櫛状工具による平行線文がみられる。内面体部上方に太い凹線がめぐっている。174も外面にヘラ状工具による彫り文、内面には沈線や櫛状工具によるジクザク文が認められる。釉はオリーブ灰色を呈する。以上の3個体は同安窯系碗A類に属するとと思われる。175は内面体部上方に1条の沈線が巡り、割花文が施されている。釉は灰オリーブ色。179は碗の底部から体部にかけての破片。外面に櫛状工具による平行沈線文、内面に同じ工具のジクザク文が施される。また内面の底部・体部境には凹線状の浅いくぼみがみられる。オリーブ灰色の釉が掛かる。高台は断面が逆台形で垂直に削り出されている。175・179は同安窯系碗I類であろう。

183~196は龍泉窯系碗である。183・184は体部から口縁部が逆「ハ」字状に開き、口縁端部を尖り気味に仕上げる。183は内面に割花文、184は外面にヘラ・櫛状工具による連弁文内面にもヘラ・櫛状工具による花文が施される。185は碗の底部。内面にヘラ状工具による花文がみられる。高台は垂直で疊み付けはわずかに外斜目に切り込まれる。台の内側には窯道具の破片が付着している。内面に掛かる釉はオリーブ灰色。以上の3個体は龍泉窯系碗I類に属する。186は無文で外反する口縁部。暗緑灰色の釉が掛かる。龍泉窯系碗D類。187は内湾して立ち上がる体部からそのまま口縁部に移行し、外面口縁端部下に1条の沈線が巡る。緑灰色の釉が厚く施されている。龍泉窯系碗E類。188・189は鎬連弁文をもつ碗。体部から口縁部にかけて逆「ハ」字状に開き、口縁端部が尖り気味になる。明緑灰色ないし緑灰色の釉が掛かる。两者とも龍泉窯系碗B類で、188はその3類、189は1類であろう。190・191は碗の底部。高台は高目ではば垂直に削り出される。疊み付けは断面台形になる。190は内面に印花文、191はスタンプの花文がある。釉は190が明緑灰色、191がオリーブ灰色を呈する。いずれも龍泉窯系碗D類に属するとと思われる。192は外面に鎬連弁文がみられる体部下部・底部片。内面見込みにもスタンプ花文が施されている。見込みと体部の境はわずかに段状をなす。高台は低目で疊み付けは外方向から浅く切り込まれる。オリーブ灰色の釉が掛かる。龍泉窯系碗I類と思われる。193も逆「ハ」字状に開く口縁部で端部尖り気味。外面にヘラ彫り連弁文が付けられる。釉は緑灰色。龍泉窯系碗E類。194も外面にヘラ状工具による鎬連弁文が施される。輪花の口縁。釉は灰オリーブ色。龍泉窯系碗B2類に属すると考える。195は体部から口縁部があり開かず、口縁端部が丸味をもっている。外面にヘラ状工具による連弁文がみられる。釉はオリーブ灰色。龍泉窯系碗B3類。196も同類の碗片で外面に線彫り連弁文、内面にヘラ状工具による花文が付けら

れる。釉はオリーブ灰色。

《青磁皿》(第30図176~178・180~182 図版X II)

176~178はいずれも同安窯系のI類に属する皿で176・177は底部と体部の境にゆるい段状の屈曲がみられる。体部から口縁部にかけてはわずかに外反する。176は内面に、178は外面にそれぞれ櫛状工具による多条の平行沈線が施されている。釉は176が灰緑色、177・178がオリーブ灰色である。180~182は同安窯系皿の底部で1類。いずれも内面に櫛状工具による多条の平行沈線がみられる。180は灰緑色、181・182はオリーブ灰色の釉がかかる。

3. その他の貿易陶器・陶磁器 (第31図197~207 図版X III)

197~199は褐釉の四耳壺である。197は体部下半部から底部を欠失している。口・頸部が「ハ」字状に開き、口縁端部が逆「L」字状に肥厚する。頸部と体部の境は少し屈曲し、大きく湾曲する体中位に移行している。体上部=肩部の対称的な位置に4個の半環状の耳が付けられる。釉の色は外面が灰色、内面が黄褐色を呈する。褐釉四耳壺V1類で12世紀前半代に位置付けられよう。198・199も褐釉四耳壺の体下部・底部と思われる。共に高台を浅く削り出している。外面にケズリ痕が残り、内面に輪転による強い回転ナデ痕がある。釉は198が淡黄色、199が暗灰黄色を呈する。

200は青磁の香炉片。直立する口縁部で緑灰色の釉が厚く掛かる。202・203は青白磁の合子である。202は口縁部が受け口状に、体部には型押しの花弁状文が施される。203は体下半部片。器壁が薄く、淡水色の釉が掛かっている。

201・206・207は陶器皿。201は内湾気味に逆「ハ」字状に開いて立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がある。胎土は緻密で外面体中部と内面全体にオリーブ色の釉が掛かる。底部は上げ底状。206も悠然としたつくりで灰オリーブ色の釉が内外面全体に掛かっている。底部には回転糸切り痕がみられる。207は口縁端部が片刃状に尖る。体部は少し上げ底状を呈し、回転糸切り痕が明瞭に残っている。内面には重ね焼きによる付着を防止するための目がみられる。釉は灰緑褐色で外面は口縁付近に内面は全面に塗布される。以上の四耳壺・香炉・合子・皿は中国製とみられるものである。

204・205は朝鮮製陶器。204は皿の体下部・底部片。削り出し高台で内面と外面高台疊み付けに砂目が残る。釉は灰色を呈し、外面の高台内部から内面全体に塗布される。205は瓶の体上部=肩部付近の破片とみられる。薄手の器壁で内面に青海波状のタタキ目が残る。外面にオリーブ黄色、内面に黒色の釉が掛かっている。

貿易陶磁器類は碗・皿が主体でこれに少量の壺・香炉・合子などが加わる。年代的には11世紀から12世紀のものが多く、13世紀から14・15世紀のものがこれに次いでいるが、量的には前者に及ばない。

第3節 国内産陶器・土師器・その他の土器

1. 国内産陶器 (第31~32図208~220 図版X III)

208は羽釜片。上師質である。209は石鍋の口縁部片。211も石製茶臼の一部と思われる。

210は須恵質の鉢皿の底部片。外面に回転糸切り痕が残り、内面の見込み部に小さい方形の網目が施されている。212は円盤状の陶器片で小さな円孔が複数穿たれる。「サナ」と思われる。

213～215・217・218は備前焼の陶器。213は壺の体上部=肩部片。外面に黄白色のゴマ釉が掛かる。214・215は擂鉢の逆「ハ」字状に開く体・口縁部片。214は口縁端部の頂面端が斜め上下に小さく尖って突出している。215も頂面下端が尖って小さく突出する。两者共内面に多状の描り目が間隔を置いて施される。備前焼擂鉢編年のⅣ期で14世紀後半に位置付けられる。217・218は底部片。217は内面に5条以上一単位の描り目がみられる。2個体とも内面の磨耗が進み、使い込まれた擂鉢と思われる。216は外面に長方形の叩き目を残す常滑系壺の体上部片。オリーブ黄色の自然釉が掛かっている。

219瓦質の擂鉢片。体部・口縁部が逆「ハ」字状に開き、口縁端部が束縛系鉢に似た形状を呈している。内外面にハケ目が残り、焼成は不良。在地産か。220も瓦質の鉢片かと思われる。灰白色を呈する。

2. 上師器

須恵器に次いで出土量が多いのは土師器である。これらは奈良時代から中世土師器に属するものまで含めて長い年代巾をもっている。図示した代表的なものについて以下に説明を行なう。

《皿》(第32～33図221・229・236～242 図版X III)

221・229は口径が大きい皿。221は平らな底部から湾曲して立がる体部で逆「ハ」字状に開いている。口縁部内面に浅い凹線がみられる。全面に赤色顔料が塗布された可能性がある。229も大皿片。赤色顔料が塗布されている。これらは奈良時代に属する皿と思われる。

236～242は小皿でいわゆる灯明皿と呼称される類。いずれも底部外面に回転糸切り痕がみられ、短く外傾する体・口縁部である。口縁端部は丸味をもつ236・239、尖り気味の237・240などがある。235は口縁部の内外面に煤が付着している。243は底部に焼成後の穿孔が行なわれている。245は高く太い台が付く皿で内面に段状の小さな高まりがある。以上の小皿は古代末から中世の土師器皿として一括されるものであるが、型式差・時期差は不詳。

《杯》(第33図230～234 図版X III)

230～232は底部と体部の境が稜をなし、体部・口縁部がほぼ直線的に外傾している。底部には回転糸切り痕が残り、231には整然とした同心円の回転痕がみられる。233・234は杯の底部。外面に回転糸切り痕がある。234は内面にも指先様の調整具による太い渦巻き痕が印される。244も底部穿孔の杯である。これらの杯も明確な時期比定はできないが、浜田市古市遺跡出土の同類杯に照らすと白磁碗V類等に併行する可能性がある。

《壺》(第32～33図223～226 図版X III)

223～226は壺の口縁部片。数量的には多いが、形状はシンプルである。いずれも口縁部

が大きく外反し、少し膨らむ体部で丸味のある底部をもつと思われる。奈良・平安時代に属するものであろう。

《鉢》(第33図 227・228 図版VII)

227・228は鉢の口縁部片。東播系の鉢に似た形状を示すが内外面にはハケ状工具による調整が認められる。在地産の土師質鉢と考える。

《土鍤》(第34図246~249 図版IV X)

246~249は土鍤である。太くて長い246、細くて短い249の変種が見分けられるが、機能上の相違かどうかは判定ができない。時期も不詳。

3. その他の土器

《繩文土器》(第34図250~253 図版IV X)

本遺跡からは少量の繩文土器が出土した。250・251は晩期の突帯文深鉢の口縁部で刻み目を施す突帯が口縁端部より少し下方に付いている。251は口唇部にも刻み目がある。252・253は体部片。252は外面に二枚貝条痕がみられる。254は突帯文期の精製鉢型土器片。体部と口縁部の境が算盤珠状に角張っている。口縁端部は小さく直立している。

《弥生土器》(第34~35図255~275 図版IV X)

弥生土器は前期から後期のものが1区を中心に比較的多く出土している。255~263は前期(松本・石見編年I様式、以下石見Iとする)の土器である。255は壺で大きく外反する口縁。端部に浅い凹線がみられる。256も壺で、体部上方の破片と思われる。多条の並行沈線群を斜め方向の沈線で区切って鋸歯状の三角形文を描いている。257も壺の体上部片。口頸部下端の段上に刻み目を入れ、その下方に飾歯状工具による連続刺突文、さらにヘラ描きの羽状文を施している。263は甕の口縁から体上部片。口縁部は強く外反し、頸部に2条のヘラによる並行沈線を施す。258~261は甕の底部と思われる。258・260は体部が大きく開く。259・261・262は体部の開きが小さい。前期でも後出のタイプと思われる。271・272は甕の底部。タテ方向のハケ目が顕著にみられる。

264は中期(石見III)の甕。口縁部が「く」字状ないし逆「L」字状に屈折し、端部を平坦に仕上げる。体部はあまり張り出さない。外・内面にタテハケが施される。265も甕のII・頸部。口縁部は短く逆「ハ」字状に開き、端部がわずかに肥厚し、2条の凹線を施す。体部外面はナナメハケ、内面はケズリか。中期後葉(石見IV-2?)。266・267は口縁部が短く、外反して開き、267端部に2条の沈線(四線状)が巡る。体部外面には266が「ノ」字状に斜め方向の連続刺突文、267が貝殻腹縁による2段の連続刺突文を施す。内面は頸部以下ケズリ。後期の初め(石見V-1)の土器と思われる。268は甕。口縁端部が上下に拡張され、端面部に4条の沈線が巡っている。頸部は「く」字状に強く屈折している。後期前葉(石見V-2)の土器であろう。269は複合口縁の甕。口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部が尖っている。複合部は小さく屈折し、突出しない。外面は無文である。後期末(石見編年V-4)と考えられる。270は鉢。口縁部が短く外反し、端部がわずかに肥厚している。端面部に沈線(四線状)がみられる。頸部は湾曲し、体部が少し膨らむ。内面頸部以下

ケズリ。後期前葉（石見V-2）であろう。273も大型の鉢の体部である。外面に「ノ」字状の連續刺突文が2段に施されている。内面はケズリ調整。後期初め（石見V-1）と思われる。274は甕の高台付底部であろう。江津市外来浜遺跡A区2号墓出土の甕に類似する（石見III-2）。275は高坏の坏・脚接合部。脚頂部が太い円筒状をなす。中期後葉（石見N）か。

第4節 石器・その他の遺物・木製品

1. 石器

《磨石・敲石・打製石斧》（第36図276～279・281 図版IV X）

276～278は磨石。扁平な橢円形の円碌を使用している。279は敲石。先端に敲打痕がある。281は打製石斧。刃部が斜目になり、使用による損耗がうかがわれる。扁平な長方形で各辺に調整痕がみられる。282は太い棒状の石で一部に擦痕がみられる。石器か杏か不明。

2. その他の遺物

《風字硯》（第36図280 図版IV X）280は石製の風字硯片かと思われる。

《製鉄関連遺物》（第37図283・284 図版IV X）283は吹子の羽口の先端部片。284は鉄洋で鍛冶滓と思われる。炉壁が付着している。

《古銭》（第37図285～287 図版IV X）285・286は宋錢。銘から北宋錢と判断される。287も宋錢であろう。

《須恵器の大甕》（第37図288 図版IV X）288は須恵器の大甕である。破片で出土したが、全体を復元しうるので挿図の最後に掲載した。口径44cm、高さが83.4cmで、口縁部は外反し、端部付近の外面が突帯状に肥厚。体部中位よりやや上方が強く張り、体部は尖底にすぼまっている。

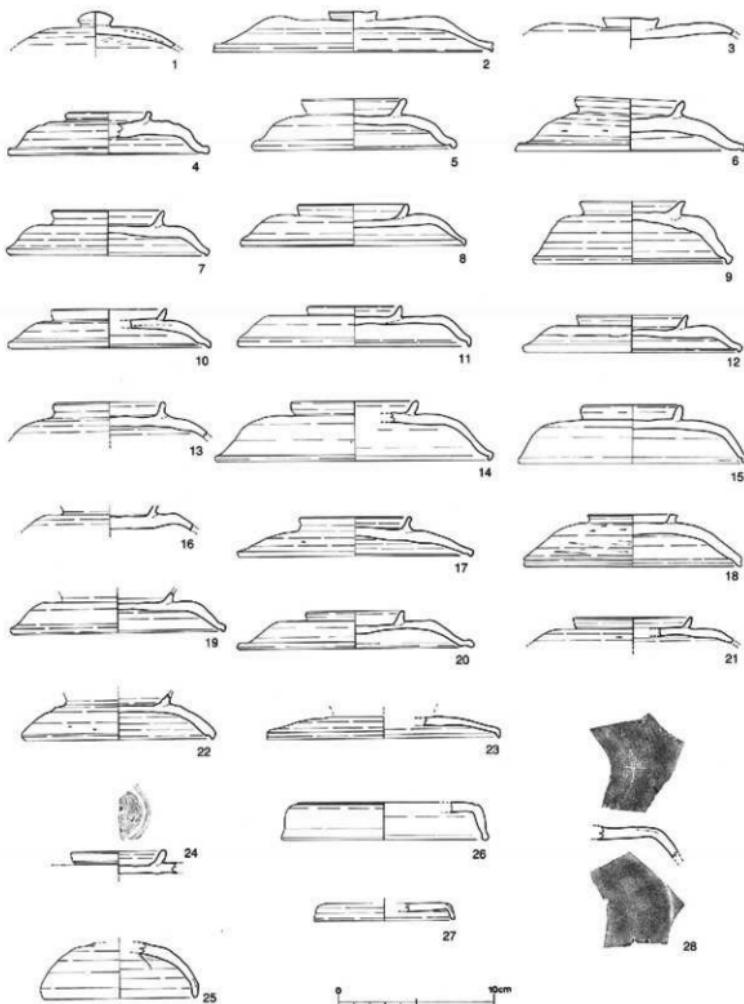
3. 木製品

《下駄》（第38図289～292 図版V X～VI X）下駄は1区（B・F・G各区）と2区（C区）で計6足が出土している。いずれも木製である。289は連歯下駄。台形は隅円長方形状を呈し、歯は断面が長方形をなし、垂直に削り出す。台長21.0cm、台巾9.6cm、台厚1.7cm、歯の高さ3.3cm、着地面の巾3.5cmである。前壺左上に浅いくぼみがあり右親指痕と思われる。よって、右足用である。290も連歯下駄。台形は橢円形に近い。歯は逆台形で台下に垂直に削り出している。台長19.4cm、台巾10.6cm、台厚1.8cm、歯の高さ1.9cm、着地面巾は前歯2.5cm、後歯が3.2cmをそれぞれ計る。291も連歯下駄で、前歯欠失している。台形は隅円長方形かと思われるが、台の後方が欠けており、確定はできない。後歯は断面が逆台形で台下に垂直に削り出す。台長17.5cm、台巾9.2cm、台厚1.5cm、歯の高さ2.9cm、着地面の巾2.3cmである。台の横断上面がわずかにくぼんでいる。292も連歯下駄。台形は隅円長方形で前・後歯はともに根元から欠けている。台長14.2cm、台巾7.3cm、台厚1.8cm、前・後歯の根元巾2.9～3.0cmである。前壺が台先端に近く、壺右に浅い窪みがある。左足用と思われる。台長から子供用と考えられる。

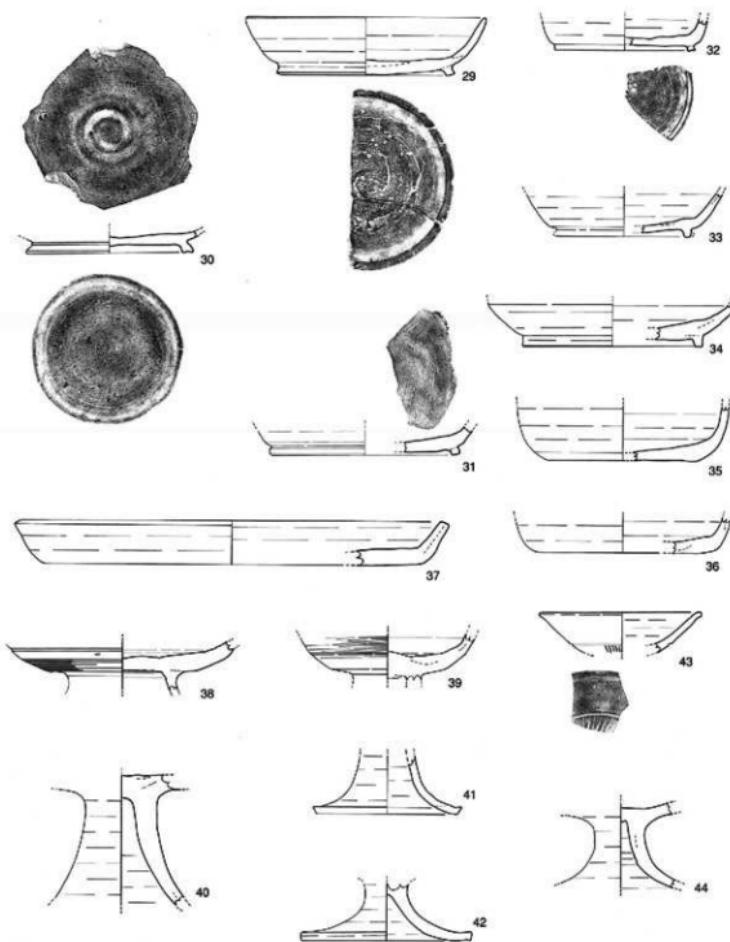
《その他の木製品》(第38~39図293~300 図版VI X~VII X) 293は案の一部かと思われる。台面が浅く掘りくぼまれ、台端に長方形の脚が斜めに削りだされている。台残存巾約14cm、台縁厚3cm程度。脚長5cm、高さ9cm。案の破片を転用したものと見られるが、用途は不明である。294は「U」字状木製品とする。厚めの板に深い「U」字状の掘り込みをもつ。左下方は斜めにカットしている。建築部材の一部であろうか。295は楔状の木製品。丸材を中途で浅く段状に切り込み、底から先端まで方錐状に尖らしている。総長10.1cm、丸部の径3.7cmである。296は横槌を半裁したような木製品。一方の先端をはつり、中央や上方から段状に切り込んで、そこから下端に向けてすぼまるように削っている。元々から丸太材を半裁もしくは3分ノ1程度に割り取って加工したのか、あるいは丸太材をそのまま使って横槌状に仕上げたものは不明。用途も想定できない。総長35.8cm、太い部分の巾12.0cm、厚さ4.7cm、下端の巾7.1cm。297は細い角材の尖端を削って枕状に仕上げた木製品である。総長40.7cm、巾2.6cm。298は羽子板状の木製品。板材の半分部を両サイドから抉るように削り込んでいる。総長19.8cm、板巾4.6cm、厚さ0.8cm、「柄」部先端巾2.0cm。用途は定かでない。299・300は板材の一サイドに「閑」状の切り込みを施した木製品。299は総長17.5cm、巾7.8cm、厚さ1.8cm、切り込みの巾2.0cmである。300は総長14.9cm、巾5.0cm、厚さ1.0cm、切り込みハバ1.0cm。両者とも用途を確定できない。

参考文献

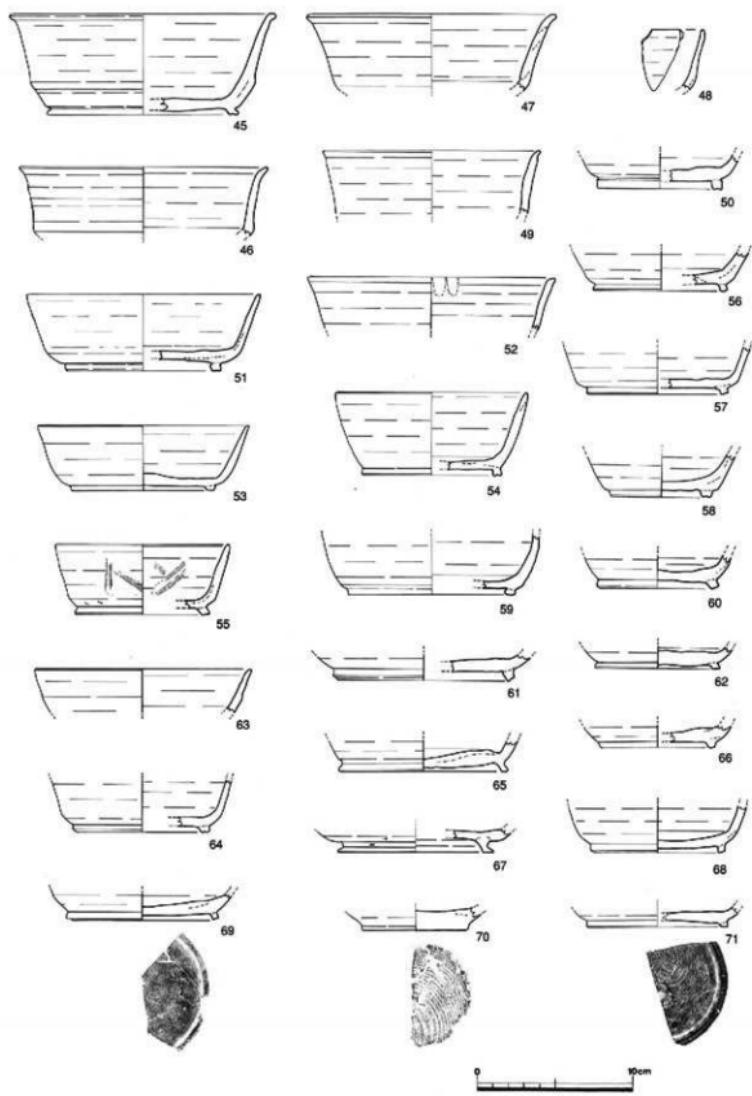
- 西尾克己他『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』1992 島根県委員会。
西尾克己・広江耕史他『一般国道9号江津道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書I』1995 島根県教育委員会他。
守岡正司他『上久々茂十居跡・大井跡 一般国道191号改築に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書-』1994 島根県教育委員会他。
柳原博英他『伊賀上地区画整理事業に伴なう古市遺跡発掘調査概報』1995 浜田市教育委員会。
山木信夫・広江耕史・柳原博英他『山陰における中世前期の貿易陶磁器』1995 山陰考古学研究集会。
西尾克己編『中世後期における貿易陶磁器の様相』2002 日本貿易陶磁研究会。
木原 光他『七尾城跡・三宅御土居跡-益田氏関連遺跡群発掘調査報告書-』1998 益田市教育委員会。
木原 光他『市内遺跡発掘調査報告書I (七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査)』2003 益田市教育委員会。
松本岩雄「石見地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992 木耳社。
坂詰秀一『考古学ライブラリー-45出土渡米鏡-中世-』1986 ニュー・サイエンス社。
大國晴雄・遠藤浩巳『白坏遺跡発掘調査概報』(『大田市埋蔵文化財調査報告書』8) 1989年 大田市教育委員会



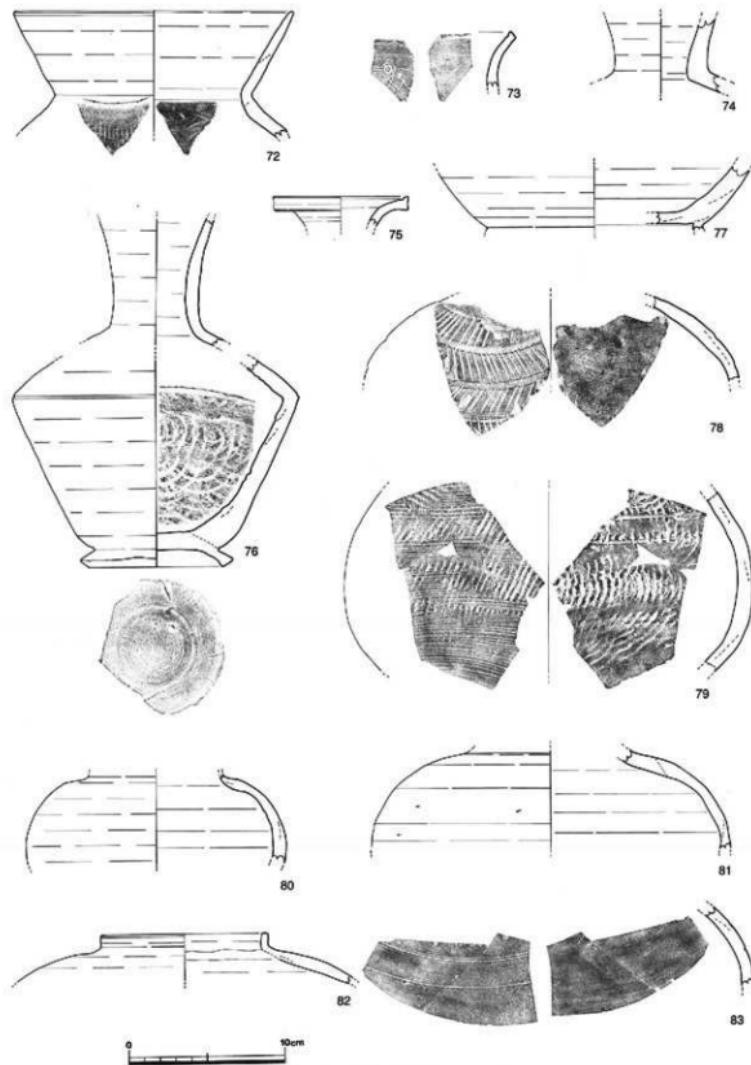
第20図 出土遺物実測図（その1）



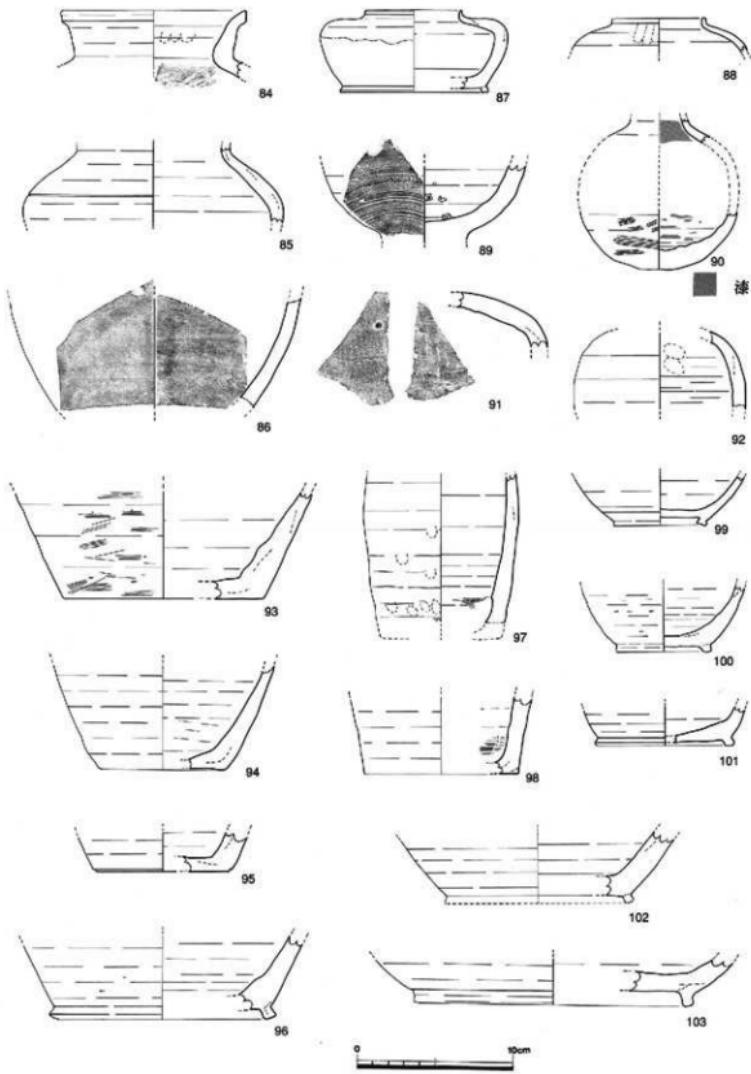
第21図 出土遺物実測図（その2）



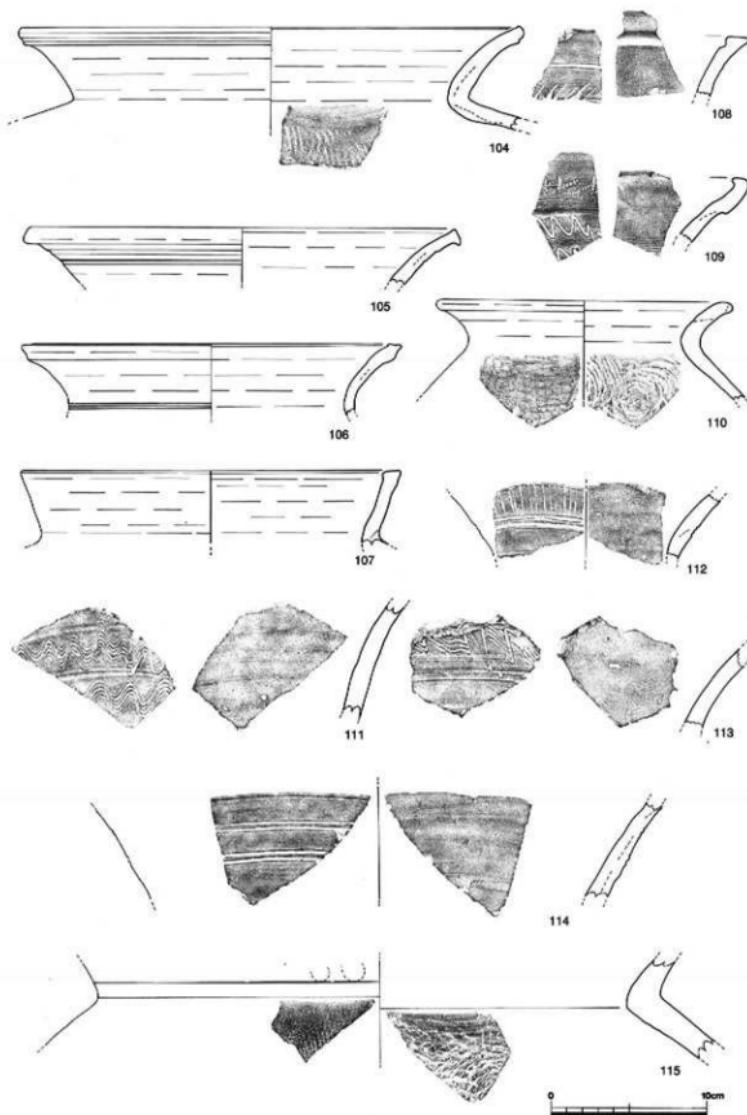
第22図 出土遺物実測図（その3）



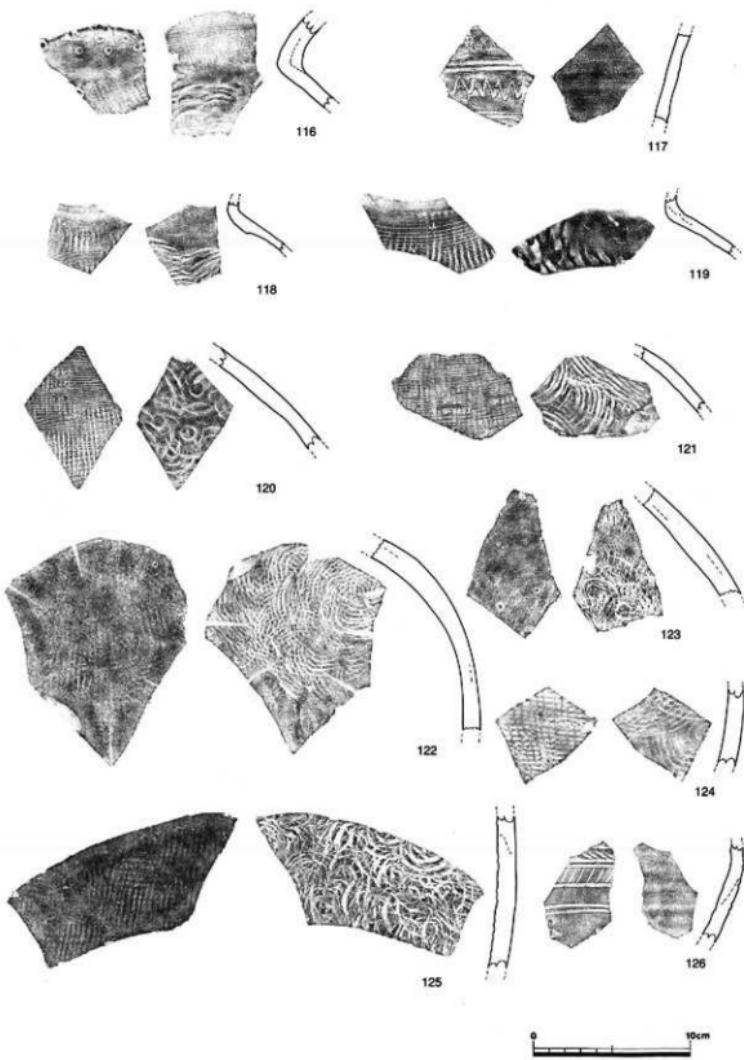
第23図 出土遺物実測図（その4）



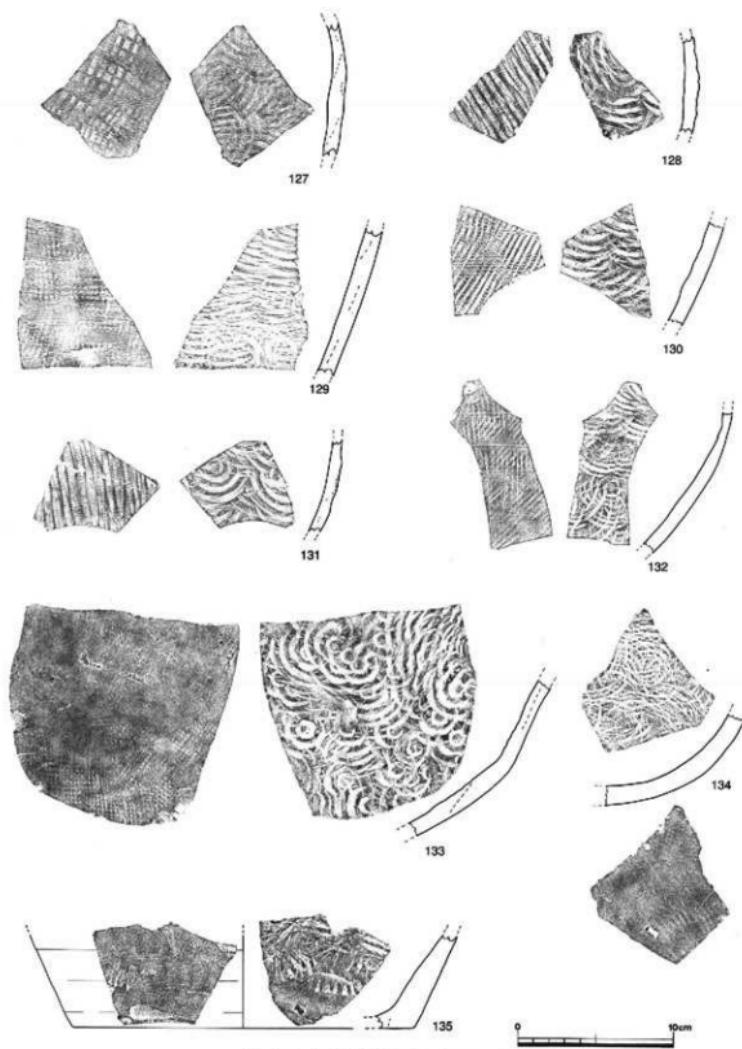
第24図 出土遺物実測図（その 5）



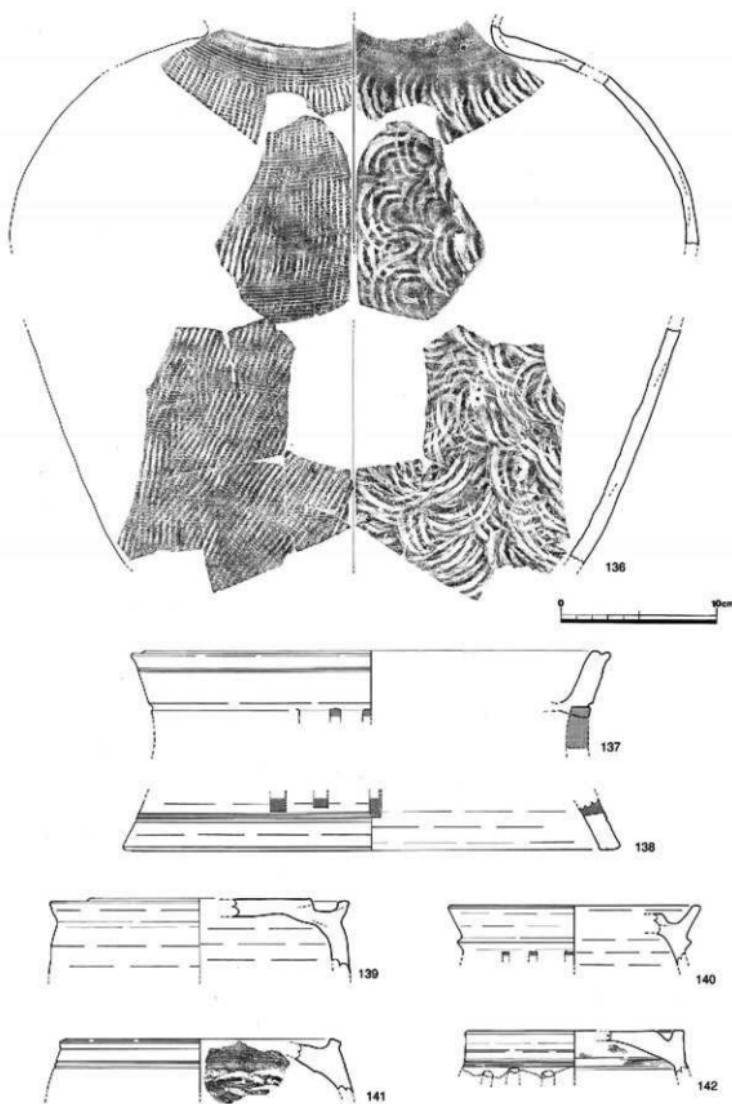
第25図 出土遺物実測図（その 6）



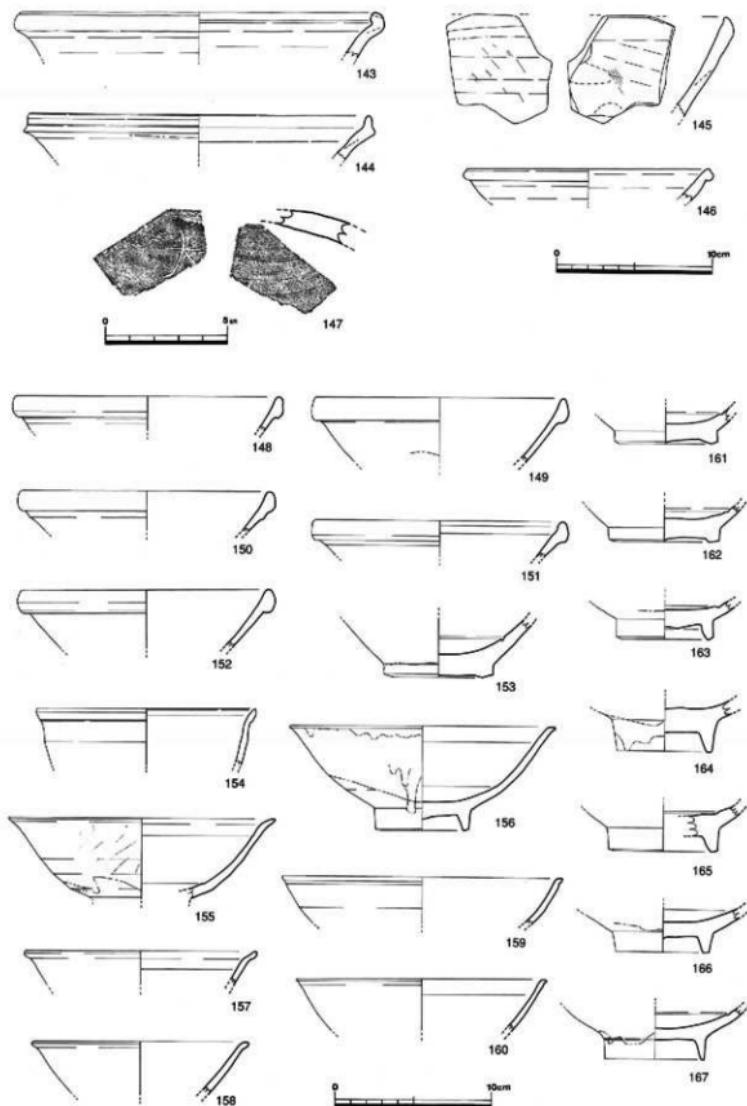
第26図 出土遺物実測図（その7）



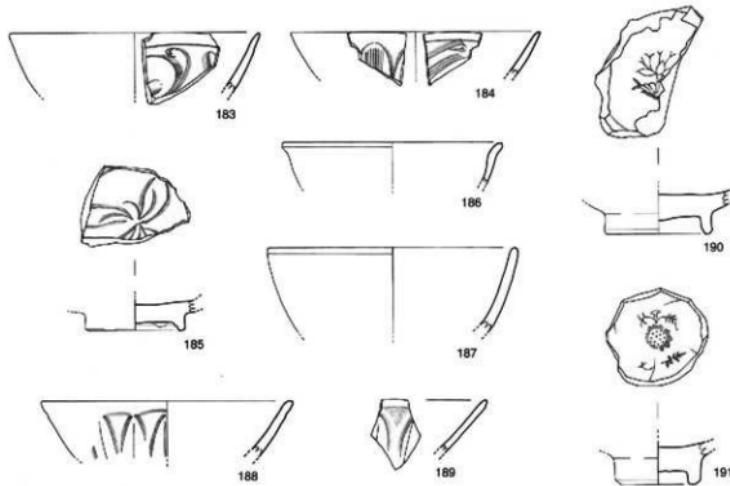
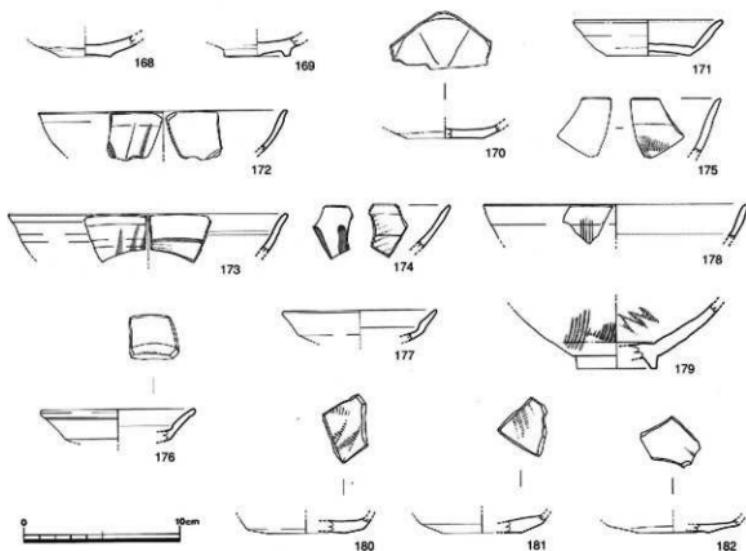
第27図 出土遺物実測図（その8）



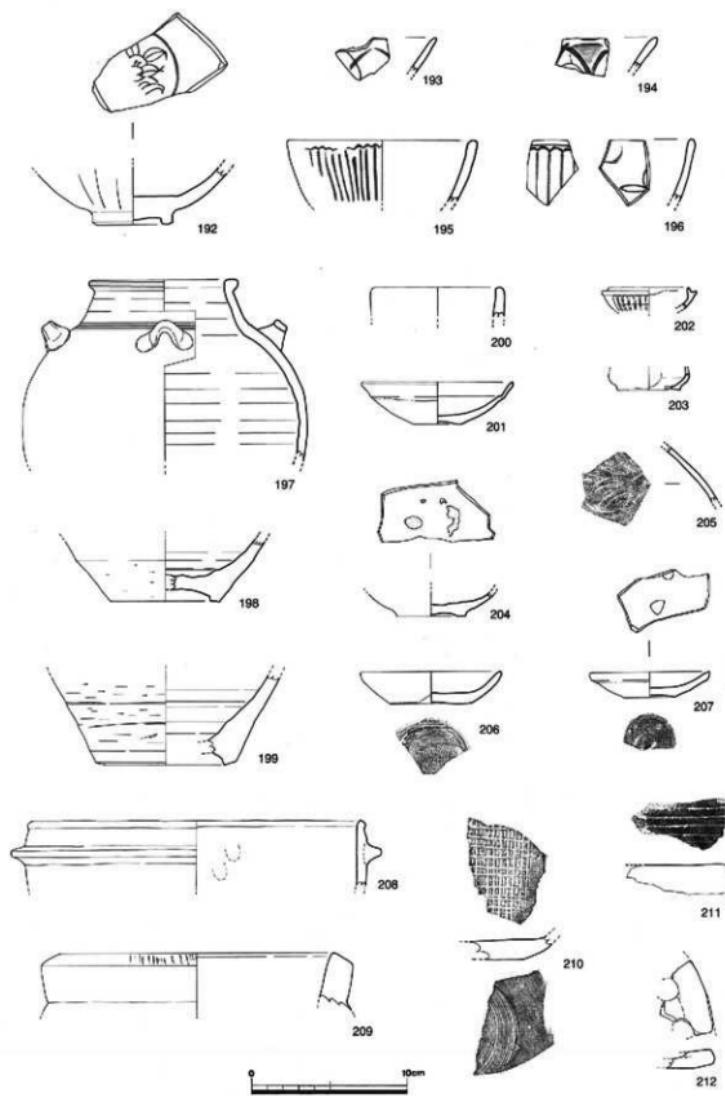
第28図 出土遺物実測図（その9）



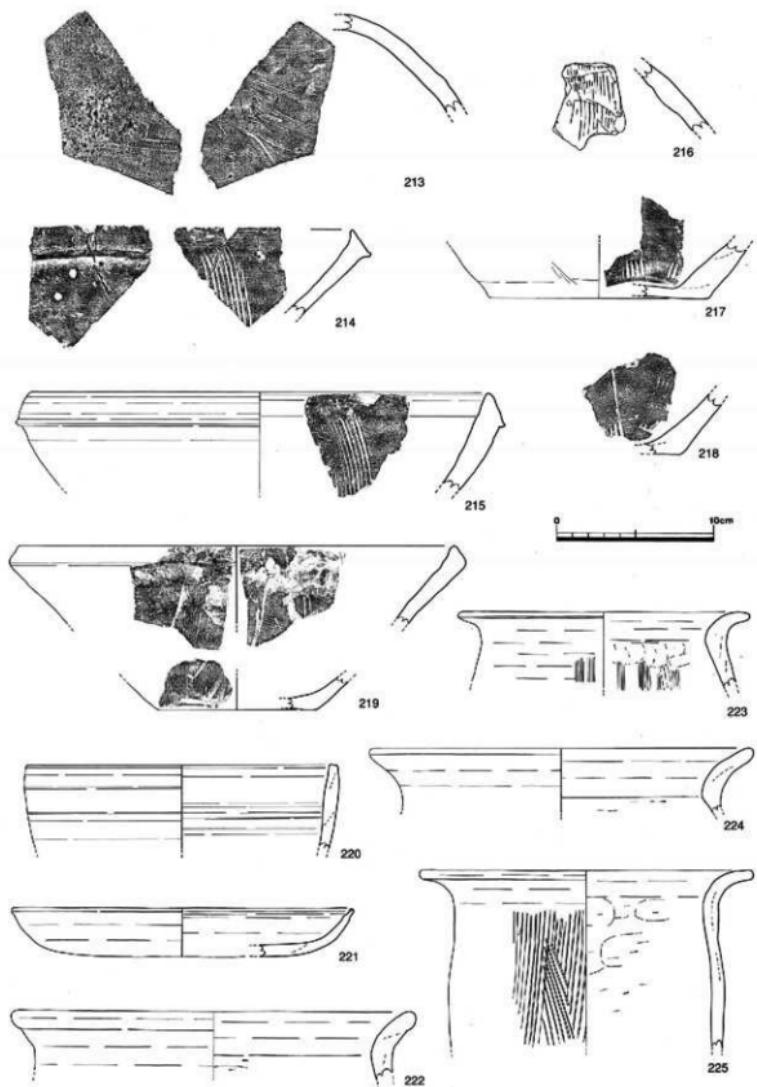
第29図 出土遺物実測図（その10）



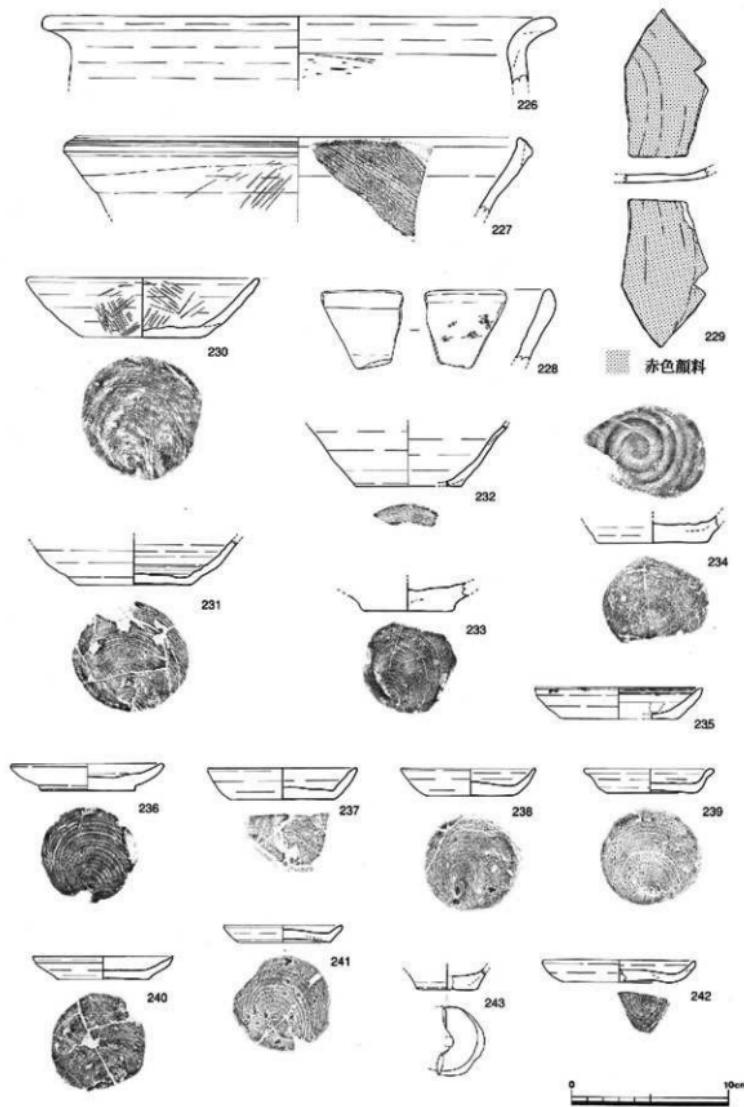
第30図 出土遺物実測図（その11）



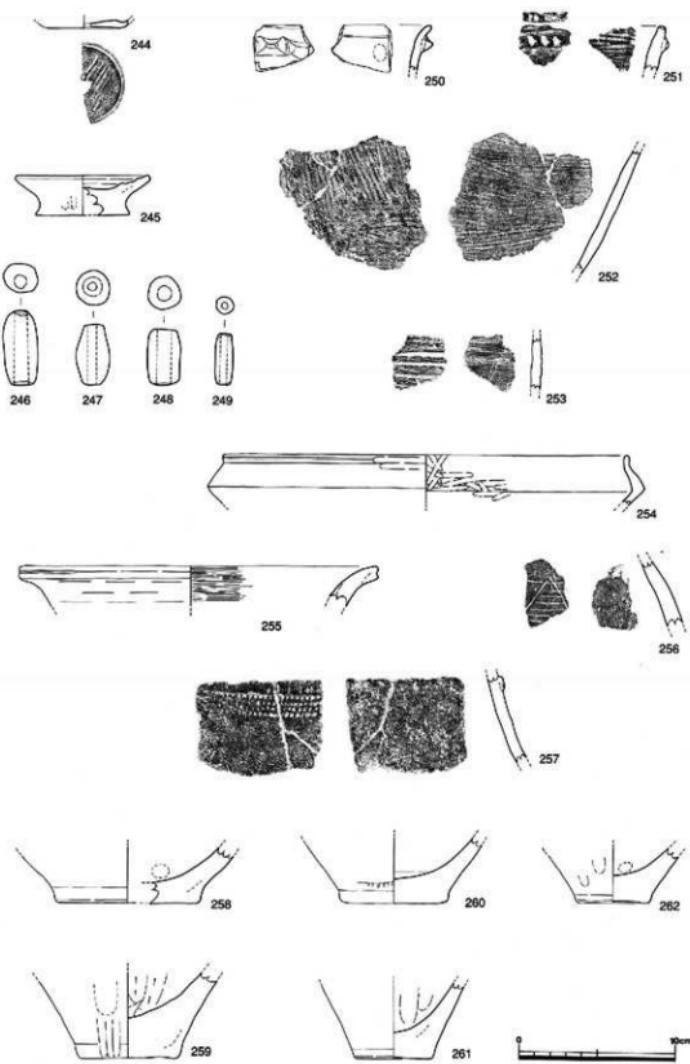
第31図 出土遺物実測図（その12）



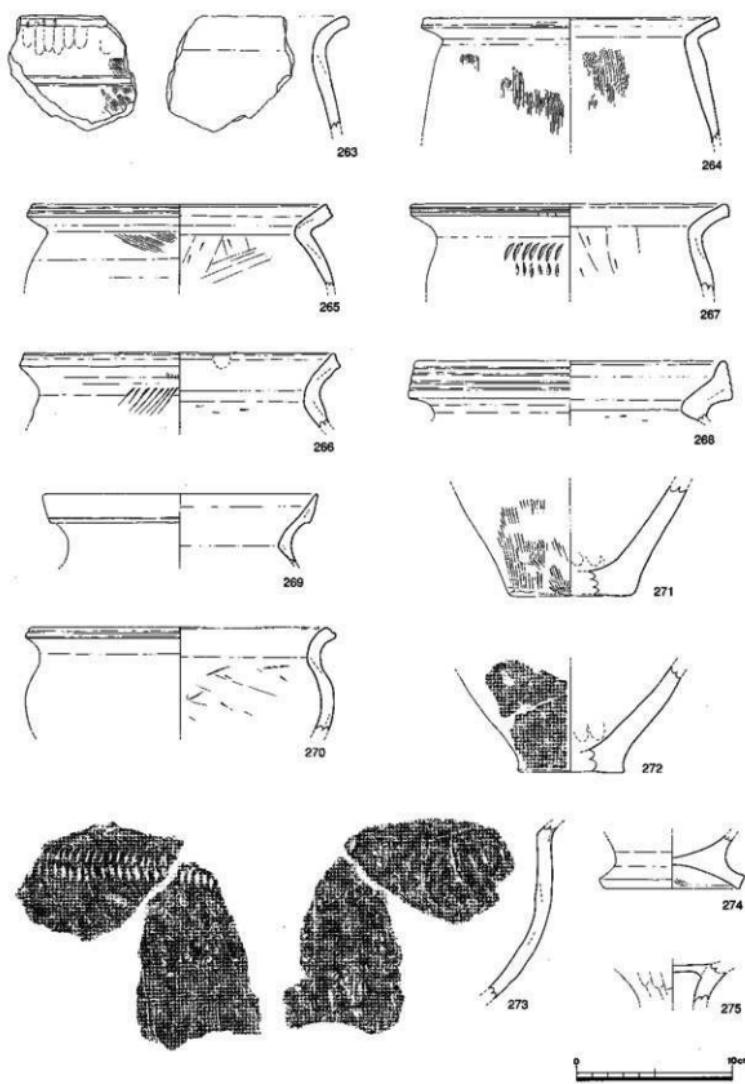
第32図 出土遺物実測図（その13）



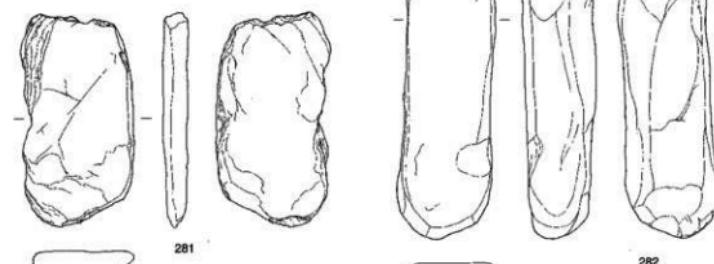
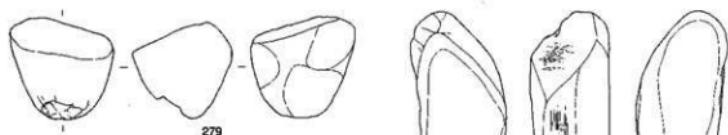
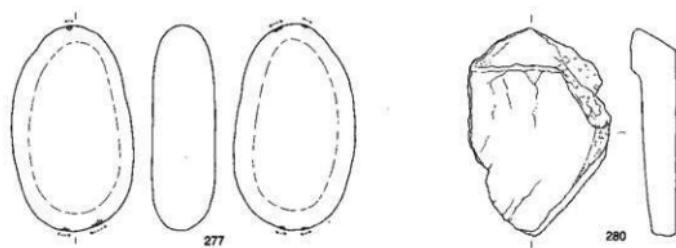
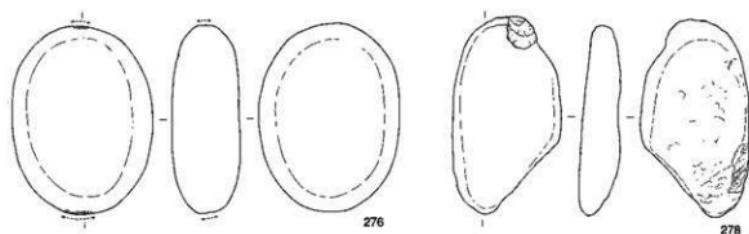
第33図 出土遺物実測図（その14）



第34図 出土遺物実測図（その15）



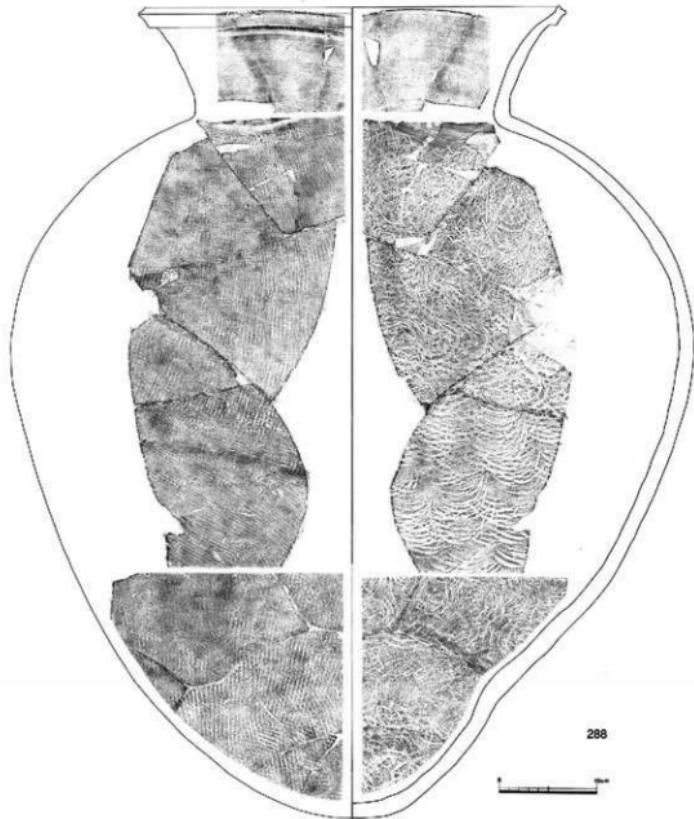
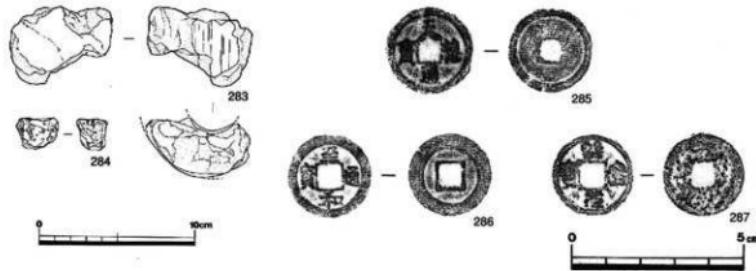
第35図 出土遺物実測図（その16）



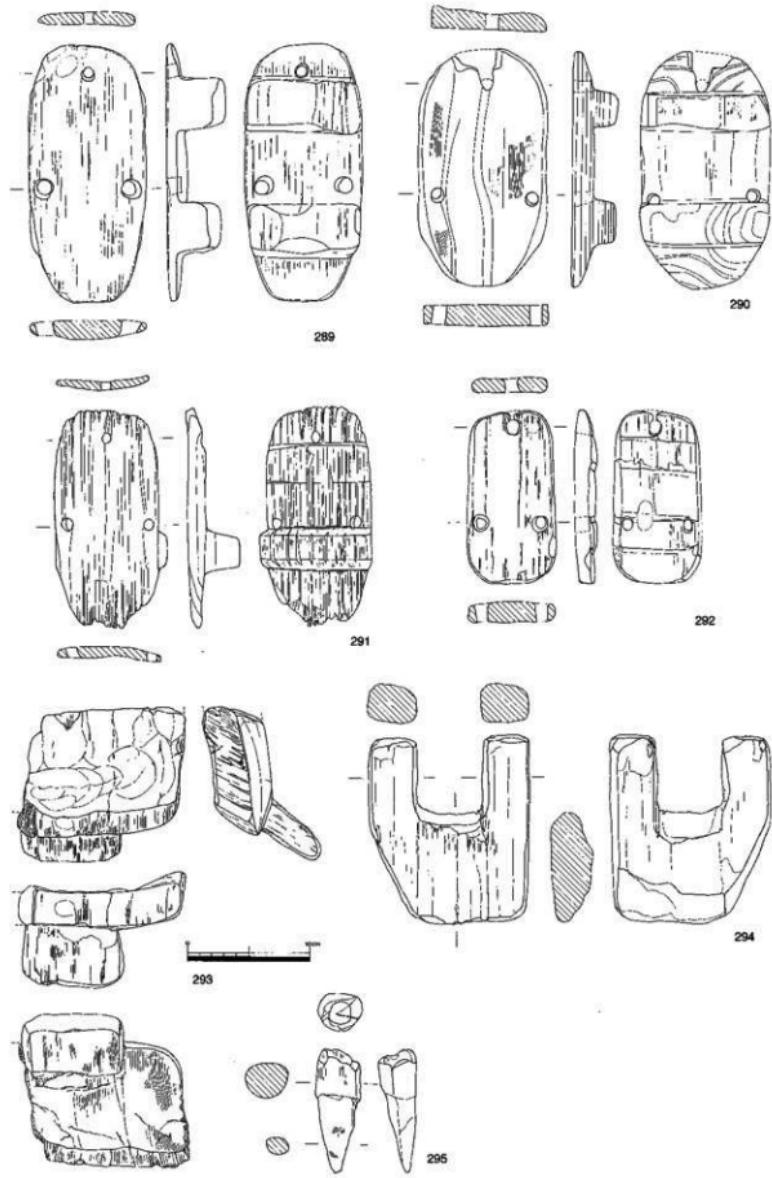
— 質打痕 —

第36図 出土遺物実測図（その17）

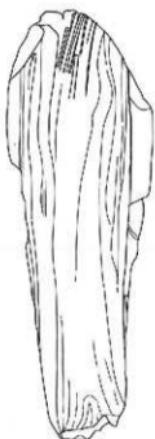




第37図 出土遺物実測図（その18）



第38図 下駄・案・その他木製品遺物実測図（その19）



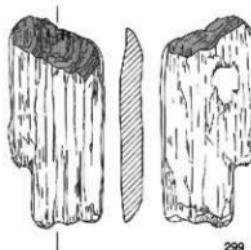
296



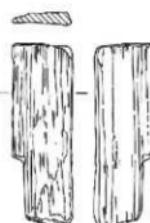
297



298



299



300



第39図 木製品遺物実測図（その20）

第3表 出土遺物観察表

遺物番号	種別	出土地点	種別	器種	法面(m)	特徴		色調	断上	既成	備考
						口径	底高	底径			
1 20 K		表揮区不明		灰窓器 小型瓶				外:回転ナゲ 内:ナゲ	灰色	~2mm の砂粒を含む	良好 宝珠状つまみ
2 *	*	2区 C	*	灰窓	18.0	2.6	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲのち小窓方向 ナゲ	灰色	滑	* 輪状つまみ
3 *	*	B	*	*	-	-	-	圓窓孔 縦平 外:回転ナゲ 内:回転ナゲのちナゲ	灰白色	*	輪状つまみ
4 *	*	*	*	*	12.9	2.7	-	外:ナゲ 内:ナゲ 外:ナゲ 内:ナゲ 外:ナゲ	灰白色	~2mm の砂粒を含む	* 輪状つまみ 外窓一部に 自然釉
5 *	*	1区 D	*	*	13.2	3.2	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲのも不定方向 ナゲ	灰色	~4mm *	輪状つまみ 外窓一部に 自然釉
6 *	K	2区 B	*	*	14.7	3.45	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰白色	~1mm *	輪状つまみ 窓先端か?
7 *	*	D	*	*	13.0	2.9	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	滑	輪状つまみ
8 *		1区 E	*	*	14.4	2.7	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-一小窓方向ナゲ	灰白色	*	輪状つまみ 外窓一部に 自然釉
9 *		2区 B	*	*	12.8	4.0	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰白色	~1mm の砂粒を含む	輪状つまみ つまみ内部へラ 切り直
10 *		1区 D	*	*	13.0	2.5	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	微細颗粒 を含む	輪状つまみ 外窓一部に 自然釉
11 *		2区 B	*	*	15.0	2.6	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-一小窓方向ナゲ	灰白色	~3mm の砂粒を含む	輪状つまみ
12 *		1区 D	*	*	14.0	2.3	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-一小窓方向ナゲ	灰色	~2mm *	輪状つまみ 直角腰部
13 *		2区 *	*	*	-	-	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ	暗灰色	~0.5mm *	輪状つまみ
14 *	K	1区 C	*	*	17.8	3.8	-	回転ナゲ	灰白色	滑	輪状つまみ
15 *	*	B	*	*	14.7	3.7	-	回転ナゲ	灰色	~3mm の砂粒を含む	輪状つまみ
16 *		2区 D	*	*	-	-	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲの天-一小窓方向 ナゲ	灰色	滑	輪状つまみ
17 *	*	C	*	*	15.2	2.5	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	~1mm の砂粒を含む	輪状つまみ
18 *	K	*	E	*	14.0	3.3	-	外:ケズリのちナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	~4mm *	輪状つまみ
19 *	*	B	*	*	13.6	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	滑	輪状つまみ
20 *	K	1区 *	*	*	15.2	2.4	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	*	輪状つまみ 自然釉
21 *		2区 *	*	*	-	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-不定方向 ナゲ	灰色	~0.5mm の砂粒を含む	輪状つまみ
22 *	*	D	*	*	12.4	-	-	外:ケズリのち回転ナゲ 内:回転ナゲ	暗灰色	~2mm *	輪状つまみ
23 *	*	B	*	*	15.0	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	~1mm *	滑
24 *	*	*	*	*	-	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-一小窓方向ナゲ	灰色	滑	輪状つまみ つまみ内部へラ 切り直 爪跡状凹痕
25 *	K	1区 C	*	*	9.8	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-不定方向 ナゲ	灰色	~1mm の砂粒を含む	古墳時代末期
26 *	*	F	*	室の蓋	13.3	2.4	-	回転ナゲ 天井部と底部との境界近く に1条の沈線	灰色	~1mm *	
27 *	*	C	*	*	9.0	1.1	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲの天-不定方向 ナゲ	灰色	~2mm *	
28 *		2区 *	*	新蓋	-	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ 天-放射状のハケ月	灰色	~2mm *	天井部にヘラ 定形あり

遺物 番号	測定 番号	地 区	出土地点	標 記	器 種	形 状	法 長 (cm)		特 徴	色 調	質 土	性 状	備 考	
							口 徑	深 度						
29	21	K	2区	B	圓盤 付耳	圓盤 付耳	15.4	3.7	11.4	灰白色	~1mm の砂粒を含む	小良		
30	*		1区	F	*	*			10.7		~3mm	良好	高台内に爪形状 出現	
31	*		2区	B	*	*	-	-	12.2	灰白色	密	不良		
32	*	*	D	*	小耳跡	*	-	-	8.9	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ 不定方向ナデ	*	良好		
33	*	*	C	*	高台 付耳	*	-	-	9.0	圓盤ナデ	暗灰色			
34	*	*	B	*	*	-	-	-	11.5	圓盤ナデ	灰色			
35	*	*	A	*	环	-	-	-	9.6	圓盤ナデ	灰色			
36	*		1区	F	*	*	-	-	12.0	圓盤ナデ	灰白色	*	やや 小良	
37	*	K	*	D	*	*	28.0	2.7	24.0	圓盤ナデ	灰白色	~3mm の砂粒を含む	*	氯化鉄味
38	*		2区	B	*	高环	-	-		外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ 此:不定方向ナデ	暗灰色	~1mm	*	古墳時代末期 ~奈良時代
39	*		表探区不明	*	*	*	-	-	-	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ	灰色	~1.5mm	*	古墳時代末期 ~奈良時代
40	*	K	2区	C	*	*	-	-	-	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ 同:圓盤ナデ	灰白色	密、5mm の砂粒を含む	不良	古墳時代末期 ~奈良時代
41	*	*	*	*	*	*	-	-	9.0	圓盤ナデ	外:灰白色 内:暗灰色	微細砂粒 を含む	良好	古墳時代末期 ~奈良時代
42	*	*	B	*	*	-	-	-	11.0	圓盤ナデ	灰白色	密	*	古墳時代末期 ~奈良時代
43	*		表探区不明	*	环?	10.4	-	-		外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ	外:暗灰色 内:灰色	*	*	古墳時代末期 ~奈良時代
44	*		2区	C	*	高环	-	-		圓盤ナデ	灰白色	微細砂粒 を含む	不良	古墳時代末期 ~奈良時代
45	22	K	1区	表探	*	高台 付耳	17.2	6.5	12.4	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ	灰白色	~1mm の砂粒を含む	良好	
46	*	2区	B	*	环	16.0	-	-		圓盤ナデ	外:暗灰色 内:灰色	密	*	金属製微環
47	*	*	C	*	*	16.0	-	-		圓盤ナデ	外:暗灰色 内:灰色	*	*	金属製微環
48	*	1区	F	*	*	-	-	-		圓盤ナデ	外:暗灰色 内:灰色	微細砂粒 を含む		
49	*	2区	B	*	*	14.0	-	-		圓盤ナデ	外:暗灰色 内:暗灰色	密	*	
50	*	*	*	*	高台 付耳	*	-	-	8.0	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ	灰色	~2mm の砂粒を含む	*	
51	*		1区	A	*	*	15.0	4.9	10.0	圓盤ナデ	暗灰色	密	*	鑿品
52	*	2区	*	*	环?	16.0	-	-		外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデのちナデ	灰色	*	*	
53	*	K	1区	D	*	高台 付耳	13.5	4.15	9.2	圓盤ナデ	暗灰色	~3.5mm の砂粒を含む	*	
54	*	*	2区	F	*	*	12.4	5.3	9.0	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデ	灰色	密	*	
55	*	1区	C	*	*	11.0	4.5	8.5	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデのちナデ	外:黒灰色 内:青灰色	~2.5mm の砂粒を含む	*	高台上方に 爪形状出現	
56	*	2区	*	*	*	-	-	-	8.6	圓盤ナデ	暗灰色	*		
57	*	1区	B	*	*	-	-	-	8.9	圓盤ナデ	暗灰色	~1.5mm の砂粒を含む	*	
58	*	2区	表探	*	*	-	-	-	6.4	外:圓盤ナデ 内:圓盤ナデの不定方向 ナデ	外:黒灰色 内:暗灰色	~2mm	*	
59	*	*	D	*	*	-	-	-	10.6	圓盤ナデ	灰色	密	*	
60	*	1区	G	*	*	-	-	-	7.8	圓盤ナデのちナデ	灰色	*	*	
61	*	2区	B	*	*	-	-	-	11.6	圓盤ナデ	灰色	~1mm の砂粒を含む	*	

遺物番号	神田 商店 番号	地 区	出土地点	種 別	器 種	寸法(cm)			特 徴	色 調	胎 土	美 成	備 考
						口 径	最 高	底 径					
62	22	1区	F	須志郷	环	-	-	8.0	外:回転ナデ 底:ナデ 内:回転ナデ	灰褐色	磨擦砂粒を 含む	良好	
63	x	x	x	x	x	14.0	-	-	回転ナデ	外:暗褐色 内:灰褐色	底:磨擦砂粒 を含む	x	
64	x	2区	D	x	高台 付环	-	-	8.8	回転ナデ	灰褐色	滑	x	
65	x	x	B	x	x	-	-	11.0	回転ナデ	灰褐色	~2mm の砂粒を含む	x	
66	x	1区	F	x	x	-	-	7.4	回転ナデ	灰褐色	滑	x	
67	x	2区	B	x	x	-	-	10.0	外:ケツリのち回転ナデ 底:回転切りのちナデ 内:回転ナデ	灰褐色	~1.5mm の砂粒を含む	x	
68	x	x	x	x	x	-	-	8.6	回転ナデ	灰褐色	滑	x	
69	x	1区	D	x	x	-	-	9.8	外:回転ナデ 内:回転ナデのち不定方向 ナデ	灰褐色	x	x	高台に風形 状压痕
70	x	2区	x	x	环	-	-	8.6	外:回転ナデ 回転条足 内:回転ナデ	深褐色	x	x	
71	x	1区	x	x	高台 付环	-	-	9.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ 外:ロココナデ 内:ロココナデ 外:一円内状タキ目	灰褐色	x	x	高台置付け部分 に丁目模様
72	23	X 2区	C	x	広口壺	18.0	-	-	外:平行状態上に円錐状突起、 その下へラ抜きの 内:回転ナデ	暗灰色	x	x	西面に自然釉
73	x	1区	F	x	壺	-	-	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	暗灰色	磨擦砂粒を 多く含む	x	
74	x	x	x	x	共回盃	-	-	-	回転ナデ	灰褐色	滑	x	
75	x	x	D	x	x	8.6	-	-	回転ナデ	暗灰色	滑	x	
76	x	X 2区	B	x	x	-	-	9.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ 外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰褐色	x	x	底部缺く外面と 底面に自然釉
77	x	1区	F	x	壺	-	-	-	回転ナデ	外:暗褐色 内:灰褐色	磨擦砂粒を 多く含む	x	
78	x	X 2区	B	x	x	-	-	-	外:ココハのち有輪羽状 内:回転ナデ	灰褐色	滑	x	外面に自然釉
79	x	x	x	x	x	-	-	-	外:タキ目 刀刃状の 内:回転 外:回転ナデのちココナデ	暗灰色	x	x	蝶状の剥離
80	x	x	C	x	x	-	-	-	回転ナデ	外:暗灰色 内:灰褐色	x	x	
81	x	1区	E	x	x	-	-	-	外:ヘラケツリのち回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰褐色 内:暗灰色	x	x	底部付近に 自然釉
82	x	x	B	x	広口壺	10.7	-	-	回転ナデ	暗灰色	~1.5mm の砂粒を含む	x	
83	x	X	D	x	壺	-	-	-	外:回転ナデのち2条と1条 の比較 内:回転ナデ	灰褐色	滑	x	外面に自然釉
84	24	X 2区	B	x	帶孔壺	12.0	-	-	外:ココナデ 指鉗出筋 内:回転ナデ 外:一円内状タキ目	赤褐色	磨擦砂粒を 含む	やや 小良	
85	x	x	x	x	x	-	-	-	外:回転ナデ 最大径近くに 1条の比較 内:回転ナデ	灰白色	~1mm の砂粒を含む	良好	
86	x	x	表揮	x	x	-	-	-	回転ナデ	外:灰褐色 内:灰褐色	~1.5mm の砂粒を含む	x	黒漆用
87	x	X 1区	D	x	x	6.2	5.25	9.4	扁平な脚部 回転ナデ	外:暗褐色 内:灰褐色	~1mm の砂粒を含む	x	外一ロ幕者 一背部にかけて 自然釉
88	x	x	x	x	x	6.0	-	-	回転ナデのちナデ	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	x	
89	x	X	x	x	右付盤	-	-	-	外:ココナデ 内:回転ナデ	暗灰色	滑	x	内面一自然釉 外側の隣下物 付着
90	x	2区	C	x	壺	-	-	-	外:扇一回転ナデ 内:扇一回転ナデ 外:扇一回転ナデ	灰褐色	x	x	内面一漆付着
91	x	x	x	x	x	-	-	-	外:平手タキ目 内:回転ナデ	外:灰褐色 内:灰褐色	x	x	外面に自然釉
92	x	1区	x	x	x	-	-	-	外:ナデ 内:回転ナデ 指鉗出筋	外:灰褐色 内:灰褐色	~3mm の砂粒を 含む	x	

植物	種子	固有	地名	標	測	器	種	形態(cm)			特徴	色調	新	成	備考	
								口徑	基部	基部						
93	31	X	1区	C	銀杏樹	葉	-	-	12.8	-	外:ケズリのちハゲ 内:強・弱輪ナゲ	外:黒褐色~灰色 内:暗青灰色	~1mm の砂粒を含む	良好		
94	*		2区	安藤	*	*	-	-	8.0	-	回転ナゲ	外:暗灰色 内:灰色	~2mm	*	火薙れあり	
95	*	*	B	*	*	*	-	-	8.6	-	別名の方が底部より薄い 回転ナゲ	灰白色	~1mm	*		
96	*	*	*	高台付壁	*	*	-	-	14.6	-	回転ナゲ	灰色	~2mm	*		
97	*	X	*	E	*	葉	-	-	-	-	葉口部	外:墨褐色 内:強・弱輪ナゲ 指紋所底 内:強輪ナゲ	外:墨褐色 内:灰色	~1mm	*	外曲~凹を被る
98	*	*	B	*	*	*	-	-	10.0	-	外:ナゲ 内:ハゲ(裏によるナゲ?)	外:墨灰色 内:灰色	西	*		
99	*	*	D	*	高台付壁	*	-	-	6.0	-	外:回転ナゲ 内:ナゲ	淡灰色	*	*		
100	*		表揮区不明	*	*	*	-	-	6.0	-	外:回転ナゲ 内:強・弱輪ナゲ	外:暗灰色 内:青灰色	~1.5mm の砂粒を含む			
101	*		2区	B	*	*	-	-	8.9	-	外:回転ナゲ 回転系切り のちナゲ	灰色	青	*		
102	*		1区	*	*	*	-	-	-	-	外:回転ナゲ 内:ナゲ	暗灰色	~1mm の砂粒を含む	*		
103	*		2区	*	*	*	-	-	18.0	-	外:ココナゲ 内:ナゲ	風白色	不良好			
104	25	X	1区	D	*	葉	32.0	-	-	-	外:回転ナゲ 内:強・弱輪ナゲ 層一同心円状のタタキ目	黒褐色	~2mm の砂粒を含む	良好		
105	*	*	B	*	*	*	27.2	-	-	-	外:2条の平行花輪開に 内:回転ナゲ	灰色	西	*		
106	*		2区	*	*	*	21.4	-	-	-	外:回転ナゲ 層 3条以上の花輪 内:回転ナゲ	灰色	~2mm の砂粒を含む	*		
107	*	*	表揮	*	*	*	26.4	-	-	-	回転ナゲ	灰色	西	*		
108	*	*	B	*	*	*	-	-	-	-	外:回転ナゲのち2条の回転 層 同心輪開文 内:回転ナゲ	灰色	無斑砂粒を 含む	*		
109	*	X	*	*	*	*	-	-	-	-	外:網状文 波状文(2段 以上) 内:ココナゲ カキ目状の 波状文	灰色	青	*		
110	*	X	*	*	*	*	19.0	-	-	-	外:回転ナゲ キタタキ目 のちナゲナゲ 内:回転ナゲ 同心円状の タタキ目	灰色	*	*		
111	*	*	D	*	*	*	-	-	-	-	外:2条の平行花輪開に波状 文(3段) 内:回転ナゲ	灰色	~2.5mm の砂粒を含む	*		
112	*	*	B	*	葉	-	-	-	-	外:回転ナゲのち2~3層の 花輪開に直上方に網状開の 波状文 内:回転ナゲ	灰色	青	*			
113	*		1区	D	*	*	-	-	-	-	外:回転ナゲ 内:回転ナゲのち不整花 波状文 その下に2条の 平行花輪	外:灰褐色 内:灰色	~3mm の砂粒を含む	*		
114	*		2区	B	*	*	-	-	-	-	外:回転ナゲのち2条、1単位 回転(2段) 内:回転ナゲ	灰色	西	*		
115	*		表揮区不明	*	*	-	-	-	-	外:回転ナゲ 層一同心タタキ目 内:回転ナゲ 層一同心円状のタタキ目	灰色	~1mm の砂粒を揮か に含む	*			
116	26		2区	D	*	*	-	-	-	-	外:同形竹葉文 層一同心タタキ目 内:カキ目状の波状 層一同心円状のタタキ目	灰色	西	*		
117	*		表揮区不明	*	*	-	-	-	-	外:同形竹葉文 層一同心タタキ目のも カキ目(回転ナゲ) 内:回転ナゲ 層一同心円状のタタキ目	灰色	*	*			
118	*		1区	F	*	*	-	-	-	-	外:同形竹葉文 層一同心タタキ目のも カキ目 内:回転ナゲ 層一同心円状のタタキ目	暗灰色	*	*		
119	*		2区	C	*	*	-	-	-	-	外:同形竹葉文 層一同心タタキ目 内:回転ナゲ	灰白色	*	不良		

遺物 番号	探査 番号	図版 番号	地 区	出土地点	基 調	基 盤	柱 径(cm)	柱 高	柱 幅	柱 幅	特徴		色 調	施 工	構 成	備 考
											外:平行タキ目の中多条の カナギ 内:同心円状のタキ目 (ナダ)	灰 色	密	良好		
120	26		2区	B	実器質	裏		-	-	-	外:平行タキ目の中多条の カナギ 内:同心円状のタキ目 (ナダ)	灰 色	密	良好		
121	#	#	#	#	#	#	#	-	-	-	外:平行タキ目の中ナダ 内:同心円状タキ目の中 ナダ	灰 色	~2mm の砂粒を含む	不良		
122	#	#	C	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目の中ナダ 内:同心円状タキ目の中 ナダ	灰 色	~1mm の砂粒を含む	良好	外由に自然地	
123	#	#	表振	#	#	#	-	-	-	-	外:タキ目の中多条の カナギ 内:同心円状タキ目 横振痕	灰 色	密	#		
124	#	#	D	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目 内:同心円状タキ目	暗灰色	#	#		
125	#	#	B	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目 内:同心円状タキ目	外:黒褐色 内:灰色	# ~1mm の砂粒を含む	#		
126	#	#	C	#	#	#	-	-	-	-	外:2種類の斜行する繊維 のうち細 内:繊維ナダ	灰 色	密	#		
127	27	#	A	#	#	#	-	-	-	-	外:帯子状タキ目の中 カナギ 内:同心円状のタキ目	灰 色	#	#		
128	#	#	B	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目(大き い) 内:同心円状のタキ目	灰 色	#	#		
129	#	1区	#	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目の中カナギ 状ナダ 内:同心円状のタキ目	外:褐色 内:青灰色	#	#		
130	#	2区	表振	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目の中カナギ 状ナダ 内:同心円状のタキ目	灰 色	密 ~2mm の砂粒を含む	#		
131	#	#	A	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目 内:同心円状のタキ目	灰 色	密	#		
132	#	表振区不明	#	#	#	#	-	-	-	-	外:上から斜めに平行 タキ目の中も繊維ナダ 内:同心円状のタキ目	灰 色	#	#		
133	#	1区	B	#	#	#	-	-	-	-	外:平行タキ目 ハケ目 内:同心円状のタキ目	灰 色	#	#		
134	#	#	F	#	#	#	-	-	-	-	外:カナギ 内:同心円状のタキ目	灰 色	#	#		
135	#	X I #	C	#	織小暦		-	-	-	-	外:ハケ目による縦・横方向の ナダ 内:織小暦+平行線状の タキ目	外:青灰色~黒褐色 内:灰色	1mm の砂粒を含む	#	外由一部分的に 自然地	
136	28	#	2区	B	#	織	-	-	-	-	外:平行タキ目の中カナギ 内:同心円状のタキ目	灰 色	~5mm の砂粒を含む	#		
137	#	X #	表振	実器質	凹面面	30.8	-	-	-	-	外:織ナダ 内:2条の織痕と方形の 透かし 内:織ナダ	灰 色	密	#		
138	#	#	1区	F	#	#	-	-	-	32.0	外:平行洗纈 直上方に方形 の透かし 内:織ナダ	暗灰色	密 ~3mm の砂粒を含む	#		
139	#	#	2区	B	#	#	19.2	-	-	-	回転ナダ	暗灰色	回転砂粒を 含む	#		
140	#	#	C	#	#	#	16.2	-	-	-	回転ナダ 方形の透かし	灰 色	#	#		
141	#		表振区不明	#	#	#	18.0	-	-	-	外:回転ナダ 2条の平行 洗纈 内:同心円状のタキ目 透かし回転ナダ	灰 色	~2mm の砂粒を含む	#		
142	#	X	2区	E	#	#	14.0	-	-	-	外:2条の平行洗纈 直上方 に方形の透かし 内:回転ナダ 透かし回転ナダ	灰 色	密	#		
143	29	#	C	実器質	跡	23.8	-	-	-	-	外:回転ナダ 内:灰色	外:暗褐色 内:灰色	#	東北焼き窯		
144	#	1区	B	#	#	22.0	-	-	-	-	回転ナダ	灰 色	~1mm の砂粒を含む	#	東北焼き窯 白焼地	
145	#	X	2区	D	#	#	-	-	-	-	回転ナダの中ナダ	灰 色	~3mm の砂粒を含む	#	東北焼き窯 白焼地	
146	#		1区	F	実器質	70cm	16.1	-	-	-	平織山形 回転ナダ	灰 色	回転砂粒 を含む	#		
147	#	X II #	G	実器質	束?	-	-	-	-	-	外:ナダ ハラミ文字大正 内:回転ナダ	外:青灰色 内:灰色	密	#		
148	#	#	B	陶器質	燒	17.0	-	-	-	-	玉織伏地 玉織ナダ	灰 色	#	#	吉賀	

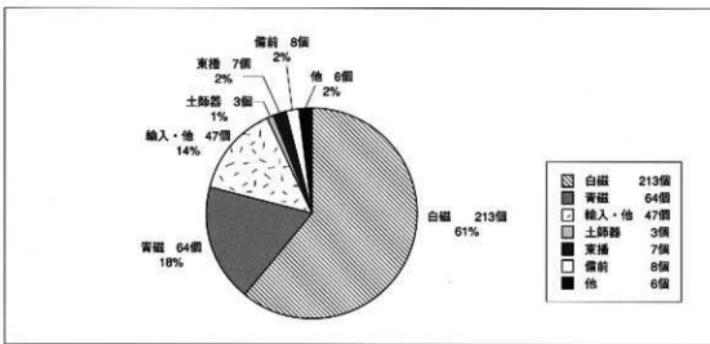
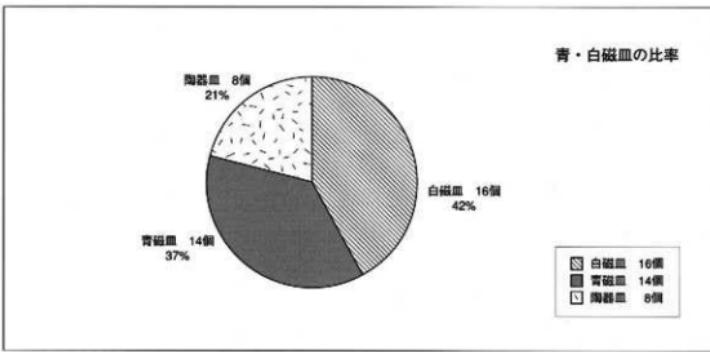
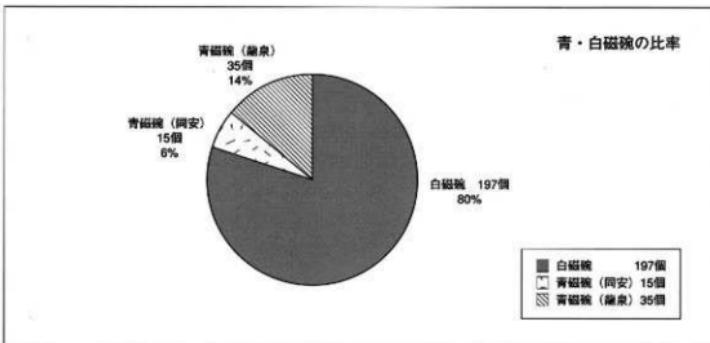
植物番号	標本番号	地名	市町村	山土地点	標高	緯度	経度	位置(m)			特徴		色調	基土	地成	備考
								山頂	鞍部	谷底	外	内				
149	29	1区	C	南端部	16.0	-	-	白樺	人間の玉筋紋に似	灰白色	薄	灰好	新鮮			
150	*	*	*	*	*	16.0	-	*	玉筋状口縁 内:枝・ケズリ	灰白色	*	*	新鮮			
151	*	2区	B	*	*	15.0	-	-	大きな玉筋状口縁 内:口縁下方に低い凹窪	灰白色	*	*	新鮮			
152	*	XII	D	*	*	15.0	-	-	大きな玉筋状口縁 深い削り出しが断面台形の 内:枝・ケズリ	灰白色	黒(やや暗色 あり)	*	新鮮			
153	*	*	B	*	*	-	-	7.0	*	外:体部に僅かに段を有す 内:表面と見込みに浅い凹窪	灰白色	薄(気泡や 多い)	*	新鮮		
154	*	*	D	*	*	14.0	-	-	*	外:体部に僅かに段を有す	灰白色	薄	*	V類		
155	*	*	B	*	*	17.0	-	-	*	外:細い文 内:口縁部と見込みに浅い凹窪	灰白色	*	*	V類		
156	*	XII	pit:28	*	*	17.1	6.7	6.0	内:口縫部と見込み部分に 1本ずつ疣状	粉:白色 株:褐色	密,微細粒状 を含む	*	新鮮			
157	*	1区	C	*	*	15.0	-	-	内:口縫部と枝や芽孔 内:口縫部下方に1条の波状	灰白色	薄	*	黑色粒子化			
158	*	*	B	*	*	14.0	-	-	外方に屈曲する口縫部	灰白色	*	*	V類			
159	*	2区	*	*	*	18.0	-	-	丸みを帯びた体部から巻かに 外:口縫下方に浅い凹窪	灰白色	*	*	V類			
160	*	XII	*	D	*	*	16.0	-	*	直線的に伸びた体部から口縫 部がわずかに屈曲する 内:口縫部に浅い波状	灰白色	*	*	V類		
161	*	*	B	*	*	-	-	6.6	内:見込みと体部の境界に設 置	灰白色	*	*	V類			
162	*	1区	E	*	*	-	-	7.0	内:見込みと体部の境に設 置	灰白色	黒(やや暗色 あり)	*	新鮮			
163	*	XII	尖端不明	*	*	-	-	6.2	内:見込みに段	灰白色	薄	*	XI類			
164	*	1区	F	*	*	-	-	6.0	内:斜面と直角に斜め上す	粉:灰白色 株:オリーブ灰白色	*	黑色粒子を少量 含む	V類			
165	*	*	B	*	*	-	-	7.0	削り出し高台 内:ジメノメ状に筋をはぎ	灰白色	*	*	濃ねむき風 V類			
166	*	2区	A	*	*	-	-	6.0	台形の高い高台 内:枝葉	灰白色	*	*	V類			
167	*	XII	*	B	*	*	-	6.4	巻く筋・高台 内:口縫	灰白色	*	*	V類			
168	30	*	1区	C	*	III	-	-	3.2	底:平底 ハラケズリ 内:口縫	粉:灰白色 株:褐色	*	*	Ⅳ類-C		
169	*	*	D	*	*	-	-	4.2	削り出し高台 内:口縫	粉:灰白色 株:銀灰色	*	*	高台:農竹部分 に斑点を防ぐ 輪編			
170	*	XII		*	*	IV	-	-	4.8	内:削り出し高台 内:枝葉	粉:灰白色	*	*	Ⅲ-1-b		
171	*	*	2区	B	*	*	9.6	2.3	5.4	底:削り出し高台 内:枝葉	灰白色	*	*	濃ねむき風 Ⅱ類		
172	*	1区	D	*	*	16.0	-	-	粗筋 外:ハラチ工具による斜筋文 内:平行縦片	粉:灰白色 株:褐色	*	*	同安葉系 A類			
173	*	*	B	*	*	18.0	-	-	外:片切毛による斜筋文 内:太・丸筋 縦状工具の文	粉:灰白色 株:褐色	*	*	同安葉系 A類			
174	*	XII	2区	*	*	-	-	-	外:シラヘ形文 内:枝葉と真によるジザギ文	粉:灰白色 株:オリーブ灰色	*	*	同安葉系 A類			
175	*		尖端不明	*	*	-	-	-	内:枝葉 花文	灰オリーブ色	*	*	同安葉系 I類			
176	*	1区	C	*	III	-	-	-	内:花文	粉:灰白色 株:灰褐色	*	*	同安葉系 I類			
177	*	XII	*	B	*	*	10.0	-	-	内:削り工具による文	粉:灰褐色 株:灰褐色	*	*	同安葉系		
178	*	*	C	*	*	17.0	-	-	半底	粉:灰褐色 株:灰褐色	*	*	同安葉系 I類			
179	*	XII	2区	B	*	III	-	-	5.0	外:削り工具による平行波状 文 内:削り工具によるジザギ文	粉:灰褐色 株:オリーブ灰色	*	*	同安葉系 I類		
180	*		尖端不明	*	III	..	-	-	5.0	底:削り工具による文	粉:灰白色 株:灰褐色	*	*	同安葉系 I類		
181	*	XII	2区	B	*	*	-	-	5.0	底:削り工具による文	粉:灰白色 株:オリーブ灰色	*	*	同安葉系 I類		

遺物番号	所蔵	部類	地区	出土地点	種別	形種	測量(cm)			特徴	色調	船上	焼成度	備考	
							口径	身高	底径						
182	20		I区	B	陶器	直	-	4.4	青磁	平底 内:輪状工具による文	駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ灰色	青	良好	同上 △層	
183	+	XII	2区	D	+	碗	16.0	-	-	内:片切割文	駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ灰色	+	+	安永実 上層	
184	+		E	+	+	16.0	-	-	外:へら脚型 内:へら脚(花文?)	駆:灰白色 駆:灰褐色	+	+	同上 上層		
185	+	XII	2区	B	+	+	-	-	6.4	削り出し窓内 内:へら状工具による花文	駆:淡灰褐色 内:オーリーブ灰色	+	+	同上 窓内に窓道 具付番 上層	
186	+			+	+	14.0	-	-	-	無文	駆:淡赤褐色 駆:灰褐色	+	+	同上 上層	
187	+	XII	1区	D	+	+	16.0	-	-	厚く織物 外:沈版	駆:灰白色 駆:森白色	+	+	同上 上層	
188	+		E	+	+	16.0	-	-	外:輪邊文	駆:灰白色 駆:明緑灰色	+	+	同上 上層		
189	+			+	+	+	-	-	-	外:輪邊文	駆:灰白色 駆:森灰色	+	+	同上 上層	
190	+	XII	1区	C	+	+	-	-	6.6	高台内の脚をさがる 内:印伝文	駆:淡灰褐色 駆:明緑灰色	+	+	同上 上層	
191	+		2区	E	+	+	-	-	5.4	内:スラッシュ文(花文?)	駆:淡灰褐色 内:オーリーブ灰色	+	+	同上 上層	
192	31	XIII		D	+	+	-	-	5.0	外:輪邊文 内:段落 内:段落アリ(スタンプ花文)	駆:灰白色 駆:オーリーブ灰色	+	+	同上 上層	
193	+		E	+	+	-	-	-	-	外:へら脚型 内:段落 内:棒?	駆:淡灰褐色 駆:灰褐色	+	+	同上 上層	
194	+		2区	B	+	+	-	-	-	外:へら状工具による織痕 内:棒?	駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ色	+	+	同上 B2層	
195	+	XII	1区	E	+	+	12.0	-	-	外:へら状工具による運舟文	駆:灰白色 駆:オーリーブ灰色	+	+	同上 B2層	
196	+		2区	D	+	+	-	-	-	外:輪彫の運舟文 内:へら脚型(花文)	駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ灰色	+	+	同上 B2層	
197	+	XIII	pit28	陶器	四耳罐	9.5	-	-	-	内:輪彫を有する 外:凹輪ナメ 内:凹輪ナメ	外:灰褐色 内:黄褐色	+	+	中古 V1期 12c前半	
198	+		E	+	腰 (底部)	-	-	-	7.0	外:ケズリ 内:黒口底	内:淡土褐色 駆:淡黄色	漆面	+	中国製 初期?	
199	+		C				-	-	-	外:ケズリ ヨコナギ 1部 ミガキ 内:強引凹輪ナメ 指捺底 底=同心円状の輪状旋波	外:暗灰褐色 内:黄褐色	~1mm の砂粒を含む	+	中国製?	
200	+			陶器	湯沸	8.0	-	-	-	青磁 厚く施釉	駆:灰白色 駆:森灰色	青	+		
201	+	XIII	2区	D	陶器	直	9.3	2.7	3.0	内:段あり	駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ色	青面	+	中国製	
202	+		C	陶器	合子	5.0	-	-	-	内:輪彫器は受口狀 外:笠押し花弁状文	駆:灰白色 駆:オーリーブ灰色	青	+	中古 V1期	
203	+		B	+	+	-	-	-	4.6	薄手でいもをもつ 高台内まで全面施釉	駆:灰白色 駆:淡灰色	+	+	中国製	
204	+		F	施釉 陶器	环	-	-	-	4.4	高台内まで全面施釉 内:段落	駆:淡灰褐色 駆:灰褐色	+	+	中国製	
205	+	XIII		D	陶器	直	-	-	-	内:青磁底のタタキ目	駆:淡赤褐色 駆:外:オーリーブ色 内:青色	+	+	中国製	
206	+		B	+	直	9.0	2.05	5.2	-	底:圓底斜切り 内:見込みに目跡 底:圓底斜切り	駆:淡灰褐色 駆:淡灰褐色 駆:オーリーブ色	+	+	中国製	
207	+			+	+	7.6	1.6	3.2	-	外:目跡下に浅い沈窪	駆:灰白色 ~1mm の砂粒を含む	+	+	中国製	
208	+	XIII	2区	B	土師質	羽足	23.8	-	-	-	内:目跡下に浅い沈窪	駆:灰白色 ~1mm の砂粒を含む	普通	+	
209	+		C	石製品	石鍋	20.0	--	-	-	-	-	-	-		
210	+	XIII		D	家畜質	羽足	-	-	-	内:平行タタキ目 底:圓底斜切り	駆:灰褐色 内:砂粒を含む	良好	鹿田?		
211	+		F	石製品	案臼?	-	-	-	-	-	黒褐色	-	-		
212	+			サカ?	-	-	-	-	-	底面約 1.5cm の穿孔	駆:青褐色	青	良好		
213	32	+	2区	B	陶器	直	-	-	-	外:上方に白(黄色)のゴマ施 内:ナメ	駆:灰褐色	+	+	佛頂 M層 14c後半	
214	+		D	+	擦跡	-	-	-	-	外:凹輪ナメ 内:輪目(9条)	青灰色 ~3mm の砂粒を含む	+	+	佛頂 M層 14c後半	
215	+			+	+	30.0	-	-	-	外:凹輪ナメ 内:輪目	駆:茶褐色	青	+	佛頂	
216	+		F	+	要	-	-	-	-	外:表面のタタキ目 内:ナメ	外:オーリーブ黄色 (白熱物) 内:青い水褐色	-	-	青磁系 白色 黒色粒子 を含む	

遺物 番号	所蔵 番号	出土地点	編 目	器 種	器 量	法身(cm)			特 徴	色 調	粘 土	燒 成	備 考	
						口 径	底 径	高 度						
217 32	1区	D	陶器	罐形				14.0	外:ナゲ 内:擦り目(らぬ)	灰褐色	~3mm の砂粒を含む	良好	中世	
218 *		未掲	*	*	-	-	-	-	平底 外:ナゲ 内:擦り目	にぶい褐色	~3mm の砂粒を含む	*	備考	
219 *	1区	D	丸窓	*	28.0	-	10.0	-	ハケのちナゲ	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	不良	中世	
220 *	2区	B	*	鉢?	20.0	-	-	-	同上?*	灰白色	粗砂を含む	*		
221 *	XIII	*	*	土師器	大鉢	22.0	3.1	-	平底 ナゲ	にぶい赤褐色	*	良好	赤色顔料含む? 良良~中世	
222 *	*	*	*	土師器	甕	25.0	-	-	單純口縁 外:ナゲ 内:ナゲ ケズリ	にぶい褐色	*	不良		
223 *		未掲	*	*	18.8	-	-	-	單純口縁 外:ナゲ ハケ 内:ナゲ ケズリのちハケ	にぶい褐色	~2mm の砂粒を含む	良好	良良~平安	
224 *		*	*	*	*	24.6	-	-	單純口縁 外:ナゲ ミガキ 内:ケズリのちナゲ	外:黄褐色 内:灰褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	良良~平安	
225 *	XIII	2区	B	*	*	21.4	-	-	單純口縁 外:ナゲ タクハケ 内:ケズリのちナゲ	にぶい黃褐色	~3mm の砂粒を含む	*	良良~平安	
226 33	*	*	*	*	*	33.0	-	-	單純口縁 外:ナゲ 内:ナゲ ケズリのちナゲ	にぶい黃褐色	~4mm の砂粒を含む	普通	外:スズ竹筋 良良~平安	
227 *	XIII	Pit45	*	鉢	30.0	-	-	-	外:ハケのちナゲ? 内:粗ひハケ	灰白色	~1.5mm の砂粒を含む	良好	内:スズ竹筋 重ね焼き痕	
228 *	1区	E	*	*	19.4	-	-	-	-	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	不良	重ね焼き痕を真似した地元土	
229 *	XIII 1区~ 2区間	未掲	*	大鉢	-	-	10.8	-	外:ナゲ 内:ナゲ	にぶい赤褐色	~1mm の砂粒を含む	良好	赤色顔料含む? 良良~中世	
230 *		Pit44	*	杯	13.0	3.8	7.4	-	平底 同軸系切りのちナゲ 外:ナゲ クリーパー縁 内:細軸系のちハケ ヘラ 平底 同軸系切り 外:ナゲ 内:同軸系デジ 指揮直底	外:灰褐色 内:にぶい黄褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	中世	
231 *	XIII	1区	D	*	*	-	-	7.4	-	浅黄褐色	~1mm の砂粒を含む	普通	中世	
232 *	*	*	*	*	*	-	-	6.8	-	浅黄褐色	~1mm の砂粒を含む	*	中世	
233 *	2区	A	*	*	-	-	-	6.0	平底 同軸系切り 厚手 同軸系デジ	浅黄褐色	~2mm の砂粒を含む	不良	中世	
234 *	*	*	*	*	*	*	-	-	平底 同軸系切りのちナゲ 厚手 外:ナゲ 内:同軸系ナゲ 凹凸状の ナゲ風	浅黄褐色	微砂を含む	良好	中世	
235 *	XIII	1区	D	*	皿	10.8	2.0	7.6	-	平底 外:同軸系ナゲ 内:同軸系のち指揮直底	灰褐色	粗砂を含む	*	スズ竹筋
236 *	*	1区~ 2区間	未掲	*	*	9.7	1.7	6.0	平底 同軸系切り 外:ナゲ 内:同軸系ナゲ	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	*	中世	
237 *	2区	D	*	*	9.1	2.0	6.4	-	平底 固体水切り 同軸系デジ	赤褐色	~1mm の砂粒を含む	*	中世	
238 *	XIII	Pit12	*	小皿	8.7	1.7	5.6	-	平底 同軸系切り 同軸系デジ	灰褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	中世	
239 *	*	Pit	*	皿	8.3	1.6	5.8	-	やくらけ底 平底 同軸系切り 同軸系デジ	にぶい黄褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	中世	
240 *	2区	D	*	*	8.9	1.5	5.8	-	平底 同軸系切り 同軸系デジ	にぶい褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	赤色顔料含む 中世	
241 *		Pit57	*	*	7.6	1.1	5.6	-	うらえ底 平底 同軸系切り 同軸系デジ	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	*	中世	
242 *	2区	B	*	*	9.8	1.4	7.0	-	平底 同軸系切り 外:ナゲ 内:同軸系ナゲ	浅黄褐色	画	中や 不良	中世	
243 *	XIII	1区	C	*	环?	-	-	3.9	平底 癖成後乳 ナゲ	にぶい褐色	~1mm の砂粒を含む	良好	中世	
244 34	*	*	D	*	*	-	-	4.8	やくらけ底 静止系切り 空孔 内:ナゲ	黄茶褐色	画	*	中世	
245 *	*	2区	B	*	皿 (両合 付)	6.8	2.6	8.7	枝状合底 平底 余切り底? 外:ナゲ しほり痕 内:同軸系デジ	うすい褐色	*	普通	小型 中世	
246 *	XIII	1区	D	土製品	土瓶	4.7	2.2	0.8	-	-	~2mm の砂粒を含む	*	重量:18.0g	
247 *	*	*	B	*	*	3.8	2.15	0.5	防錆形	灰褐色	~1mm の砂粒を含む	*	須恵器 重量:19.0g	

透敷号	地図番号	地 区	出土地点	種 別	基 類	法量(cm)			特 故	色 調	輪 上	構 成	備 考
						口	径	高					
248	34	X N	I区	C	土製品	上鉢	無	孔底	太めの門型脚	にぶい褐色	~1mm の砂粒を含む	骨面	重量:14.0g
249	*	*	D	*	*	3.6	2.1	0.9	細い管形	にぶい褐色	~1mm の砂粒を含む	*	重量:3.0g
250	*	X N	トレンチーI	繩文土器	深鉢	-	-	-	外:實体状に指顎正直状の 割れ目 内:1条の沈継か? 指顎片痕	外:淡黃褐色 内:米灰色	~1mm の砂粒を含む	*	
251	*	*	*	*	*	-	-	-	外:高部とその下方に 刻み目 内:斜板	灰黄色	~2mm の砂粒を含む	*	
252	*	*	I区	C	繩文土器	深鉢	-	-	2枚貝多底	灰褐色	~2mm の砂粒を含む	良好	
253	*	*	*	D	*	*	-	-	外:4枚以上の凹縫 内:1枚目と2枚目 内:3枚目	淡紫褐色	~2mm の砂粒を含む	*	
254	*	*	2区	A	浅鉢	26.0	-	-	ミガキナダ	墨褐色	*	*	
255	*	*	B	野生土器	並	24.0	-	-	外:ナダ 内:裏面のハケのちナダ?	灰褐色	~3mm の砂粒を含む	やや 不良	前期
256	*	*	I区	C	*	*	-	-	外:厚底盤による枕頭(平行 と斜角) 内:ナダ	にぶい褐色	~4mm の砂粒を含む	良好	前期
257	*	*	B	*	*	-	-	-	外:刻み目 刻文下方に羽 状の上部 内:ナダ?	灰白色	~1mm の砂粒を含む	*	前期
258	*	*	E	*	*	-	-	9.3	外:ナダ? 内:ナダ? 指顎正直	外:灰褐色 内:淡褐色	~1.5mm の砂粒を含む	やや 不良	風化気味 前期
259	*	*	B	*	*	-	-	6.4	外:ナダ? ミガキ? 内:ナダ? のちナダ?	灰褐色	~3mm の砂粒を含む	良好	前期
260	*	*	*	*	*	-	-	6.8	ナダ?	にぶい黄褐色	~3mm の砂粒を含む	風化氣味 初期	
261	*	X N	*	*	壁?	-	-	3.0	ナダ?	外:にぶい褐色 内:灰褐色	~3mm の砂粒を含む	風化氣味 初期	
262	*	*	*	*	壁	-	-	4.8	外:ナダ? 指顎正直 内:裏ナダ? 指顎正直	外:淡褐色 内:褐色	~3mm の砂粒を含む	*	前期
263	35	X N	トレンチーI	*	壁	-	-	-	外:階み目 2条のハラ 折 平行縫 内:ナダ? ハケ	外:灰黃褐色 内:にぶい黃褐色	~2mm の砂粒を含む	*	前期
264	*	*	I区	B	*	*	18.8	-	外:山 ヨコナダ 内:タテハケのちナダ? 内:ヨコナダ? 体:ハケのナダ?	にぶい黄褐色	~2mm の砂粒を含む	*	風化氣味 中期
265	*	*	*	*	*	19.0	-	-	外:山? 2条の沈継 内:ヨコナダ? 内:ナダ? ハケ 内:ヨコナダ? 内:ナダ? ハケ?	にぶい黄褐色	~3mm の砂粒を含む	*	風化氣味 中期後期
266	*	*	*	*	*	20.0	-	-	外:ローラ? 第1-「1」字状の沈継斜穴 内:ナダ? 指顎正直	にぶい黄褐色	~4mm の砂粒を含む	*	風化氣味
267	*	X N	*	*	*	20.6	-	-	外:山? 2条の沈継下部に 刻み目? 内:ナダ?	にぶい黄褐色	~3mm の砂粒を含む	*	風化氣味 後期の初め
268	*	*	C	*	*	20.0	-	-	外:ヨコナダの沈継文 内:ヨコナダ? 内:ナダ? ハケ?	にぶい褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	風化氣味 後期の初め
269	*	*	D	*	*	17.6	-	-	ナダ?	外:にぶい褐色 内:灰褐色	~3mm の砂粒を含む	不良	風化氣味 後期
270	*	*	B	*	體	19.0	-	-	外:塔形に沈継? 内:ナダ?	にぶい黄褐色	~3mm の砂粒を含む	良好	風化氣味 後期の後半
271	*	*	トレンチーI	*	壁	-	-	8.0	外:ナダ? ハケ? 内:ナダ? 指顎正直	褐灰色	~2mm の砂粒を含む	*	後期後期
272	*	I区	C	*	*	-	-	6.8	外:ナダ? ハケ? 内:ナダ? 指顎正直	にぶい褐色	~4mm の砂粒を含む	*	
273	*	X N	B	*	鉢	-	-	-	外:横? ローラ? 手状の沈継 内:ナダ? 内:ナダ?	にぶい黄褐色	~2mm の砂粒を含む	*	後期の初め
274	*	*	未詳区不明	*	要	-	-	8.5	内:ナダ? 内:ナダ? 黒色を呈す	外:淡褐色 内:褐色	~1.5mm の砂粒を含む	*	
275	*	2区	D	*	高耳	-	-	-	外:ナダ? 内:ナダ?	にぶい黄褐色	~1mm の砂粒を含む	*	中期後期
276	36	X N	I区	*	石器	磨石	英さ 13.0	幅 9.0	厚さ 4.1	敲打痕あり	灰色		重量:740.1g
277	*	2区	E	*	*	英さ 13.1	幅 7.5	厚さ 4.9	敲打痕あり	にぶい灰白色		重量:650.0g	

遺物番号	種類	国宝番号	地 区	出土地点	種	別	器	種	収集(cm)			特 徴	色 調	附 七	純 成	備 考	
									口 径	器 高	底 径						
276	36	2区	C	右側	脚石	一	長さ 幅 厚み	一	12.6	7.0	2.6	一	灰 色	一	重量:339.1g		
279	*	*	B	*	敵石	一	在善長	幅 厚み	6.5	6.6	6.4	破打痕あり	淡緑灰色	一	重量:300.1g		
280	*	XV	*	C	石製品	理?	在在長 在在幅	幅 厚み	13.3	9.1	2.96	一	淡緑灰色	一	重量:370.4g 風字縞		
281	*	*	1区	*	石	打削	長さ 幅 厚み	13.7	7.2	1.7	一	灰 色	一	重量:250.0g			
282	*	*	*	D	*	一	長さ 幅 厚み	26.3	5.8	4.5	一	顕著あり?	淡緑灰色	一	重量:1280.0g		
283	37	*	*	*	明山	一	一	一	2.0	2.7	1.9	円錐形?	外:にぶい黄褐色 内:にぶい灰色	~1mm の砂粒を含む	良好	重量:86.0g	
284	*	*	1区	D	鍛冶斧	一	長さ 幅 厚み	2.5	0.69	一	側面に伊勢探行岩	暗緑灰色	一	良好	重量:20.0g		
285	*	*	2区	B	古鏡	一	長さ 幅 厚み	2.5	0.61	一	中國劉宋族 1017年 天祐 通寶	暗緑灰色	一	重量:2.5g			
286	*	*	*	C	*	一	長さ 幅 厚み	2.5	0.61	一	中世主宋統 1054~1055年 至和通寶	暗緑灰色	一	重量:3.0g			
287	*	*	1区	D	*	一	長さ 幅 厚み	2.4	0.61	一	II 通寶	暗緑灰色	一	重量:2.6g			
288	*	XV	2区	E	須惠器	裏	幅	44.0	83.1	一	外:ローラー脚ナダ 内:子手タタキ目のも 内:一凹窓ナダ 内:一凹窓ナダ 外:一心円状のタタキ目 のうち下方ナダ	灰 色	密	良好	右足用		
289	38	X V	1区	F	木製品	F脚	長さ 幅	21.0	9.6	一	馬脚下駄	一	一	一	一		
290	*	*	2区	C	*	*	長さ 幅	19.4	10.6	一	馬脚下駄	一	一	一	一		
291	*	X M	1区	F	*	*	長さ 幅	17.5	6.2	一	馬脚下駄	一	一	一	一		
292	*	*	*	G	*	*	長さ 幅	14.2	7.3	一	馬脚下駄	一	一	一	左足用 子供用		
293	*	*	2区	B	*	革	一	一	一	一	一	一	一	一	一		
294	*	X VI	*	C	*	U字状 木製品	長さ 幅 厚み	15.3	12.0	3.4	一	一	一	一	一	腰袋部材の一端 か?	
295	*	*	*	*	*	復状 木製品	長さ 幅 厚み	10.1	3.7	2.1	一	一	一	一	一		
296	29	X VI	*	B	*	一	長さ 幅 厚み	35.8	12.0	4.7	一	一	一	一	一		
297	*	*	1区	F	*	枕状 木製品	長さ 幅 厚み	40.7	2.6	2.4	一	一	一	一	一		
298	*	*	2区	B	*	羽子板 状木製品	長さ 幅 厚み	19.8	4.6	0.8	一	一	一	一	一		
299	*	*	1区	G	*	枕状 木製品	長さ 幅 厚み	17.5	7.8	1.8	一	一	一	一	一		
300	*	*	2区	B	*	包丁等 木製品	長さ 幅 厚み	14.9	5.0	1.0	一	一	一	一	一		



第40図 酒屋原遺跡出土土器・陶磁器の比率

第4表 発掘区別出土遺物数一覧表

区 上器	1区							1区～ 2区間		2区							
	A	B	C	D	E	F	G	表採	表採	A	B	C	D	E	F	G	表採
須恵器	2	8	8	15	1	13	2	1		4	43	17	11	4	1		7
土師器	11	4	6	3					2	3	8		3				
白磁		5	4	3	1	1				1	5		1				
青磁		3	3	2	2						6		3	4			
他輪人			1		1	2				1	1	1					
備前				2						1							
東船		1									1	1					
その他		1		1		3				1							
石器			1	2							1	1	1				
石製品			1	1							1						
土製品		1	1	2													
鐵冶滓				1													
羽口				1													
古鏡				1							1	1					

注) 個数は図示したものの数、出土地点不明なものは除外

第5章 総 括

〔遺跡の位置と規模〕酒屋原遺跡は益田川右岸の段丘上に営まれた遺跡である。遺跡が立地する段丘は川沿いの沖積地に向かって大きく張り出す。その先端部の緩い傾斜面を平坦に加工して基盤が造成され、各種の遺構が営まれていた。調査範囲は公民館敷地西・南辺帶状平坦部であるが、遺跡の本來の規模は、公民館敷地はもとより南東部に大きく広がる丘陵先端の平坦面、すなわち中倉川と益田川によって両側を限られ、前面に川沿いの沖積地を控えた区域全体（東西約200m、南北約300m）に及ぶと考えられる。益田川流域では旧市内に三宅御土居跡、今市船着場遺跡、沖手遺跡、上久々茂遺跡、大峠遺跡等があり、旧町内では大牟ノ元遺跡、森下遺跡等が知られている。その中で遺跡規模が判明しているのは三宅御土居跡だけである。酒屋原遺跡は地形と今回の調査で大方の範囲を想定することができた。この想定が妥当であるならば、本遺跡は三宅御土居跡にも勝る流域屈指の大遺跡とすることができるのではないだろうか。

〔検出された遺構について〕1区からは石組遺構（S R01）、溝（S D01）、ピット群が検出された。S R01は石敷きの道路遺構と想定した。S D01は小規模な境界溝であろう。多数で大小様々なピット群については、これを建物跡、墓坑として捉えることはできなかつた。S R01やS D01と並行する柵列の可能性も考えられるが、判断は難しい。代表的なP 28等から推定して、S R01で西側を限られたある種の特別区とすることで満足するに止まる。あるいは大規模な集落遺跡の一角に設けられた特異な区域（祭祀ないしは宗教的ゾーンか）とするべきか。1区の遺構群が機能した時期は11～12世紀頃と考えられる。

2区では2列の石組遺構が検出された。2条の道路遺構とみたが、築造時期は奈良時代と想定できた。この両者検出部西方で交錯・合流すると思われる。

今次調査は大遺跡の西辺と南辺の一部に対して行なったもので、上記の遺構群は遺跡の縁辺に営まれた構造物の可能性が高い。遺跡の主要部分は八幡宮前方の平坦部や公民館敷地の下部に埋蔵されていると考えられよう。

〔出土遺物〕調査区の総面積は約1300m²と比較的小範囲であったが、出土遺物の量はかなり多く、旧美都町内では最大量の出土であった。その内訳は、縄文土器・弥生土器・土陶器・須恵器・陶器・陶磁器・石器・木製品等多種多様である。出土量が卓越するのは須恵器で、なかでも輪状つまみが付く蓋と高台付きの身がセッタとなる蓋杯の量が目に付いた。この蓋杯は石見空港編年のⅢ期に属し、およそ奈良時代後半から平安時代初期に相当すると考えられる。次に顕著な存在を示すのが白磁碗や青磁碗等の輸入陶磁器類である。これらは主として11～14世紀に位置付けられ、とくに白磁碗Ⅳ・V類、同安窯系青磁碗I類、龍泉窯系青磁碗I類の多量出土が注意される。こうした土器・陶磁器が示す時期と出土量からは酒屋原遺跡の盛期が奈良時代から平安時代前半と同時代末期から鎌倉時代前半期にあるとすることができよう。

これら以外にも縄文晚期土器・弥生土器（前・中・後期）が出土したことは重要であり、これらに統いて古墳時代の土器、あるいは中世後半期の陶器・陶磁器類が検出されたこと

は本遺跡が数時代にわたって継続的に存続したことを見ている。さらに、外来の陶器・陶磁器類の存在からは益田川と川筋に沿う道路を利用した交易との関わりを垣間みることができよう。あるいはまた、複数個の円面鏡や下駄が出土したことでも遺跡の性格を知る上で見逃せない。こうした長期の継続性と交易性は酒屋原遺跡が流域の大拠点集落であったことを物語るものであろう。

〔酒屋原遺跡調査の意義〕近年、益田市三宅御土居遺跡の調査を皮切りに中世益田氏関連遺跡の調査が盛んに行なわれるようになってきている。酒屋原遺跡の発掘もその列に加わるものであるが、調査の結果、本遺跡は益田川中流における古代から中世にかかる拠点的な集落遺跡であることが明らかになった。このことは隣接する東仙道土居遺跡等とも併せて東仙道地区が古代の地域行政の中心地であり、中世期にも有力土豪の本拠地であったことを推察させる。文献上で益田氏中興の主とみられる益田兼見の出自地が仙道地区とされることとの関連性も大いに注目されるところである。

石見地方は埋蔵文化財の分布が希薄で、どちらかといえば考古学者や歴史研究者、あるいは地方史に关心をもつ人の注目度には今ひとつ熱いものがみられなかった。しかし、大田市白坏遺跡、江津市半田浜西遺跡、浜田市古市遺跡、同市横路遺跡、旧旭町重富遺跡、旧石見町天藏寺原・寺の前遺跡、益田市の益山氏関連遺跡・石見空港の大溢遺跡、津和野町高田遺跡等の多くの遺跡が発掘調査され、石見地方における古代から中世に至る歴史について考古学の側からの解明が大いに前進してきた。酒屋原遺跡の調査もそうした地域研究の一環に連なるものであることを確認しておきたい。とりわけ、古代に地方官衙的様相を示す遺跡が中世になどても地域の中核的遺跡として存続する傾向が判明しつつあることは意義深い。たとえば、白坏遺跡は9世紀末から10世紀にかかる遺物が出土しているが、その中には木簡25点が含まれている。天藏寺原・寺の前遺跡では奈良時代後半に属する大型の掘立柱建物跡が「コ」字状に配置された状態で検出されている。遺跡は、さらに平安・鎌倉時代にまで継続する。酒屋原遺跡では上記遺跡群のような官衙的性格や有力者の館の様相を端的に示す遺構・遺物はえられてはいないものの、遺跡の規模、古代・中世の遺物、とくに複数の鏡や多くの輸入陶磁器類の出土によって古代の地域行政に深く関わった遺跡から有力土豪の拠点的遺跡への移行相を辿ることができた。今次調査のもっとも大きな成果といえる。

〔反省と課題〕現地調査者が不慣れのため調査の進行上でいくつかの不手際が生じたことは否めない。今後は酒屋原遺跡の中心部や益田川中・上流一帯の調査を精力的に進めて、今次調査の欠を補い、地域の歴史解明にいっそ貢献したいと考える。

なお、現地調査から報告書刊行までは多くの機関と人士の指導・協力をえていた。筆を置くに当り、あらためて深甚の謝意を表したい。

参考文献

大國晴雄・遠藤浩巳『白坏遺跡発掘調査概報』(『大田市埋蔵文化財調査報告書』8) 1989年 大田市

教育委員会

- 大橋寛他『天藏寺原・寺の前遺跡』(『島根県邑智郡石見町文化財調査報告書』18) 2004年 石見町教育委員会
- 柳原博英他『伊丹土地区廻松理事事業に伴なう古市遺跡発掘調査概報』1995年 浜田市教育委員会
- 柳原博英他『横路遺跡(原井ヶ市地区)』(『浜田東中学校建設工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書』) 1998年 浜田市教育委員会
- 西尾克己他『石見空港建設予定地内遺跡 墳蔵文化財発掘調査報告書』1992年 島根県教育委員会
- 木原光他『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 七尾城跡、三宅御上居跡、沖手遺跡、中世石造物分布調査』 2003年 浜田市教育委員会
- 宮田健一『高田遺跡』(『津和野町埋蔵文化財報告書』Ⅰ～Ⅲ) 1991～1993年 津和野町教育委員会

特論 1

酒屋原遺跡堆積層の特徴

中村唯史

(三瓶自然館サヒメル)

1. 酒屋原遺跡は小規模な扇状地上に立地

益田川支流の谷出口を頂点とするなだらかな三角錐状地形。

2. 堆積層は急峻な谷から吐き出された、淘汰の悪い礫層が主体

- ・礫層の特徴から読み取れる堆積環境

酒屋原遺跡の礫層は数mmから人頭大程度までの礫が混在する粒径淘汰が悪い地層である。礫は硬質な亜角礫を主体として、配列構造(インプリケーション)や級化構造(グレーディング)といった堆積構造はほとんど認められない。

礫の形が角張っている(亜角礫)ことからは、礫の供給源が近いことが推定できる。益田川のような流程がある程度長い河川であれば、中～下流域では運搬される課程で円滑された円礫が多く含まれる。

粒径淘汰が悪い、配列構造と級化構造が認められないといった堆積構造的特徴からは、この礫層が土石流的な流れによってもたらされたことが推定できる。土石流とは岩屑物(礫・砂・泥)と水が一体となって重力落下する流れで、土石流の流れの中では岩屑物粒子の淘汰は殆ど起こらない。したがって、細粒物と粗粒物が渾然一体となった地層が形成される。このような地層は「淘汰が悪い」と表現される。

一方、通常の河川水流の中では、岩屑物粒子は自ら重力落下するのではなく水に押されて移動する。小さくて軽い粒子は弱い流れで運ばれ、大きくて重い粒子は強い流れの中でないと運ばれない。そのため、流れの強さによって粒子は淘汰され、同じ条件であれば似たような粒径の粒子が堆積する。

流れの強さが連続的に変化すると、それに応じて堆積する粒子の大きさも変化する。例えば、増水した状態から次第に水量が衰えた場合には、初めは大きな粒子が堆積し、流れの減衰に応じて小さな粒子が堆積するようになる。これを地層としてみると、下の方には大きな粒子があって、上になるほど粒子が小さくなる。このように一枚の地層の中で鉛直方向に漸移的に粒径が変化する構造を「級化構造」という。上石流堆積物は谷から平地に出ると急速に減衰して、粒径淘汰が起こるまもなく堆積するので級化構造が殆ど認められないことが普通である。

また、配列構造とは次のようなものである。河川水流中を運ばれる岩屑物粒子は川底付近を転がるようにして移動する。粒子が停止して堆積するとき、粒子は先に停止した粒子に対して斜めにもたれかかる形で停止する。これを断面で見ると、ドミノ倒しのように前

の粒子に対して次々にもたれかかる形になる。このような構造もまた土石流堆積物では殆ど認められない。配列構造は河川で容易に観察できる。

3. 地層の形成と遺物の埋没

酒屋原遺跡の疊層断面をみると、疊層は厚さ10数cm～数10cmの何枚かの地層に区分でき、その境界には泥質層を伴うことがある。これは土石流的な堆積が何度も渡って起こったことを示すと考えられる。

疊層の境界部分はある時期の地表面だったと考えられ、泥質層はその時の土壤の可能性が高い。

ここで遺物（土器）の出土パターンを考えると、(1) 疊層中に含まれるもの、(2) 疊層上部の搅乱部分に含まれるもの、(3) 疊層上面または泥質層に含まれるもの、の3通りが考えられる。(1) は本来他の場所にあった遺物が疊とともに運ばれて堆積した可能性が高い、(2) は(1)と同様の場合と、古地表にあったものが地表が搅乱される課程で潜りこんだ可能性が考えられる。(3) の場合はその場所での使用や放棄による可能性が高い。

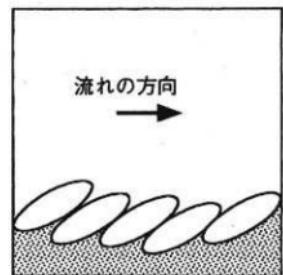
粒径淘汰の部分で述べたように、水流によって物が運ばれる場合、流れの強さに応じた粒径のものが運ばれる。土器は岩石に比べると若干密度は小さいものの、これが流れるためにはある程度強い流れが必要である。したがって、泥と土器片が挙動を共にすることは（高密度の泥流という特殊条件を除いて）あり得ない。また、土器のみが流されてくるという状況もあり得ないので、泥層を伴わずに疊層上面に土器が集中する場合もそれが流されてきたということはまずあり得ない。

このように土器の出土パターンによって、その埋没過程をある程度推定できる。

いずれの場合においても、堆積時期より古い時代の遺物が混入する可能性がある。河川堆積層の場合、同深度でも水平線方向で堆積時期が異なることがあるので、同一層であるかどうかの確認が重要である。同一層であれば、全体の傾向と比べて明らかに古い時期の遺物が入ってくる場合には、その量の多少に関わらず「二次堆積物」とみなして堆積時期を検討する上では無視することが出来る。逆に、新しい時期の異物が混入する場合は例え少量であっても無視できない。

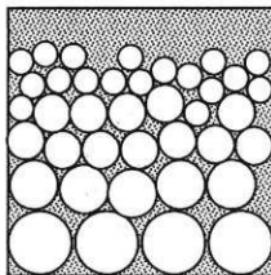
1999. 9. 26

図1



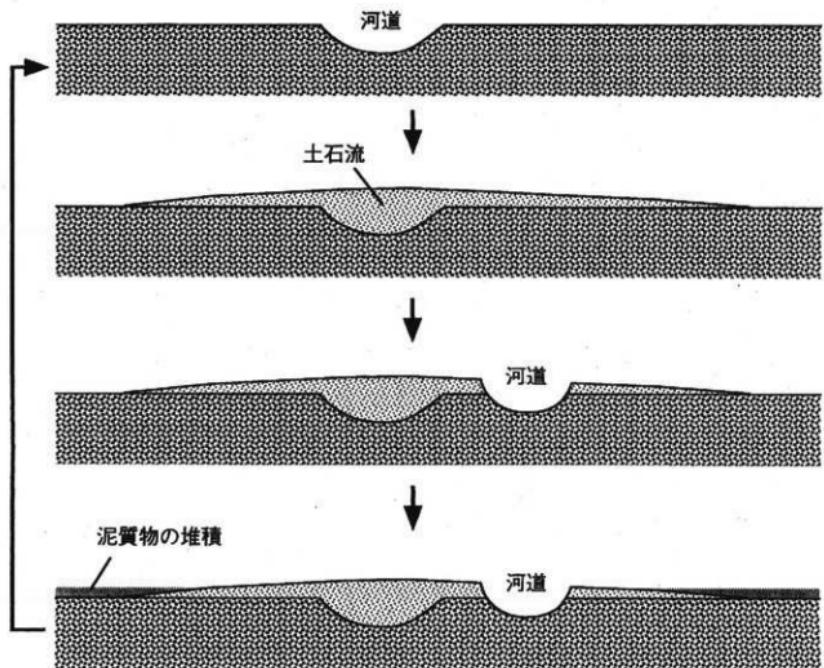
配列構造 (インブリケーション)

図2



級化構造 (グレーディング)

図2



扇状地発達のイメージ (扇状地の横断面)

特論 2

酒屋原遺跡出土木製品の樹種調査について

古野 翔

(島根大学総合理工学部)

益田市美都町仙道地内にある「酒屋原地区」のは場整備事業に伴って酒屋原遺跡から出土した木製品の樹種調査を実施したので、その結果を報告する。

本遺跡は、奈良・平安時代を中心とする古代役所跡および中世の豪族館跡であったと推測されている。出土品には大量の土器、陶器、陶磁器等のほか、下駄などの木製品等も出土した。

各木製品の3断面の薄切片を光学顕微鏡で観察することによって樹種を同定した。その結果を表1に示す。樹種を同定した解剖学的な根拠を付記し、また各木製品の3断面の顕微鏡写真を図版1～図版4に示す。プレパラート標本は益田市教育委員会に保管されている。

表1 酒屋原遺跡出土木製品の樹種

試料番号	樹種名	製品名
289	スギ	下駄
290	スギ	下駄
291	ヒノキ属	下駄
292	スギ	下駄
293	スギ	案?
294	スギ	その他
295	ヒノキ属	その他
296	ヒノキ属	その他
297	スギ	その他
298	スギ	その他
299	スギ	その他
300	スギ	その他

樹種識別の解剖学的根拠

1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科)

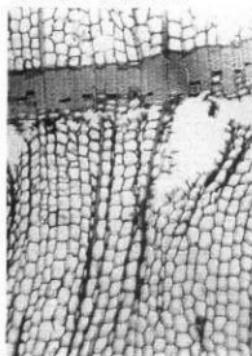
構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が早・晩材の移行部ないし晩材部に散在し、時に接線状配列の傾向を示す。分野壁孔は典型的なスギ型を示し、1分野に通常2個存在する。

2) ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp. (ヒノキ科)

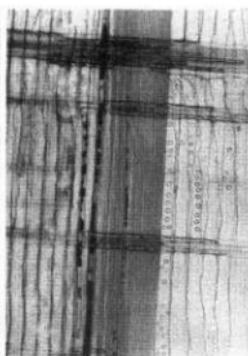
構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかである。晩材幅は狭い。樹脂細胞が晩材部に偏在し、時に接線状配列の傾向を示す。分野壁孔は典型的なヒノキ型を示し、1分野に通常2個存在する。

図版 1

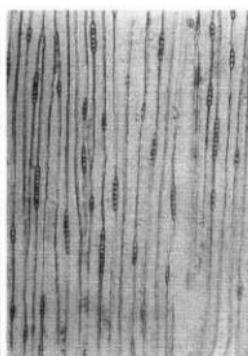
No. 289 (下駄) スギ



横断面 × 55

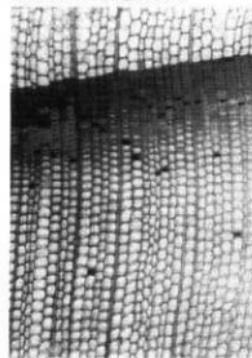


放射断面 × 55

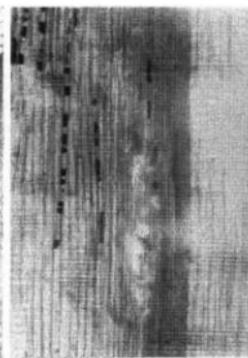


接線断面 × 55

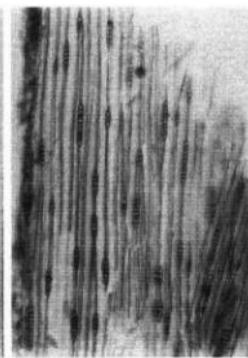
No. 290 (下駄) スギ



横断面 × 55

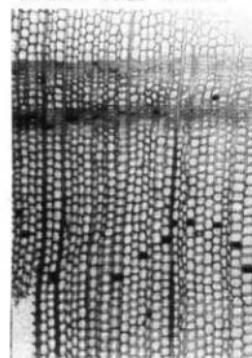


放射断面 × 55

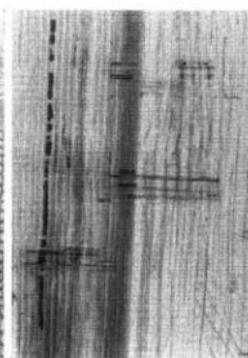


接線断面 × 55

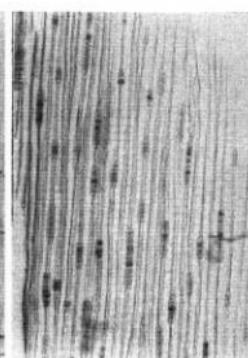
No. 291 (下駄) ヒノキ属



横断面 × 55

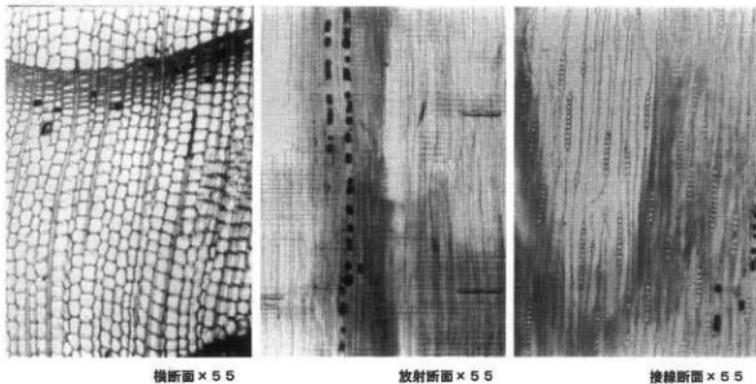


放射断面 × 55

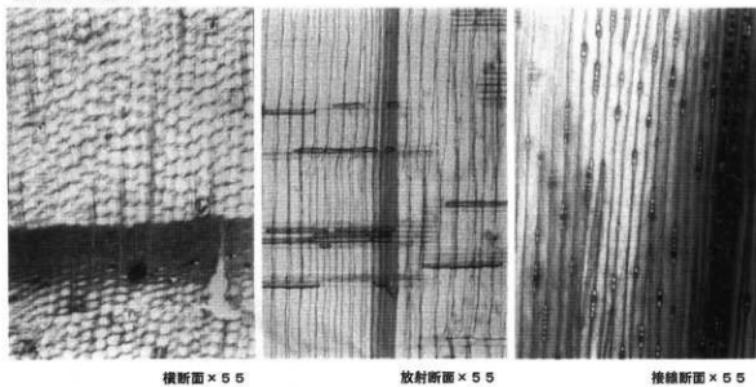


接線断面 × 55

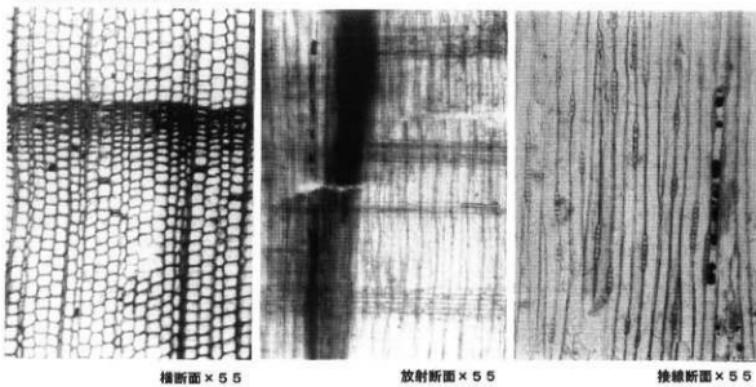
No. 292 (下趾) スギ



No. 293 (案?) スギ

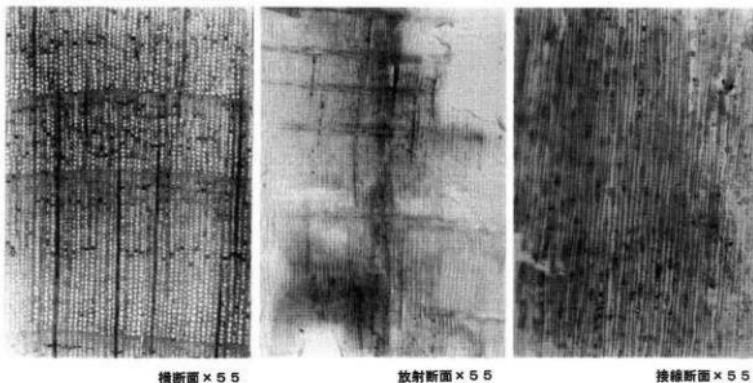


No. 294 (その他) スギ

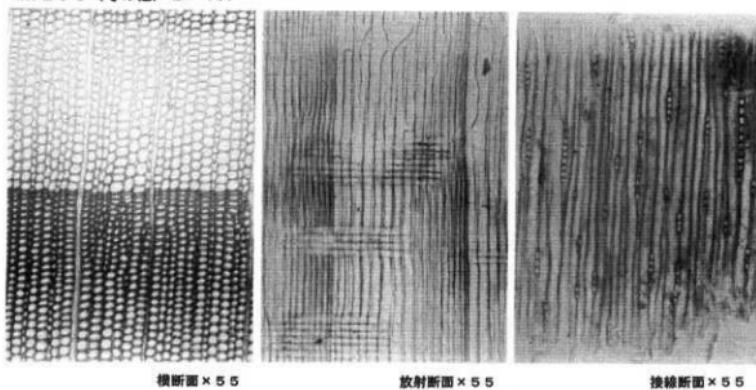


図版3

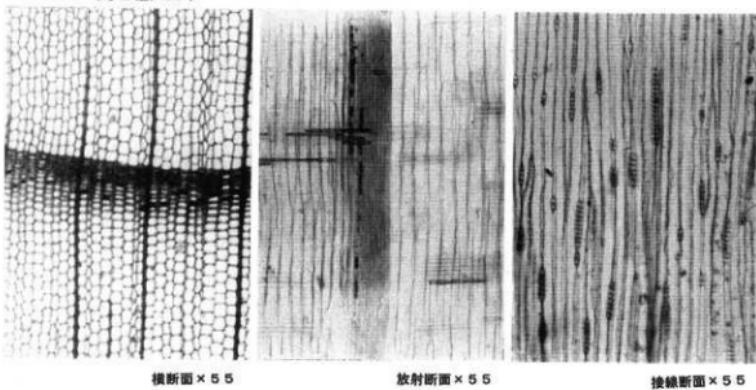
No. 295 (その他) ヒノキ属



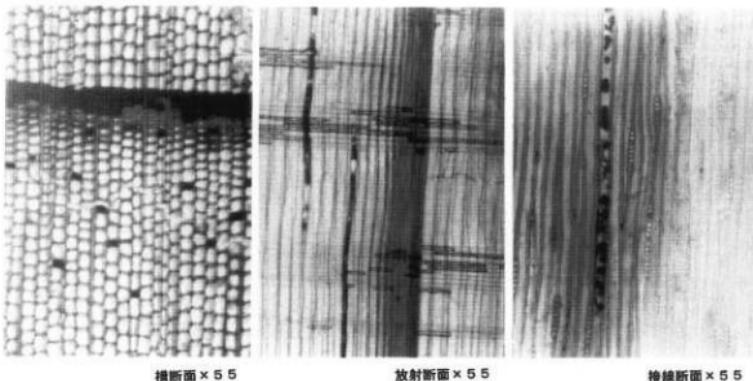
No. 296 (その他) ヒノキ属



No. 297 (その他) スギ



No. 298 (その他) スギ

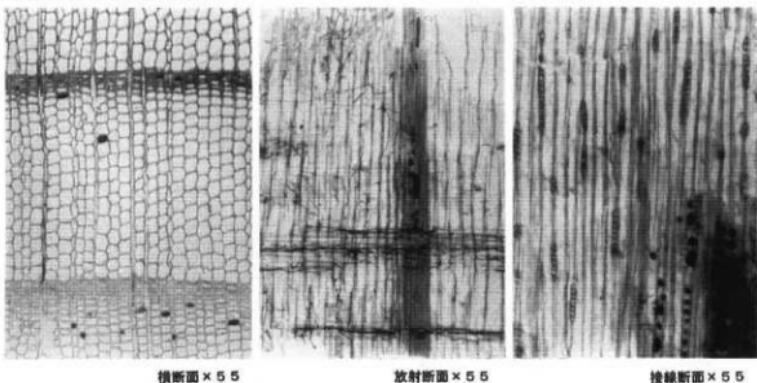


横断面 × 55

放射断面 × 55

接線断面 × 55

No. 299 (その他) スギ

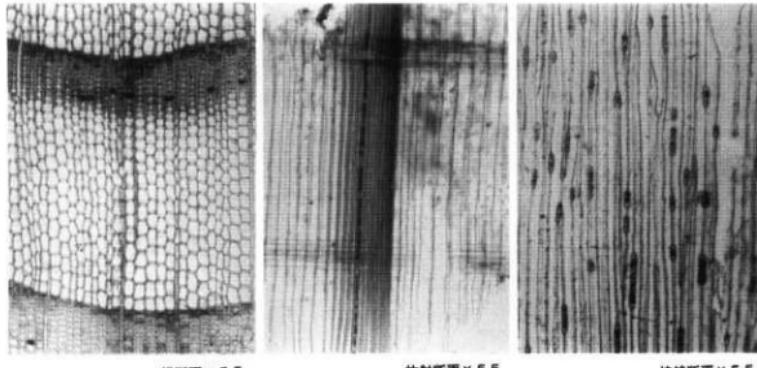


横断面 × 55

放射断面 × 55

接線断面 × 55

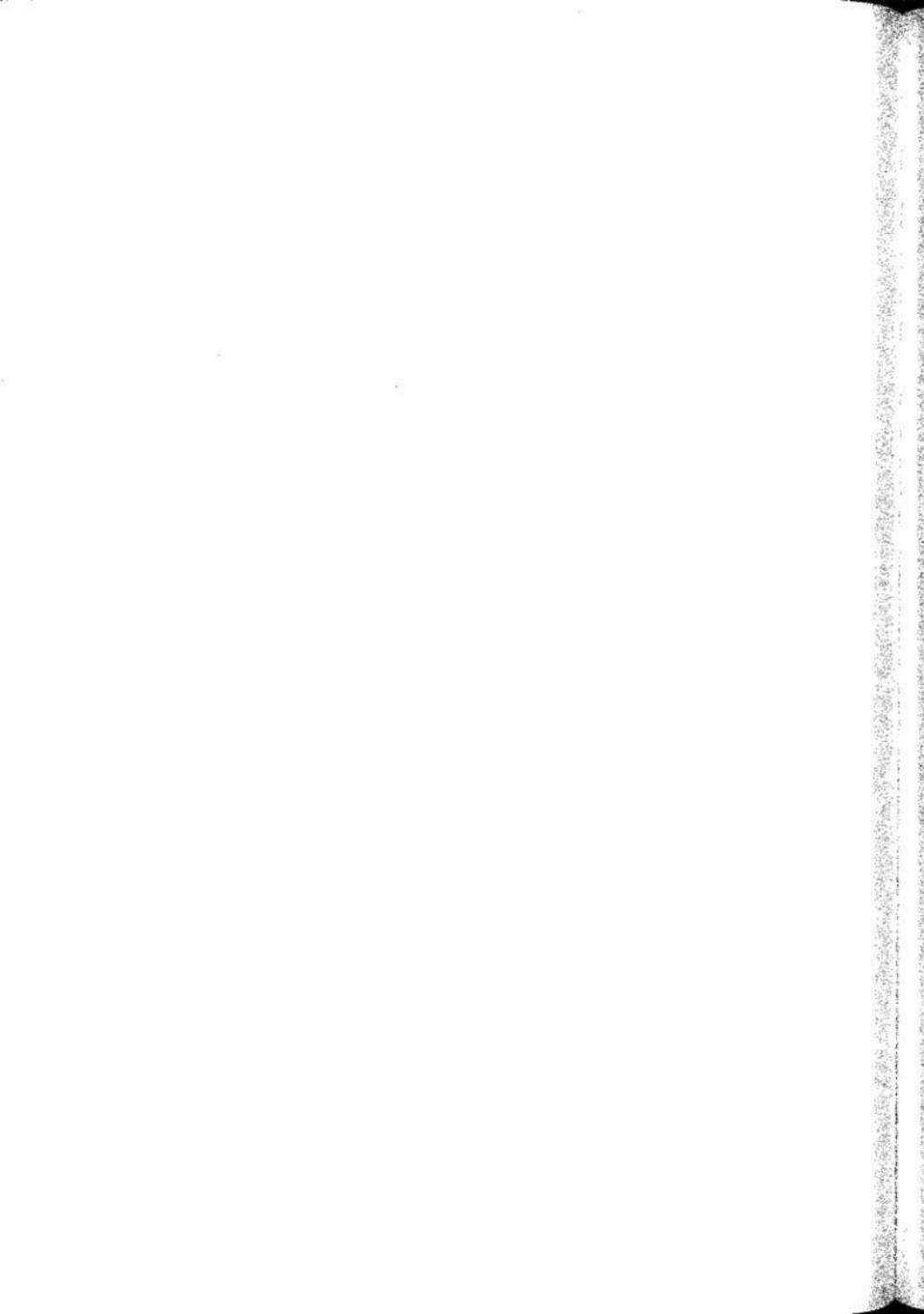
No. 300 (その他) スギ



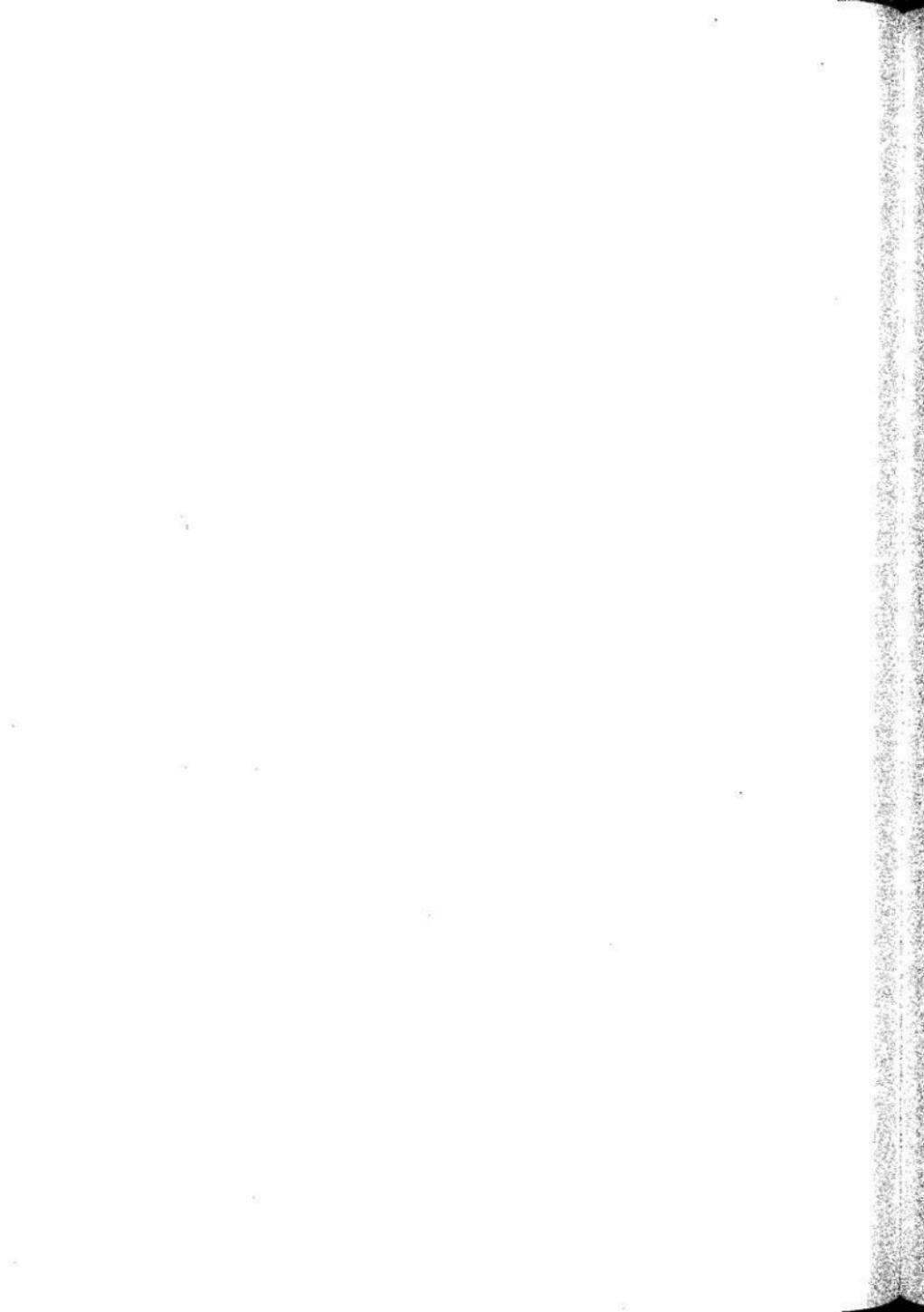
横断面 × 55

放射断面 × 55

接線断面 × 55



写 真 図 版





酒屋原遺跡の全景（西方から東方を望む）

中央広場手前が1区、右が2区

図版 II



遺跡の全景（西上方より）



1区（左側）、2区（右側）の全景（南西上方より）



1区=A～D区のピット群・SD01・SR01（上方より）



1区石組遺構（SR01・02）の全景（上方より、右下SR02）